THE CENTRAL REVIEW

中央公論

第廿二年　第二號

(第二百五十號)

近刊豫告

明治闇黑史は、表面の事實に耳を假さずして常に裏面の消息に注目せる明治年間の活歷史なり、權貴者と浪人、勢力者と無勢力者、强者と弱者とが感情と利害との衝突に依り暗鬪せる時代推移の眞相を描寫せる社會史なり

有磯逸郎著

明治闇黑史

紙數約四百頁

上卷

には、明治新政府の創設に筆を着け、維新派と復古派の二大潮流を擧げて、公家と浪人、藩主と藩士との衝突を描き、横井平四郎の横殺、廣澤眞臣の慘殺より、愛宕事件を中心として當時全國に彌蔓せる復古派の面目を發揮す。其の前後に、圓海坊の奥羽十七藩同盟の劃策あり、雲井龍雄の叛あり、大村益次郎の襲擊を前提として、長州騎兵隊の暴動あり、掉尾の運動として丸山作樂の朝鮮計劃あり

中卷

には、征韓論破裂より筆を起こし、全國に磅礴せる士族の反抗運動に入りて、西南戰役の大破裂に筆を收めたり。其の間に江藤新平の叛あり、熊本の神風連の叛、前原一誠の叛あり、前原と連絡せる永岡久茂の思案橋事件、其の後を承け、西南戰役に至りて、士族の黨爰に全敗す。然かも之を前にしては、芝增上寺の燒拂あり、岩倉具視の要擊あり、後には林有造等の政府顚覆運動あり、竹橋暴動あり

下卷

には、自由民權論を中心として、初めて我國に起りたる國民大運動を紹介す。立志社及嚶鳴社に依りて鼓吹せられたる自由民權論の勃興は、政黨の現出を促がし、然かも政黨の挫折に依りて、政界再び闇黑に陷り、秘密結社の類四方に起こる。福島事件を先驅として、群馬事件、加波山事件、秩父暴動、飯田事件、名古屋事件、靜岡事件等相繼いて起り、大井憲太郎等の大阪事件に至りて、僅に一段落を告ぐ。

潛める事象の發見は愈よ出でゝ愈よ新に著者をして筆を擱くに暇あらざらしめぬ、拙速は功遲に劣る、一面期に後れたる誇あるところ、其處ぞ完璧の誇の伏する所なるを信ず。

發行所　東京本郷區西片町　反省社

四月一日 中央公論 發行

春期大附録號

豫告

我「中央公論」は來る四月一日を以て春期大附録號を發行せんとし左の諸大家より寄稿の快諾を得たり。

附録小説

幸田露伴氏
泉鏡花氏
小栗風葉氏
徳田秋聲氏
柳川春葉氏
佐藤紅綠氏

尚論文に於ては現代第一流の文章家を網羅せんと欲し、續々寄稿依頼中也



中央公論第二十二年第二號目次



文學博士 中島力造先生編 ◉讀書會印行 第二輯下卷新刊

倫理・心理・宗教・教育・社會學・哲學 泰西新著梗概

第一輯上下第二輯上下各壹册每册定價金五拾錢郵税各六錢

世界思潮の津梁として學界に推奬せらる丶本書は今や第二輯下卷を發刊せり。蓋し各專門學者の手になれる解説の忠實なると批評の剴切なるとは本書の特色として夙に江湖の認識せらる丶所ならむ。而して今本卷に採錄せられたるものを擧げんに、シラーの人生主義は現時思想界に洶湧の波瀾を起せるプラグマテイズムの主張にして人の耳目を一新するに足るべくスタウトの心理學は亦たプラグマテイズムの思潮に棹して精神現象に一新説明を試みたるものなり。若し夫れカルマンの帝國主義の倫理に至ては議論斬新、行文奔放、眞に是れ帝國主義の一曉鐘と云ふべくワルレーゼルの自我の問題は認識論及び形而上學の根本問題に深邃なる解釋を與へたるもの而してハクスレーの進化論と倫理學は道德法と自然法との衝突より來る人生の悲劇を論じたるものにして、苟も人生問題に留意するもの豈に一顧する所なくして可ならんや。

第一輯上卷目次

第一輯下卷目次

第二輯上卷目次

第二輯下卷目次

發行所 東京日本橋區通三丁目 振替貯金口座一七一九 成美堂
東京京橋區南傳馬町二 振替貯金口座二八〇九 目黑書店

文學博士 芳賀矢一先生校閲
中等教員養成所講師 友田宜剛先生編述

中學校用作文教科書

(全五冊)

第一巻(八版) 定價金貳拾五錢 郵税四錢
第二巻(六版) 定價金三拾錢 郵税四錢
第三巻(五版) 定價金三拾錢 郵税四錢
第四巻(五版) 定價金參拾五錢 郵税六錢
第五巻(四版) 定價金四拾錢 郵税四錢

文部省撿定濟

中等教育作文科に初めて教科書の必須なるを唱へ、最完全に其需要を充し、最好評を博し最多數に採用せられたるは此「中學校用作文教科書」とす是れ芳賀博士友田教授の多年の立案實驗とによりて編まれたるものにして、其の斬新なる構想は慥かに同教科の上に新生面を開きたるものといふべし。この特色ある本書は實に(い)文話摸範文應用を交錯して新密なる關係を説き(ろ)諸學科との連絡を圖り(は)思想の敍述に密なる口語との關係を明にし(に)思想の發展の補助としては繪書を挿み(ほ)尙作文上の注意として文學、文法、論理修辭上の諸注意を説き(へ)復文、譯文の一般を知らしむる等その懇切に難簡の程度を準し、時間の伸縮等に至る迄嚴密なる注意を以て編まれたり。若し夫れ此書によりて教授せば幾多の説明と時間とを省き得て生徒の心力筆力の自ら發展上達せしむるとを期せり。宜也本書出てゝ未だ三歲採用の中學、師範百十餘校に及び各卷數版を重ぬるの盛況を得たり乞ふ一層の御採用あらんことを。

發兌元 東京神田駿河臺 お茶の水橋角 電話本局二一九九九番 振替口座一二三一三番 光融館



第二十二年
第二號
二百十五號

政治海の暗流

今期議會は結局無事なるべし、然るも無事なるは表面のみ、裏面には暗潮の急流して多少波瀾を起すものこれなしとせず、各黨派の間に行はるゝ機略之をして然らしむれば也、今少しく觀測して世上の參考とせん。

是までの政府は大抵衆議院に對する政略に全力を注ぎ民間黨の操縱に幾んど腦漿を絞るの例なりしも、今の內閣は最大黨たる政友會を提げ、大同倶樂部と提携して絕對の多數を制するが故に、衆議院には幾んど寸毫も顧慮する所なしと雖も、貴族院には乃ち然る能はず、難關は寧ろ貴族院に在るの狀態にして之に對する苦心は實に尋常ならざるものなくんばあらず、隨つて大同倶樂部の匿名持主にして兼ねて貴族院に多數を制する山縣系に對しては、一顰一笑と雖も敢てす可らざる地位に立つものと謂べし、別語を

以ていへば、山系縣のために幾んど死命を制せらるゝものと做すも斷じて失當に非ず。

故に西園寺内閣の死命を制する地位にある山縣系の進退行藏こそ、現内閣安危存亡の由て決する所たりとせざる可らず。

山縣系の中心たる桂伯は、曾て先例なき長命の内閣を支持し、其の間二たび日英同盟を訂結し又露國と戰ふて絕大の偉業を奏したるも、末路ポーツマス講和のため痛く俗望を失ひ、創痍今に癒へざるものあり、故に姑らく謙抑して隱忍し、現内閣の漸くにして自から其の地位を去らざるを得ざるの機會を俟ち、再び好意的に政權を繼承して以て更らに政友會の援助を得るとを期するなるべし、苟くも現在の狀態（山縣系の現内閣の死命を制する）にして甚だしき變化なき限りは、勉强して現内閣を助け、以て徐かに機會の到來を俟つを智なりとすべし、山縣系は近き將來に於て貴族院に多數を失ふの虞なきを得るも、衆議院の多數を制するとは容易に非ず、一大同俱樂部あるも、頭數八十を超えず、若し政友會憲政本黨等所謂民黨聯合を再演せば、竟に衆議院を奈何ともす可らず、乃ち現内閣の好意を喪はず、再び政友會の援助を求むるとは、比較的最も自然にして且つ便宜とする所ならざる可らず。

形勢の揣摩に長ぜる桂伯は、此の推移を打算して暫らく閑雲野鶴に伴ふべし、曾禰氏亦然るべし、但だ清浦、大浦の二氏も亦能く然るや否や、疑問なり、山縣系をして桂伯の期するが如く機會の到來を俟たしめず、蹶起して自から機會を作らんとする、二氏或は之を企てざるべきや否や、思ふに今期議會に於ける機略の中心は二氏にあるべし、少くも二氏と無關係なる能はざるべし。

清浦氏は詩を作り、筆札を善くし。兼て多少書畫の鑑識あり、文雅を以て多く其の人格を修飾するも實は老猾にして奇略を好み、また權勢を戀ふること人に絕す、大浦氏に至ては何等の趣味嗜好を有せず、單に政權を把握して政務を視るを以て唯一無二の嗜好娛樂とするが故に、到底永く閑處に在るの忍耐性無し、其の自から奉ずることは廉潔なるも、山縣系の特色として目的のためには手段を擇ばざるの傾向あり、一種任俠の氣風を佩びて然諾を重んじ、之を果すがためには往々理義を顧慮せざるに至る、而して其の地方官及び郡部の警察に於ける勢力は頗ぶる大にして、氏は此の勢力を支持し守護するがためにも、永く政權に遠ざかることを不利なりとするものゝ如し。

殊に衆議院に於ける山縣系の手足たる大同倶樂部をして、少くも明春の總選擧に際して不利の地位に立たしめざらんことは、清浦氏大浦氏の最も關心する所なるべし、總選擧に當りて自黨自派のため、政權を使用し殊に警察權を行使して反對派を抑ゆるが如きは、大浦氏の果決敢行する處にして、從來其の恩惠に浴したるもの少からざるに似たり、然るも大同倶樂部なるもの尙ほ烏合の衆たるを免かれずして、選擧區の地盤の堅固なるは甚だ少し、若し今の內閣にして依然明年まで繼續せんか、假令全然選擧に干涉せざるも、政友會の勢力は自然に增大すべくして、大同倶樂部員の如きは其の根柢大に動搖せざらんとするも得べからず、是れ二氏が最も憂慮する所なるべく、此がためにも速かに政權を得んとする野心自から燃ゆるが如くなるべき乎

且つ二氏は能く桂伯の心事を解せるも、形勢を煽し且つ促がして急ならしめば、桂伯と雖も意を枉げ

て起たざるを得ざるに至るとすべし、顧ふに二氏は政友會を敵とするの甚だ恐るゝに足らざるを信ずるものなるべし、二氏以爲らく、憲政本黨多年政權に熱し、今や渴して盜泉を擇ばざらんとす、啖はすに内閣の一二席を以てせば、彼等餓虎の肉に走るが如く來り與みすべし、大同倶樂部を根據として憲政本黨を與黨とせば、假令衆議院に多數を制し得ざるも、彼の慣用手段を施さば、政友會を四分五裂せしむると太だ難からず、假令四分五裂し得ざるも、其の一角を劈き取りて我が有とする易々たるのみ、況んや無所屬の徒を吸集するをや、斯の如くせば衆議院に多數を制すると必らずしも期しがたきに非ず、天下の俗情未だポーツマス講和に慊然たるも、卅八年九月の燒打事件に憤怨するもの尙ほ多きも、苟くも貴衆兩院に多數を制せば、天下のこともまた甚だ憂ふるに足らず、斯くして明春の總選擧には極力自黨を助けて以て勢力を擴張すべきのみと。

且つ玆に至らば、桂伯も竟に起て内閣の首班に立たざるを得ずとは、二氏の推度する所なるべし。政友會と大同倶樂部を左右にして。容易に衆議院に多數を制すると、大同倶樂部憲政本黨の外尙ほ政友會を裂き無所屬を吸集して以て辛ふじて多數を制せんとすると、其の難易便否一見して明白なるも易を捨てゝ難を採り、便を去つて否を擇び、自から政黨操縱に全力を注きて能事了れりとするの愚を再演すると、淸浦氏大浦氏に在ては必らずしも避くるに足らずとせん乎、政權に執着するとと甚だ深く、之がため倒行逆施も亦敢て辭せざる、二氏本來の特色なれば也。

政界の慧星を以て自から任ずるの士、常に權變を好みて天下に事あるを悅ぶの徒は、必らず二氏を煽

揚するに躊躇せざるべく、所謂前途の發展と唱へて、何等かの奇變を見んと僥倖する憲政本黨の策士等、また或は二氏を圍繞して、陰に陽に斯く企てしめんと圖るべし。吾人の所謂暗潮の急流と稱するものの是れ之を謂ふ。

夫れ大戰役の後を承けて民心休止を欲すること切なりしも、政治界の平凡永きに亘りて人心を倦ましむるが如きは、決して望ましきことにあらず、去れば現内閣も必至の勢ひに制せられ且つ良民駕御のため、此の二ヶ年間に兎も角處女を學べりと雖も、次期の議會には運命を賭しても雄飛すべし、必らずや脱兎たることを期待すべし、吾人の信ずる處によれば、現内閣が眞に其の力量を示し政治界の平凡を破るの途は、國家歳入の調整にして或は大に增税するか、又は或る專賣法を斷行して財政の根本を確立せんとすべし、局外者として公平に評すれば、去年一月七日現内閣組織以來未だ甚だしき秕政あらず、却つて善を爲すに急なるが如く、官吏の淘汰を公平にして老朽無能を斥け有爲の俊材を登用するが如き、彌縫とはいひ能く財政を鹽梅して未だ大に信用を世界に失はざるが如き、稱すべき措置少からず、之を以て民望なき無能の内閣と做すは酷評のみ。

故に之を敵とするもの亦能く形勢の趨向を察し、確然たる政策を標榜して以て堂々として爭ふべし、是れ立憲政治の本義也、徒らに機略を弄し奇變を悦ぶが如き、而して其の目的國家大政策の上にあらずして、單に私家の權勢のためにするが如きは、斷じて憲政の前途に貢獻する所以にはあらず、山縣系の士及び各政黨の士深く思はざる可らず、殊に憲政の美を成すの志ある政黨々派の志士は、深く思はざる

可らず。

理想的新聞記者

倫敦タイムスは英國の大新聞也、否世界の大新聞也、其の格調の高くして大なる、其の文章用語の清新なる、常に最良なる流行英語の原たるに於ても知るべし、蓋し朝野識者の意見を叩き盡し、最も英國のため人道のため最良と認むるものを抽き來りて主張し其の間一點の私心なく、また半點の偏する所なきが故に、論旨穩健にしも而して剴切、能く英國の輿論を左右し、世界の大勢を風動するのみ。

吾人は必らずしも倫敦タイムスを理想の新聞紙なりとは崇拜せず、然るも我が國に未だ一のタイムスなきは惜まざる能はず、憚りなく吾人の見をいへば、中外の形勢に精通して常に事實を離れず、而かも哲學的精透の見を以て之を剖析し判斷する識力を具へ、而して其の地位は純獨立にして何等偏する處なく、所謂權勢を憚からず、富豪を恐れず、鼎鑊前にあるも色を變せず、刀鋸後に臨むも心を動かさゞる底の大勇猛心ありて、而して筆路暢達、行文穩雅なるものを以て理想的新聞記者とす、吾人知狹く見聞汎からざるか、不幸にして未だ多く斯の如き人に會せず、僅かに三宅雪嶺氏の略々之に近きを知るの

み。

氏は哲學專攻を以て文學博士たり、若し其の學問を以て教授たらば、得る所の俸祿決して勅任以下にはあらじ、現に京都大學文科長として迎へられたるも、固辭して應ぜざりしといふ、氏は蓋し新聞記者を以て自個の天職と信じ、而して新聞記者の素より貧なるべくして富に遠きの甚だしきを悟れるが如く、縕袍を着て耻ぢず、徒歩を常として曾て求むる所あらざりき、然るに半生筆を雜誌『日本人』と『日本』新聞とに執りて、時事を視ると最も細かに、政界の情誼より宗教界教育界文藝界の事實に至るまで、幾んど精通せざるとなく（經濟財政には寧ろ迂なりしも）而して其の論を行ふや、總て事實の上に立てるが故に、一點も空疎の處なく、所謂麻姑の痒を搔くが如くなりき、此の一事は日露戰役以來、殊にポーツマス談判の前後に方つて證明せられ、最も俗論と趣を異にすると著るしくして、識者の嘆服する頗ぶる大なりき。且つ其の文章迂餘曲折を極めて、言はんと欲する所を言ひ、而かも一片の衒氣なく、半點の俗氣なし、單に文章としても亦一代の妙品たるを失はず。

殊に氏の最大なる强味は、一介の新聞記者として毫末も他に干むる所なきにあり、凡そ他に干むるものは弱き處あり、唐朝第一の文章家韓愈と雖も、其の干むる所あるや、言旨頗ぶる雄大なるも尙ほ其の深き奥には弱き所なき能はず、我が三宅氏に至ては、淸貧を分とし、僅かに衣食すれば足れりとして、曾て干むる所あらず、玆に於てか媚ぶるの要なく、强請する要なく、俗情に投ずるの要なく、唯だ言はんと欲するまゝに言ひ、論ぜんと欲するまゝに論じて、頂天立地、寸分だも枉ぐる所あらず、遒くる所

あらず、是れ氏の最も高くして而して又最も大なる所以なりとす。

若し其の文品の妙、才華の麗なるより言はゞ、德富蘇峰氏は遙かに三宅氏の上に在り、然るに蘇峰氏は權豪に交はりて權豪のためにす、假令世人のいふが如く全然藩閥の機關たらずとするも、少くも交遊に制せらるゝ所あり、强ひて論じ枉げて辯ずる所一再に止まらず、純獨立の記者に非ざるとは事實也、事を論ずる雄渾にして盡さゞるなく、理を擧げ辯を推して敵に逃避の餘地なからしむるの手段、朝比奈碌堂氏素より遙かに三宅氏の上に在り、然るに碌堂氏は猶ほ蘇峰氏の如きのみ、島田三郎氏も亦正論家の一にして其の不羈の論往々人を動かすと雖も、尙ほ山縣侯、澁澤男、益田氏等とは、背く可らざる情誼を有して、之を打つ筆鋒自から鈍らざるを得ず、時としては努めて其の美點を擧げざるを得ざると亦之なきに非ず、池邊吉太郎氏また新聞記者として一頭地を拔くも、其の地位や到底我が三宅氏と同日に談ず可らず。若し單に純獨立の地步よりいはゞ、黑岩涙香氏のみ頗ぶる三宅氏に同じきも、氏や時事を論ずるを以て本分とせず、否時事に就ては寧ろ一の昧者たり、新聞記者として三宅氏の如く純の又純なるのもには非ず。

近時新聞記者の地位の賤せられしや甚だし、勢家富豪の密かに之に賂するもの、或は株劵を以て或は美人醇酒を以て、其の口を箝し、筆を枉げしむるもの幾んど枚擧すべからず、甚だしきは株式市場の相場を昂低せしむるがため、新聞記者を使役して所謂輿論なるものを製造する作略家もありといふ、抑も新聞記者も亦人のみ、其の職分の貴くして而して名譽なる、少くも官吏と併行し、僧侶と追隨するが故

に清貧を以て其の分と做し、俗間の流行を追ふが如きは避けざる可らざるも、其の多數は未だ悟りて玆に徹する能はず、滔々相率ひて俗世間の俗塵を逐ひ、黄金を貴び、驕奢を悦ぶがために、乃ち他に誘惑せられて竟に其の地位を賊するに至れるのみ、此の時に方りて我が三宅氏を看るに、其の截然として異彩ある、而して其の異彩の甚だ貴くして重んずべき、殊に人を感ぜしむると深からざるを得ざる也。

新聞紙は商品に非ず、其の營業税を課せられざるに視るも、純平たる商品に非ざるや論なし、然れども商品主義を極端まで使用して俗情に媚び、俗人の好奇心に投ずるを主眼とする、米國新聞の流風は、今や滔々として我が全國の新聞紙を襲ひ、各新聞紙が競ふて俗情に媚び、俗人の好奇心に投ずべき記事を以て充滿するも足れりとせず、更に景物として簞笥長持を添へ、金銀、反物、帶地、傘、下駄、齒磨、香水をも添へて幾んど、勸工場の賣出をして三舍を避けしむるが如し、是れ新聞紙の墮落也。

米國の新聞雜誌は、今や我が藝娼妓と幾んど同等に視做すべき女俳優の肖像、半裸體畫を掲ぐると盛にして、スタンダアド、コスモポリタン、メトロポリタンの諸雜誌、此がために大なる成功を得。レビユー、オブ、レビユーの如き上品なる雜誌をも動かさんとし、紐育ヘラルドまでもウヲールド、ジヤアナルの諸新聞紙と競爭して、全紙面を美人畫に費さんとす、而して此の流風また漸く我れに及ばんとし、無用の寫眞。無意味の挿畫を掲ぐる新聞紙甚だ多く、其の竟に一變して藝妓の恣態、娼妓舞妓の肖像に至るべきや期して俟つべきに似たり。

此の時に方りて、眞に理想的新聞記者出て、俗風を打破して氣品高潔なる新聞紙を作るとは、恐らく

ば天下の心あるものの齊しく切望する所なるべし、惜むべし、一の三宅雪嶺氏すら『日本』新聞に容れらるゝ能はず、其の一味を率ひて竟に新聞社會より退かざるを得ざるに至りしことを。

吾人は素より三宅氏の在りし時の『日本』新聞を以て理想的新聞紙とは思惟する能はず、其の記事の信用なく、又取捨の宜しきを得ざりしこと、實に新聞紙として第三流第四流にありき、唯だ三宅氏の論文に至ては天下の絶品にして、而して三宅氏の新聞記者としての人格に至ては、幾んど理想的新聞記者として心より之を崇敬せざる能はざるのみ。

近時新聞紙の狀態に就て吾人實に深慨あり、唯だ一の三宅雪嶺氏ありしも、今や新聞社會を退けるに至て、吾人如何ぞ痛惜に耐えん、抑もまた世道人心のために非ざる也。



公論

教界の禍根を論ず

文學博士　松本文三郎

一、

此には廣く教育といふ字を用いたが、余輩の今論ぜんとする所は全く佛教界に限るので、他の基督教や、神道のことは一切之を不問に附する覺悟である。勿論余輩の云ふ所の禍根は、佛教のみならず、基督教や神道にも一樣に斷言し得る場合もあらうと思ふが、此等の宗教には亦其れ〳〵特殊の事情も存することであるから、一概に之を論じ去る譯には行かぬ點もある。今此等を併せ論ずることも必要ではあるが、斯くの如くにしては唯徒らに議論の複雜を來すのみであるから、姑らく問題を佛教にのみ限らうと思ふのである。又教界といつて佛教のことのみを論ずるのは甚だ不適當のやうにも感ぜらるゝが、別に深い意味はない。神道や基督教は、宗教として見做すに足らぬといふやうな理由も固よりあるべき筈てはないが、佛教は我邦の傳來に於て基督教よりも遙かに古く、人心に感染することも亦頗る大なるものがあり、日本の文化は所有方面に於て佛教と最も密接なる關係を有つて居るのであるから、此點に於て佛教は新しく傳來した基督教や、假令ひ古くからはあつても、宗教として國民の意識に深い印象を與ふることの出來なかつた神道などの到底比較し得べからざる勢力を有して居るのである。我邦の宗教といへば誰れでも先づ第一には指を佛教に屈せねばならないのであるから、宗教界といつて佛教のことのみを論じても必らずしも不適當ではなからうかとも考へられる。而して我國民たるものは、此佛教の消長に關しては決して等閑に看過すべきではない、苟くも佛教が歷史上我國民の思想文化と密接な關係を有つて居ることを知れば、其消長の暗々裡に國民全體の上に大なる影響を與ふべきことは亦論を俟たぬ。だからして

國民は其宗派の如何に關はらず、又其信仰の異同を論ぜず、均しく細心の注意を要することである。殊に社會活動の中心骨髓ともなり、又比較的常に健全なる思想を有する中流社會の人士は、不斷之に向つて仔細の觀察を怠らず、其善良なる方面に向ふ時は、愈之を助長するに努め、若し又不幸にして其方向を誤まりたる場合には、出來得る限りの手段を盡くして、之をして再び善良なる方面に復歸せしむるやうに力を盡くさねばならぬ、是れが國民に對する一の義務であらうと思ふ。

　我が日本は東洋の佛敎國であることは、常に我國民の口に筆に唱ふる所であるのみではなく、泰西人も亦均しく之を認めて居ることである。而して東洋の他の佛敎國、例之へば錫崙や、シャムや、ビルマのやうな國民は全く此點に於て我邦を羨慕措かざるのである。余輩が先年錫崙に巡遊した時、屢コロンボ附近の小さな寺院に行つたことがあるが、此寺院の內には石板摺の我が兩陛下の御影を掛けて居るのを見た、のみならず或佛敎徒は如何樣な雜役にでも從事するから日本へ伴つて行て吳れないかといふことを請求した、之に由つて見ても彼等佛敎徒が如何に我邦を慕つて居るかといふことが判るのである。又特に余輩の感じたのは、錫崙の古の都で、コロンボからは約百六十哩北に當りアヌラダプラに旅行した時である。此アヌラダプラといふ處は彼有名なマヒンダ王子が印度から始めて佛敎を錫崙に傳來した地で舊は立派であつたが、今は實に寂漠たる僻邑に過ぎぬ。併し當時印度佛陀伽耶から菩提樹の一枝を持ち來つて此に移植したといふ、天を蔽ふばかりの菩提樹もあり、其他遺跡の極めて多い處であるから、私も此等の遺跡を探ぐるが爲めに彼處に行つたのであるが、其時彼地の寺院といつても日本の寺院と違つて、宛も小さな岩屋のやうな處に過ぎないのである、が其處に一人の老僧が住して居つた。此老僧は說敎をする譯でもなければ每日定まつた仕事もない、單に遺跡を保管する爲めに此僻邑の岩屋に住して居るのである。所が偶日本人が訪問したのであるから、

彼の喜びは一通りでない、殆んど泣かん計りに歓喜し、走つて室内に入り、箧の裡から古色蒼然たる青銅の小貨數個を持ち來つて、是れは今より一千餘年以前の銅貨で、此地の塔の内から掘り出したものであるから、紀念として持ち歸つて吳れといひ、又別れに望んでは我が陛下の萬歳を祈り、併せて我が邦人の努力により、次第に佛教の天下に流布せんことを切望したのである、此等の事は單に余輩の經驗した一二の瑣細なことてはあるが、亦以て彼等が思想の一斑を推測することが出來やうと思ふ。

外人からしては此の如く我邦を以て佛教隆盛の一强國と見做され、大なる希望を抱かれて居るのであるが、現時我邦の佛教界は果して此觀察の誤らざることを證し、又此希望に辜負せざることを得べきであらうか、恐らく或ものは容赦なく直ちに此疑問に對しては、否の一語を以て酬んとするであらう。特に佛教に對し同情を寄せ、非常に熱心を有するものであつても、心の眞底には何處となく、肯定的の答を與ふるに躊躇するであらう。姑らく身を局外に置いて公平無私の眼を以て之を觀察すれば、如何しても現時我邦に於ける佛教の狀態は、好調に向つて居るとは斷言出來ないのである。勿論近年は海外布教といふことが次第に盛大となり、支那朝鮮樺太のやうな、我邦からは一葦海水を隔てた隣邦に布教使が派遣さるゝ計りでなく、遠くは北米に迄も渡航し、又尋常一樣の布教師が派遣せらるゝのみならず、比較的上流學識ある僧侶が、自から進んで彼地に趣き、遂には我邦に於ても有數の管長が親しく異人の間に布教せらるゝに至つたといふことは、文化の進步、航海の便が古代に比して非常に容易となつた結果とはいへ、昔時では法を求め、法を學ぶが爲めにこそ渡唐若しくは渡天したことはあるが、法を傳へんが爲めに海外に出たことはないのであるから、此事は實に佛教界の一大發展であつて、佛教の我邦に傳はつて以來未だ曾て有らざる顯象ともいはゞいひ得るのである。で若し今彼昔時の所有艱難苦楚を嘗め、唯眞に法を求めんが爲めに幾度か魚腹に葬られんとし、若

しくは虎狼の餌とならんとするをも顧みず、猛進勇往し幸ひにして九死に一生を得て歸り來つた高僧を地下に喚び起し、唯此一事を聽かしめたならば、彼必らず掌を打つて歡喜し、後生の小子畏るべしと贊嘆し、或は文珠普賢の再來なりといつて禮拜せらるゝかも知れぬ。が時勢は古今に於て天地懸隔するのであるから今の世に生長したものは、遺憾ながら彼等諸師を以て文珠普賢の再來とも思はなければ、又佛教界の大發展とも考へぬのである、彼等は海外に布教するとはいふものゝ、實は主として我同胞の海外にあるものゝ爲めに布教して居るのであつて、何等特殊の困難を感ぜぬのである、又偶ま言語を異にし、思想を異にするものゝ間に布教するとしても此等外人は多く好奇心か若しくは既に佛教なるものに對し熱心なる信仰を有するものであつて、今の世、彼等は必らずして彼傳道師を俟たずしても尙ほ之を知ることは出來るのである。好し又其人を俟たなければならない場合であつても、傳道師は單に法を談ずるが故に貴いのであつて、法を聽きさへすれば、傳道師自身には更らに用はないといふやうに傳道師と信者との間は極めて冷淡な關係に止まる。ので、昔の印度僧が支那に來つたり、支那僧が日本に渡つたり、若しくは日本の高僧が渡唐し歸り、又渡唐しなくても日本に於て之を學び、諸人の爲めに渴仰敬慕せられ、啻に法を明かにして居るといふ以外に、大なる價値を認められて居つたのとは大に其趣を異にするやうに思はれる。だから今の人も昔時の高僧諸師の行狀を觀れば、必らず其偉大なる點に感奮せざるを得ないのであるが、現時の傳道師にあつては、遺憾ながら未だ一事の人をして感奮興起せしむるやうな美譚が傳はつて居ないのである。要するに海外布教といふことは實に善い事ではあるが、畢竟時勢の必要に應じて出來なければならなかつたのであつて、之を以て到底佛教界の大發展とは斷言し得ないことは明かである。

又近時我邦に於ける一部青年の間に宗教熱が勃興し來つたのを見て、直ちに佛教其物が好調に向ふたといふやうに見做すのもあるやうであるか、是れも餘程疑

はしいことである。近時一部の青年の間には、社會や個人の事情によつて煩悶に陷ゐるものが隨分多くあるやうに思はれる、(煩悶の原因に就いては世人も多く之を論し、余輩も再度之を說いたことであるから、今更らに之を繰り返す必要はない。余輩の說に就いては拙著「宗教と哲學」の中「青年の煩悶に就いて」並びに昨年十一月發行の「新小說」の中「煩悶と自殺」を參照せられよ)。從つて此方面からして彼等が宗教心を刺激發動せしめ、何等か慰安を求めんとするのは事實である。此際宗教家も教育家と手を携へて、大に其手腕を奮ふべきであつて、徒らに彼等を嘲笑冷罵するのは決して宗教家として採るべき態度ではなく、飽くまでも彼等に同情し、彼等をして一日も早く慰安の途に導くやうに努むるのが即ち彼等の本務であらう。佛教家も此好機を逸せず、大に活動すれば、其手腕の如何によつて、他日我邦の中流社會を形成すべき國民の間に信仰の地盤を造ることが出來るのであるから、唯其個人を救濟するといふ計りでなく、布教の上から見ても甚だ有望の、又甚だ面白い事業といはなければならぬ。一部の少壯有爲の佛教家が孜々として此に努力して居るのは、社會の爲め賀すべきことであるのみならず、又宗教家としても先見の明あることゝ思ふ。然しながら余輩を以て之を見るに、是れは尙ほ以て佛教の好調に向ふたものとはなし得られぬ。何故かといふに第一彼等煩悶に陷ゐつたものゝ如き、明治の新教育を受けた青年に對し、眞に之を悅服せしめ、之に光明を授け、之に慰安の途を知らしめ、宛も佛當時の弟子が佛に對し、偉なる哉世尊の所說、初は美中は美終亦美、語義共に美なり、世尊の人に教ふる兩端を叩いて之を竭くし、盲も明を得、跛も立つを得、仆れたるは之を興し、隱れたるは之を顯はし、暗中燈を得て萬物の歷然とし見るべきに似たり等といへるが如き信心歡喜を得せしむるを得るものは、今日我邦の佛教家中果して幾人かあるべきであらう。勿論偉人は每世出づべき筈のものでもなければ、又何人に向つても絕世の偉人と同樣の功績を望むのは、寧ろ望むものゝ過には相違ない

が、併し現時の佛教家が今の青年に對し善く其法を明かにし、之をして慰安を得せしむることが出來なければ、畢竟彼等は宗教家の資格を失つて居るのである。如何に梵語や巴利語に精通して居つても、又如何に天台や華嚴の妙理を曉得して居つても、是れで以て直ちに宗教家たるの資格が出來るものではなく、これは唯學者として尊ぶべきであるが、宗教家とするに足らぬ。所が我邦では從來から教理の研究といふことは、甚だ變則的で又不完全ではありながら——隨分盛であつたが、實際的宗教家の養成は組織的には殆んど皆無の有樣であつた。だから今に於ても新教育を受けた青年に向つて、兎に角法を授くることの出來るものは僅かに指を屈するに過ぎないのである。此等僅少の人では如何に東奔西走、日に繼ぐに夜を以てした所が、全國に散布して居る煩悶者を醫することは非常に困難な事業であらうと思ふ。

第二に假令ひ彼等の努力によつて世の煩悶者が一切光明慰安を得たとしても、彼煩悶者なるものは、其個人の數に於てこそ可なり多いのであるが、之を以て全國青年に比すれば極めて少數の一部分に過ぎないことは論を俟たぬ。彼等が果して能く佛教に化したりとしても、之によつて將來の佛教に對し大なる發展の地盤を造り得たとは考へられぬ。勿論此少數のものをも化し得ないのに比すれば、勝ること萬々であるが、迚も國民全體に於ける信仰の日に冷淡となるのを補ふことも出來ない。而して現時我邦に於ける過半の青年は尙ほ宗教に對しては極めて冷然無關係の態度を採つて居るのみならず、特に佛教家の說法といへば動もすると嘲笑の裡に葬り去らんとする傾向の存することは蔽ふべからざる事實である。如何に佛教絕盛の時代であつても、國民の全體をして一人も餘さず、之によつて歸化信仰を得せしむるといふことは、固より人力の爲し得る所ではなからう。が兎に角中流社會の其法を聽き若しくは其の人に接するものをして尊敬の念を起さしむるか、少くとも其言ふ所をして眞に能く之を解せしめなければならぬことゝ思ふ。然るに今の佛教家の多

くは其言ふ所を解せしむることすら非常な困難とするのであつて、彼等青年が佛教に對し、動もすれば冷笑の裡に葬り去らんとするのは、畢竟此に基くのである。即ち佛教家のいふ所が餘りに淺薄であつて、今日日新の學問と矛盾するか、若しくは其意義の通せざるが爲めである。此の如き狀態であつては如何に彼等が努力せんと欲した所が、佛教の發展は到底望むべからざることであるのみならず、愈衰退の否運に向ふのは火を睹るよりも明かである。彼等も固より自から好んで不通の言を發し、淺薄な論を談じやうと思ふのでないことは、勿論であらうけれども、奈何にせん、新舊思想の間には大なる空隙があつて、彼等の力によつては、如何に勉勵しても、一躍して之を超ゆることが出來ないのである。

終りに現時青年の宗教を求むるものは、元來其胸中に蟠屈して居る煩悶を慰せんが爲めに、何等か其方法を得んとし、苦心して居るのであるから、必らずしも皆佛教家の所へ來るといふ譯ではない。て彼等は佛教家からいへば未だ海のものとも山のものとも判然分らない。其手段によつては、或は佛教に歸化するかも知れず或は又基督教の信者となるかも計られず、或は又何れにも歸することが出來ないで、世界と共に宗教をも咒咀するに至るかも判らぬ。譬へば猶ほ天の一方に遠雷の微かな響を聽くやうなもので、或は其れが果して殷々として天地に轟くやうになるか、或は又黑雲雷の響を捲き來つて蒼空に瀰漫するか、或は又進んで疾風砂を飛ばし驟雨盆を覆すが如くに至るか、或は又案外遠雷の響も何時となく消え失せ、天朗かに一點の雲をも呼び起すとが出來なくして終るかも知れぬ。今の青年の宗教を求むる聲も亦殆んど之と同してあらう、而して彼等をして般々として天地に轟かしむるも、又黑雲を捲き來らしむるも、將た又疾風驟雨とならしむるも、或は又何時となく之をして消滅し去らしむるも、一に宗教家の手段如何に由つて定まるのである。彼等が煩悶の由つて來る原因が種々雜多であるが爲め、其求むる所の方向も亦決して一樣なることを得ない。一人に[illegible]

する所、必らずしも亦他に成功するとは限らぬ。今の佛教家は果して此活手段を有し、各其求むる所に應じて救濟の途を與へ得べきであらうか、余輩は遺憾ながら此に大に疑なき能はぬのである。だから之を以て直ちに將來の佛教に對し發展に機會を與へたものと見るのは、尙ほ甚だ早計に失する議論といはなければならぬ。

以上論ずる所に依て之を觀れば、現時我邦の佛教は稍發展し、又發展の機會を得た如く見へるのも、畢竟は時勢の變動に伴ひ起つた顯象に過ぎないのであつて、未だ遽かに發展したとも又發展すべき氣運に向つて居るとも斷言し得ないのである。のみならず現時我邦人の佛教に對する信仰心は昔時に比して著しく衰退して居るといふことも、恐らく一般の異議を挿むべき餘地を有せざる所であらうと思ふ。既に社會一部の人士が、佛教家の說法を聽いて冷笑に附し去るといふ一事を見て　、明かに之を知ることが出來る。のみならず昔時國民信仰の熱情より湧き出た無數の、我邦に於ては稀に見る所の堂塔伽藍　、佛像寶什も、現時は唯之を維持するだけに於ても既に困難を感じ、或は國家の保護を仰いだり、或は無信者の寄附を集めたりして、僅かに其始末を附けて居るといふ有様、尙ほ其れすら出來ない所は、風雨の荒廢する所に一任するといふ狀態であるのを見ても、國民信仰心の衰へたことは、如何に佛教の爲めに辨ぜんと欲しても、竟に其法を得ないのである。寄附の多少は固より常に國民信仰の厚薄に對する唯一の標準ではなからう、併しながら我邦の富は昔時に比して遙かに增殖して居るのであるから、國民の信仰が深くならずとも、少くも同程度にある以上は、續々として此の如き寄附も出來得る譯である、況んや既に寄贈されたものを維持する位のことに於ては何の苦心する所があるべきであらう。國民信仰の衰退は、他面即ち現時佛教家の感化の衰退を意義するものといはなければならぬ。黃卷赤軸記す所の法に至つては、古猶ほ今の如くである、之をして盛ならしむると、之をして衰へしむるとは唯之を護持し、之を解釋し之を敷衍し、之をして人心の深奥に收めしむる職に

ある佛教家の責任であるといはなければならぬ。社會の文化は日に益進歩し、一切の學術は月に愈新なるを加ふるの時に當つて、佛教家は獨り依然として舊套を守り、更らに世の進化と伴ふ所以の術を知らなければ、如何に海外布教師を派遣するも唯其名の美なるに過ぎぬ、又如何に煩悶者流の輩出するを見ても、徒らに此好機を逸せしむるに終るのみである。其思想は一般社會と齟齬し、枘鑿相容れず、宗教心の消滅と共に佛教の枯死するは勢の到底免る能はざる所である。世の佛教家たるものは今に於て大に覺醒する所あり、宇內の大勢に鑑み、奮進して一大英斷を行なはなければ、從來信仰の惰力の停止すると同時に、佛教は地を拂つて空しく、祖師古德の力によつて漸くに築き上げたる佛教の大建築も、亦尋ぬるに處なきに至るであらう。般鑑遠からず、印度の末葉を見るべきである。此時に當り佛子たるものは果して何の顏を以て古德祖師に見ゆべきか、佛教家たるものは須らく猛省すべきである。而して此英斷を行ふことと一日早ければ、佛教の否運を挽回することも一日早く、國民信仰の亂動を防ぐに於ても亦少なからざる利益を與ふることも出來る。若し今に至つて尙ほ趑趄逡巡し、徒らに舊套を株守し、更らに改革する所以の法を知らなければ、我邦に於ける佛教は今日既に死滅し了るといつても差支なからう。

是故に今日佛教家の採るべき態度は極めて明了で、唯左の二項の中、何れか一を擇ばなければならぬ。

(一) 唯舊套を守つて、惰力の止むと共に、佛教をして我邦に死滅せしむるか、若し然らざれば

(二) 大英斷を以て從來の禍根を一掃し、佛教發展の基礎を造るか、

孰れかでなければならぬ。が第一項に就いては、苟くも佛教徒たるものは、如何なる人を問はず、中心之に贊成することはなからう。又此の如くあつては我國民全體の上に大なる影響を與ふることであるから、國民全體も其佛教を信ずると信ぜざるとに關はらず、之を以て得策と考へるものは恐らくないことであらうと信ずる。若し果して第一項が採るべからざるものであ

とすれば、勢必らず第二項を以て其方針となすべきことは論を俟たぬ。此以外更らに何等の撰擇すべき途はないのである。

余輩は好んで世の佛教家を惡言し、筆を曲げ文を舞はし、以て將來の佛教を悲觀せんと欲するのではない余輩の衷心誠に斯く信ずるのである。若し余輩の悲觀が誤つて居るならば、謹て江湖に向つて其罪を謝するに吝ならぬ、又社會の爲め斯の如くならんことを希望するのである。現時佛教家の中、余輩の言を聽て憤るものがあるならば余輩亦此等の諸氏に對し、十分の敬意を表し、余輩が過言を取消すてあらう、而して此の如き諸氏の一人も多からんことを欲する、何故かといふに將來の佛教界に於て飛躍を試むべき有爲の士は、多く其中にあることを信ずるからである、何れにもせよ、余輩の悲觀惡言は、實に余輩の自から忍びざるに出づるものであり、唯一に將來の佛教を憂慮するの餘りに發する所て、秋毫の惡意を有するものでないことは十分に諒せられたく、又姑らく虛心となつて余輩の言を味はれんとを世の佛教家に切望する次第である。

二、

然らば則ち現時我邦の教界に於ける禍根は果して那邊に伏在すとせんか。病根明かならざれば如何に服藥看護に勉むとも、竟に之を醫するを得ずして、偶以て餘病の併發を催すのみであることは何人も熟知する所であらう。宗教も亦之と同じてある、如何に大決心を以て革新に從事せんと欲しても、若し其禍根の伏する所を誤まり、觀て徒らに其末節枝葉の弊を除くに汲々たるならば、百年河清を俟つが如くて、到底其目的を達することは出來ない。眞に能く其病源を認め、全力を濺いて之を一掃するに勉めたならば、枝葉末節の事は手を着くるを要せずして、自から釐るに至るは明了のことである。余輩の管見によれば、世の當局者は未だ其禍根の伏在する所を明了に識得し居らざるやうに思はれ、宗教界の先進も徒らに枝葉の事に向つて其力を竭くし、一擧其根本に向つて痛言し居ないのは、余輩の實に遺憾とする所である。世の當局者先進が既に此

の如くてあるとすれば、將來の佛敎に對し、余輩の悲觀を抱くのも、決して所以ないことではないので何人も正心に之を考察し來つたならば、是非悲觀を抱かざるを得ないことてあらうと信ずる。

世の論者或は曰ふ、現時敎界の委靡振はず、其功績の更らに擧らずして、事業の一も見るべきないのは、畢竟是れ宗敎家の腐敗墮落に由るのであると。元來腐敗とか、墮落とかいふ文字は、一面既に惡といふことを意味する。だから如何なる方面の事業であつても、又如何なる階級、如何なる種類の人てあつても、腐敗墮落して善い筈はない。況んや宗敎家のやうな、人格を以て最も重要な條件となすものにあつては、其惡いことは論を俟たぬ。が併しながら何程玲瓏透徹の水てあつても、中には樣々の小蟲が浮游し居り、又如何に清澄純粹な空中てあつても、其中には無數の細黴が混じて居ることは、勢免れぬてあらう。況んや人間社會のやうな處に於ては、至る所として腐敗の分子の入り込まない處はなく、無數の見るべからざる細黴は、寸分の隙間があつても、忽ちにして猛烈な勢を以て之に竄入し來らんとするのである。若し人間の心の裡も、彼の空氣や水と同じやうに、之を白晝にさらけ出し、顯微鏡を以て之を檢査することが出來たならば、佛や神にあらざる限りは、何れ程の恐るべき腐敗墮落の細黴が入り混つて居るかも知れないのである。釋迦瞿曇の如き古今の偉人も、其未だ大覺せざるに當つては、否其大覺の當時に於てすらも、尙且つ魔と戰はれたことは、人の知る所である、魔とは即ち墮落の細黴であり、腐敗の分子である。又日に月に釋尊のやうな偉大な人物に接し、親しく其感化を受け居たる佛弟子の間てすらも、次第に佛をして無數の戒律を設くるの止むを得ざらしめたのではないか。して見れば腐敗墮落の細黴は人生の附屬物であつて、之を絶無にすることは、人が人として生き居る間は或は不可能のことであるかも知れぬ。併しながら余輩は固より之によつて人類の墮落が正當であるといふのではない、明かに此に注意して貫くが、余輩は墮落や腐敗の辯護人となつて、之を

是認しやうと勉むる意は少しもない。唯人生には如何なる時代にあつても、又如何なる國土にあつても、腐敗墮落の分子は至る所に遍在して、之を誘惑せんと勉めて居るものであることを顯はすのみである。此の如き分子が世間から全然なくなるといふことは、固より喜ばしい事であるが、是れは畢竟一の空想に過ぎぬ、古代社會組織の尙單純なる時に於ても、矢張り其れ相當の細徵はあつたのである。況んや現時のやうな物質的文明が盛となつて、誘惑の種類が日に月に增加するに於ては、尙ほ更ら論を俟たぬことである。

更らに他面からして之を觀察すれば、如何に細徵か充滿して居つても、左程恐るべきものではない。假令ひ空氣や水の中に無數の細徵が浮游して居るとしても、若し人間の身體が健全であるとか、或は身體が羸弱であつても、一定の方法によつて之を豫防するところを怠らなければ例之へば水ならば之を濾過するとか、若しくは之を沸騰せしむるとかして之を用いれば、何等の害を與ふることもない。社會に於ても之と同じである、一定の社會が腐敗の分子を以て充たされ、墮落の人間を以て滿たされ、動もすれば他に感染せんとする恐がある場合に於ても、若し其間に健全なる精神を有するものがあり、彼の既に腐敗せるものをも濾過沸騰し、各其材に從つて之を用ゐて行けば、何等の危險もなければ、又事業の擧らざるを憂ふる必要もない、英國は由來文化の最も開けたる所であつて、英國人といへば個人として、紳士として、各國人の現に敬慕する所である。然らば英國の社會に於ては、更らに何等腐敗の分子の存することなきかといふに、決して然うでない。腐敗の分子は此處にも同じく至る所に存する、而して彼等の生長するのは、即ち之に感染するもの丶少からぬ證據である。但彼の中流社會を組織するものが健全なる精神を以つて居るので、英國の社會は活動し、又能く其品位を維持し、世界强國中の第一位をも占めて居るのである。して見れば腐敗の分子にも必らずしも恐るべきものではなく、之あるが爲め社會の存立を危くするといふこともなければ、又其社會全體と

して品位を維持するに困難を感ずるといふ譯でもない、人心に於けるも社會に於けるも皆同じである。

若し腐敗墮落といふことのみが、個人並びに社會の存立を危くするものでないとすれば、現時我邦の佛教界が、假令ひ一方に於て腐敗墮落して居ると假定し、他方に於て萎靡振はずといふ事實があるとしても、直ちに此兩者の間に因果の關係を附することは困難であらうと思ふ。人は酸素を吸ふて生活する、然るに今一室を密閉し、火を燃けば、清淨なる酸素はなく空氣は惡くなる、而して人は死する。けれども此時に於ける顯象は、酸素の無くなつたが爲めに起つたのではない、若し此の如くに說明するものがあるならば、是れは一の謬論である、眞の死の原因は即ち炭酸瓦斯の發生した爲めである、丁度之と同しやうに現時の佛教界の萎靡振はないのは腐敗の爲めではなくして、更らに他の重大なる顯象の存在することを知らなければならぬ。重大なる顯象とは即ち健全なる精神を有つて居る人間即ち人物の缺乏是れである。身體が健全なれば細微も恐るゝに足らず、社會に健全なる精神を有するものがあれば其獨立を妨げぬと同じく、教界にも人物さへ居れば、腐敗は必らずしも意とするに足らぬのである。總べて腐敗の甚しくなつた時は、人物が出て居ないが腐敗の爲めに人物が出ないのではなく、人物の出ない爲めに腐敗が甚しくなるのである。世人は往々此原因と結果とを顚倒して居るのは、實に思はざるの太甚しことである、人物さへ其跡を絶せなければ、何等かの方法によつて其未だ大に亂れざるに先つて、之が救濟の途を講ずるに相違ない。古語に大厦の將に仆れんとする、一木の能く支ふ所にあらずといふのは、固より眞であらう。けれども大厦は忽然、一朝一夕にして仆るべきものではない、平日から能く注意して、小敗の起る毎に之を修繕すれば、容易に其仆るゝには至らぬ。平常其修繕を怠たり、之をして自然に荒廢せしめ、其大敗して亦奈何ともすることの出來ないやうになつてからは、如何なる强木も到底支へ切れないので、平常からの注意が肝要である。宗教も常に人物の養成に注

意し、斷へず人材を輩出して居つたならば、丁度彼の大厦の小修繕を爲すやうなもので、決して大敗支持すべからざるには至らぬ。現時我邦佛敎の大厦は果して荒廢支持すべからざる時てあるか、一木の尙ほ能く支え得る時てあるか否は、人々の意見によつて多少異なる所があるかも知れぬ。併しながら余輩の見る所を以てすれば、從來の惰力も尙ほ存し、宗敎界の全部が悉く朽敗し盡くして居るとも考へられぬ。但數百年來の舊屋が維新以來の急劇なる暴風驟雨の爲めに、大打擊を蒙むつたことてあるから、迚も部分的の小修繕ては永年に保存することは困難てあつて、其基礎根底からして更らに組立て直さなければならないことゝ信ずる。

それて細黴のみは直ちに死の原因とはならないが、細黴が知らず識らずの間、身體一定の微弱な場所から入り來つて、次第に體內に蕃殖瀰漫するやうになれば、漸々身體も尫弱となり、之に對する抵抗力を失ひ、遂に之が爲めに斃るゝに至ることは明かてある。依つて早く醫師に就いて適當の藥を服するか、若しくは切開して其腐敗の部分を取り去らなければならぬ。宗敎も矢張り之と同してあつて、精神的の切開若くは投藥をなすべきものを自から其中に養成し、之をして絕へず診斷せしめなければ、知らず識らすの間に細黴は漫衍して遂に之が爲めに斃るゝの止むを得ざるに至るは自然の數てある。彼精神的の醫師さへ居れば、斷じて此憂の生ずることはない。

更らに論者あつていふ、現時我邦敎界に於ける事業の萎靡不振にして秋毫見るべきなきは、即ち維新以後西歐の物質的文明の輸入と共に、一般國民の信仰心が薄弱となつて、財政の基礎に於て不足を告ぐるに至つたからてある。一切の事業は財政を以てその基礎となすが、宗敎に於てのみ獨り然らざるといふ筈はない。財政さへ饒かれば、敎育も與るへく、布敎も傳道も一切の機關に於て完全なるを得るのてある。だから鞏固なる財源を求め、財政の基礎を確立するのが、今日第一の急務であると。此說も固より一面の眞理を有つて居るこ

とは明了である、如何に宗教が精神的の事業であるといつても、宗教が一の組織となつて、世に活動せんとするに當つては、必らず其財源たるものなければならぬことは論を俟たぬ。而して現時の佛教が昔時に比して國民の信仰を失ひ、從つて其財政の困難を感じて居るといふことも、蔽ふべからざる事實であらう。然しながら財政の困難なる一事を以て今日佛教の振はざる眞原因と見做すのは、余輩の到底賛同し能はざる所である。財政の困難は一の結果であつて、更らに之よりも重大なる原因が他に伏在することを認めなければならぬ。抑も今日財政の富饒ならざる所以のものは何處にあるかといへば、疑ひもなく國民信仰の薄弱となつたことに歸するのであらう、此點までは論者の言を是認せなければならぬ。併しながら國民信仰の薄弱となつたのは、何の爲めであらうか、是れは果して論者のいふ如く西歐の物質的文明や、科學哲學のやうなものが滔々として輸入し來つた結果であらうか、是れは一の疑問である、而して此點に就いては余輩の說は到底論者と一致することを許さぬ。勿論西歐の文物科學の類が維新の際輸入せられなかつたとすれば、我邦の佛教も斯く劇かに今日の如き衰運を呈しなかつたことは事實であらう。併しながら數百年來持續し來つた佛教の組織は、世の大平と共に、何等恐るべき外敵と接觸することなく、次第に形式的の一方に流れ、偉材人物も其跡を絕し、德川幕府の末葉と同じく、旣に其根柢に於て朽敗し、外界の事情に應じて能く順應するの力を失ひ居つたものではなからうか。而して此事實は維新の際に於ける佛教家の擧動に於て明かに之を證明することが出來ると思ふ、當時の佛教家は或は神道と合し、或は之と分れ、忽ちにして教校を興すかと思へば、忽ちにして又之を廢し、更らに何等の定見なく、何等の自信なく、唯時流に隨ひ、泛々として彼此に浮動するが如くであつた、但國民の信仰なるものは一朝にして敗壞せらるべきものでないが爲めに、漸く佛教の生命も今日に傳はることを得たので、佛教の今日あるは寧ろ僥倖といはなければならぬ位である。此の如き

狀態であつたのであるから、幕府が黑船の出現と共に其政權を奉還するの止むを得ざるに至つたと同じく、佛敎も西歐の文物科學に接して、大打擊を受け、忽ちにして動搖を來したのであらう。幕府も佛敎も此時假令ひ外敵の出現に遭遇せずとも、其氣運は既に暗黑に向ひ久しからずして動搖を來すべき素質を有つて居つたので、黑船の出現や、文明科學の輸入は偶之をして一日早からしめたに過ぎない。彼等は唯之に向つて機會を與へたので、眞原因たるものは更らに其內部に存したのである。其內部さへ鞏固健全であつて、能く順應の力に富んで居つたならば、如何に外敵に遭遇するとも決して之が爲めに動亂を來すべき筈はないのである。要するに維新の際、敎界に偉人なく、毅然として民心を指導し、之をして其適從する所を知らしむるものがなかつたが爲めに、佛敎家は先づ自から周章狼狽し、其爲す所一に機宜を失したので、民心も次第に動搖せざるを得なかつたものと信ずる。即ち其眞原因は文化や科學の輸入にあらずして、寧ろ佛敎界一偉人の生ぜざるにありといはなければならない。譬へば大洋を渡航するに當り、暴風怒濤に遭遇し、船體も亦將さに危殆に陥らんとするやうな時には、先づ航海の術を知り、經驗に富める船長始め一切の舟子が、平然自若として其方針を定め、其機に應じて萬一の備を爲さなければならぬ、而して始めて一切の船客も動搖せず安堵の思を爲すことが出來るのである。然るに船長始め舟子が周章狼狽するやうであつては、航海に經驗のない船客は、如何にして動搖せずして居ることが出來るのであらうか。彼等の空しく魚腹に葬られざるを得れば幸である。此時に當り會社は船客の動搖し、溺死したのは暴風怒濤の爲めであつて、船長以下舟子の與かり知らざる所であるといつて、以て其責を免れ得べきであらうか。熟練適材の船長始め舟子が人力を盡くして尙ほ及ばざるに當りては、亦奈何ともすることの出來ないことであるが、人力を盡くせば、何等の危險をも與へざるのに、之を盡さず、無能の人をして非位に置いたが爲め不幸の死を招きたりとすれば、其罪は

全く船長舟子若しくは會社其物にありといはなければならぬ。維新の際に於ける佛教の狀態も亦殆んど此の如きものではなからうか。

世人又動もすればいふ、科學や哲學の思想が次第に國民の間に普及して來れば、宗教の衰ふるのは當然てある、何故かといふに如何なる宗教にあつても、多少の迷信の混合して居らないものはない、下等な宗教の樹木を崇拜したり、動物を祭つたりして居るやうなものは固より論を俟たぬか、所謂高等の宗教、例之へば基督教や、佛教のやうな宗教でも亦同じてある。彼の天地の創造を說いたり、人生罪惡の起原を論じたり、乃至天堂地獄の實在を談ずるが如き、今日の科學や哲學の思想から見れば、殆んど取るに足らない妄說である、だから人間思想の幼稚なる間は之を信ずることも出來るが、學術の進步すると共に信仰の薄弱となるのは論を俟たぬ。我那現時佛教の衰微して振はないのは、全く西歐文物の輸入以來、此學術進步の結果てあつて、將來には愈此傾向が太甚しくなるのであらう、其證據には現今の老翁老媼は尙ほ之を信じて居るが、現に小學校に通ふて居るやうな兒童になれば、最早や之を信じない、此等の見童が成長して後來の日本國民を形成する時代は、即ち宗教全敗の時代であると。余輩は諸處に於て屢此やうな言を耳にすることがある。併しながら此說は一の假定を豫想して居る、即ち宗教は迷信から成立するものであるといふことである。宗教が旣に迷信から成り立つて居るとするから、科學や哲學と撞着し、此等學術が進步し、次第に其光明を人世の上に照らせば、宛も氷の日光に遭ふて融解し去るか如く宗教は其形を消滅せしめなければならぬ。此兩者は到底兩立することの出來ないものであるといふ結論を生ずるのである。が併し是れは科學や宗教の性質を辨せざる議論である。宗教の中には、基督教でも又佛教ても多少是迄の解釋の中には迷信たる部分がないではない、併し宗教は迷信のみから成立するものでもなければ又迷信が其要素を成して居るものでもないことは其教祖の說の歸旨を明かにすれば、容易に之を知

とが出來るのである。學校の先生は如何に博學な人てあつても其日々講義する所が一言一句も誤ないとはいはれぬ、自分では當時正しいと思つて言つた事も、後に其誤なることを發見する場合もある。それであるからといつて學校といふものは虛僞ばかり敎ゆる所で、無用有實なものである、須らく上は大學より下小學に至る迄、悉く之を閉鎖すべしと唱ふるものは恐らくあるまい。又如何に高邁なる識見を抱いて居る學者でも、其著述に於て秋毫事實の相違、議論の誤がないとは限らぬ、が之によりて學者無用論を唱へ、秦の始皇のやうに、書を焚き儒を坑にすべしと眞面目に立論するものもなからう。又眞に虛僞のみを敎へ、謬論のみを唱ふるものがあつたならば、學校は適材を以て之に代へ社會は學者間の輿論を以て之を排斥するに勉むれば足れることであつて、學校を閉鎖したり、儒を坑にする必要は秋毫もないことである。佛敎も之と同じであつて、從來佛敎の說き方に於て迷信と思はるゝ所があつても、佛敎全體がそれが爲めに排斥さるべき筈はない、又時代の思想が進步し、昔は正しい解釋と考へ、人も亦之を信じて秋毫疑はなかつた事實?、後には其誤なることが判然し、人も亦之によつて信を得ることが出來なくなれば、其解釋の方法を變ずれば足れるので、佛敎も併せ之を棄つるには及ばぬ。のみならず宗敎と科學や哲學とは、全然同一の事を是方面からして說いて居るのではない、科學哲學が如何に進步し來つても、宗敎は自から其以外に於て立脚の地を有するので、決して彼等の間に衝突の起るべき筈のものではない。中世紀に於ける基督敎が泰西に於て之と衝突したのは、畢竟是れ宗敎の謬用から生じたので、科學も哲學も彼が信條の上に作り出さんとしたからである。是れは僧侶の罪であつて、基督敎の罪ではない、宛も一國内に於ける僧侶が人心を支配するに甘んぜず、俗界の權力に迄手を擴げんとすれば、勢政治的權力の爭奪となり、執政者と衝突を來さなければならぬやうな譯である。だから學術や哲學が進步普及するが爲めに、宗敎が衰退すべき筈のものではないので、彼あるが爲め若し宗敎

が衰退するならば、是れは宗教の罪てはなくして、之を護持する宗教家の罪てある。宗教家が能く時代の思想に應じて、其説明を變化流通せしむる手腕を有しないからて、畢竟は同じく人物の問題に歸するのてある。

以上論ずる所によつて之を觀れば、現時の佛教財政の困難なる所以のものは、必らずしも科學哲學等の輸入によるのではない、國民信仰の薄弱に基づくのは勿論てあるが、其眞原因は又此に止まらずして、深く人物の出現せざるに起ることは明了てある。が併し余輩は尚ほ一歩を進めて之を論じたいと思ふ。今日佛教々會が財政に困難して居るといふのは、唯喜捨金の少いといふことてあつて、金が無いといふことてはない。佛教界は今の佛教徒の使用し切れぬ程鉅大の財を持つて居るのである、彼等は寶の持ち腐れの狀態に於てあるのてある。若し一大英傑の士起つて之を有用の地に轉じたならば、回天の事業も容易に之を成就して、尚ほ綽々として餘裕あることを見るであらう。古の諺にも古河には水絕へずともいふが、實に數百千年來、上は王公貴人より下は匹夫匹婦に至る迄、其衷心よりして喜捨し來つたものは、積んで彼宏壯なる寺院となり、貴重なる財寶となつたのである、而して此等寺院の中には、既に廢寺となり、無住となつて居るものも少くないであらう、其修繕すらも十分に行屆かぬやうなものもある。又財寶も次第に賣却せられ、既に内外人の手に歸するものも實に夥しいことてある、而して此等の金額を積算すれば、隨分巨額に上ることてあらうと思ふが、果して如何なる方面に消費されたのてあるか。更らに見るべきものないのてある。若し今後も此形勢を以て推移するならば、今時現存する寺院財寶も、殊に國家保護の下にあるものゝ外は、次第に散亂消失し、荒敗し去つて何等有用の事業をも爲し得ず畢ることてあらうと思ふ。寧ろ今日其必要に應じ、其本末先後を確定し、之を處分せば、鉅萬の財は立ろに之を辨ずることを得、何事も其爲し得ざる所はないのてあらう。而して之に由つて將來佛教が發展の基礎を造るを得たとしたならば、實に朽木を轉じて黄金となしたのでは

なからうか。佛教さへ隆盛となれば此の如き寺院や財寶は何等顧るに及ばぬ、又何時にても之を營造し得らるゝのである。勿論古代技藝の精を蒐めたものであつては、將來再び之を造ることの出來ないものもあらうけれども又後世の技藝によつて、昔時には到底夢想し得ないものも出來るのであるから、平均すれば畢竟同じことに歸する。要は唯宗教の將來に發展し得ると否とにある。

是故に財政の困難を以て、現時教界不振の原因となすのは余輩の到底首肯し得ない所である。方法によつては決して財政の困難を告げないのみならず、綽々として餘裕のあるやうにもすることが出來るし、若し又財政が眞に困難であるとしても、其原因は寧ろ深く且つ遠いのであつて、此眞原因を除去するに勉めなければ、到底將來佛教の發展を望むことは出來ず、誰一時を彌縫するに過ぎないので、早晩根本的革新を爲さなければならぬことは、明瞭な事實であらうと信ずる。

三、

以上二節に於て余輩が論じ去り論じ來つた所によつて、讀者は略ぼ余輩の以て現時佛教衰退の禍根となすものゝ那邊に伏在すとなすかは、之を推察し得たりしことと信ずるが、倘ほ一言以て之を約すれば人物の缺乏即ち是れである。今日佛教の委靡振はず、事業の舉らないのも、人物の缺乏にあり、國民信仰の衰微したのも、亦人物の缺乏になり、財政の困難を來したのも將た又外界の境遇に從つて順應するの途を失つたのも其他一切の事情は悉く人物の缺乏なる一事よりして發し來つたのである。人物は實に宗教の精髓であつて、又活動の本源である。宗教の人物を要するは、猶ほ國家と秋毫の異なる所はない。だから昔からの大政治家は常に人材の養成を以て國家の急務となして居るのである。支那の墨子も開卷第一章に於て次の如くにいつて居る、賢にあらざれば急にすべきなし、士にあらざれば共に國を慮ふべきなし、賢を緩にし士を忘れて、能く其國を存するものは未だ嘗てあらざるなり」と。

又曰ふ「國に賢良の士多ければ國家の治は厚く、賢良の士寡ければ、國家の治は薄きなり、故に大人の務は賢を多くするにあり」と、洵に知言といはなければならぬ。而して吾人は宗敎に於ても均しく之をいふことが出來る、宗敎は固より祖師の法によつて立つものてあるが、法は死文てあつて、自から活動することは出來ない、其事誼に應じ之をして活動せしめ、能く變通自在を得せしむるは、唯人物にあり。人物が居なければ、如何に妙法ありといへども、竟に何等の事業、何等の活動もなし得ず、又何等の慰安何等の歡喜をも得せしむることは出來ない。佛の遺敎や佛弟子の解説は現に藏經の中に保存せられて居るに關はらず、之に歸依するもの丶更らに生じないのは、唯之を活用せしむる所以の人物のないからてあることは論を俟たぬ。徒らに罪を時代の變遷に歸して、自から安んずべきてはない。人類は活物てあるから、一日も同じ處に止まつては居らぬ、佛の法は佛時代に於てこそ人心に滿足と慰安とを與へ得たものてあらうが、社會の狀態が變遷し、人類思想が進歩して來れば、其精神は秋毫の差違を生ぜずとも、自から其解釋の法に於て變化すべきは當然の理てあつて、斯く變化しなければ到底後人に滿足や慰安を與ふることは出來ないのてある。古來の祖師高德が、各佛説を解説敷衍して居るのにも拘はらず、未だ曾て同一の言を反覆して居ないのは、即ち亦之か爲めてある。是れが即ち宗敎の進化てあり、又外界事情に順應するものとも稱するので、進化することを得ず、順應の力を失ふものは、宗敎としては社會に成立するを許されざるのてあつて、宗敎の生存競爭に失敗したものてある。而して遺法ばかりは自から進化することも出來なければ、又順應もなし得ない、宗敎の能く進化し順應すると否とは全く之を護持する宗敎家の手腕によるのてあつて、是れか抑も宗敎に於ける人材の必要なる所以てある。

余輩か斯の如く説き來ると或は人あつて、現時我邦幾萬の僧侶の中一人の人材もないといふ筈はなからと疑ふものが起るに相違ない。是れは最もの疑問

つて、余輩も固より今日佛教家の中、必らず人材の存することを疑はぬのである。諺にも三人行けば文珠の智ありともいふ位である、况んや幾萬の僧侶に於てをや。若し人あつて現時佛教家の悉くが平凡のものゝみであるといふならば、恐らく是れは事實を誣いたものであらう、又輕卒に不敬の言を發して、彼等諸氏を辱めたる罪は免れぬことであらう。が併しながら人物とか、人材とか、偉人とかいふのは、總べて何等の點に於てゞも、普通一般の人間より遙か勝つて居るものをいふのであるから、其中にも色々樣々の種類があるといふことを知らなければならぬ。例之へは商業家としての人物もあれば、政治家としての偉人もある、學者としての豪傑もあれば、宗教家としての英雄もある。同じ學者の中に於ても、哲學の偉人は法律學の人材ではない、又工學の人物は醫學の英傑ではない。古人は能く其地位を換ゆれば皆亦然りといふが、實際は中々そう行かぬ。人間には各天性遺傳の違ひがあるから、農家として成功したものが商業に從事しても同一の成功を得らるゝといふ譯ではなく、又哲學に於て新説を立てゝも、之と同樣に動植物學に於て新發見が出來るといふ筈もない。人には各長ずる所があつて、長ずる所を修むれば自から上達もするが、其長ぜざる所にあつては、千辛萬苦しても、竟に普通人にも及ばぬことがある。現時の佛教界に於けるも亦之と同じであつて或は博學にして教内の事は通ぜざるなしといふ人もあるであらう、又記臆に長じ、一度眼を通せば未だ曾て忘るゝことなしといふ偉人もあるであらう、或は又溫厚篤實人と爭はず、行必らず經に由らずといふやうな君子人もあるであらう、或は信念牢固にして、白刃前に當つても毅然として更らに動く所なしといふ偉人もあるであらう。其他尙ほ諸種の方面に於ける偉人の存するを疑はぬ。而して此等の人々は皆箇人としては十分に敬意を表すべきものであり、又宗教として其飾ともなり、其誇ともなり、各其方面に缺くべからざるものたるは論を俟たぬ。併しながら現時我が教界の要求する人物は、亦稍其趣を異にするのである。即ち經世

的の人材、千古の達識を有する偉人である。唯自から安心を得たるとか、博學多識であるとか、溫厚篤實であるとか、將た記臆に長じて居るとかいふのは、假令ひ如何に普通人に勝つた點があるとしても、此際何等の用を爲さない。宇内の大勢に通曉し、古今變遷の迹を按じて、將來の大計を立て、如何なる障碍に遭遇するも、一度び決定したる方針は斷乎として動かさず、一意邁進する所の偉人でなければならぬ。斯の如き偉人あつて始めて宗教は一の團體組織、即ち教會として確立の地位も得られ、又發展することも出來得るのである。而して前に所謂諸種の方面に於ける人材も、斯人を俟つて各其適處に就いて、其材を活用することを得るのである、何故かといふに此經世的才能を有するものは、其活眼によつて時代思潮の赴く所を看破し、之に順應して教義の解釋を定め、又人心の歸向する所を按して、或は布教師を派し、或は學者研究の方針を定むることが出來るからである。學者は常に專心其研究に從事して、他を顧みないものであるから、自から當時の事情に迂にして、此の如き才を兼ね有することは困難であり、布教者は其派遣せられたる地方に於て、出來得る限り多くの歸教者を得んと勉めて居るものであるから、其特殊の地方に於ける事情には精通するが、自から他の方面の事は一切之を顧みないといふやうな傾向を生じ、宇宙を大觀して、一般の方針を立つるといふことは出來ない。だから學者も布教師も共に宗教活動に於ては缺くべからざるのであるが、此等の範圍の人々ばかりでは、到底宗教の事業は擧らず、動もすれば學理に偏し、又偏局の思想を抱き、民心の要求する所に適合しないやうになる恐がある。彼宗教家が科學を呪咀したり、哲學を呪咀したり、或は又大乘非佛說抔いふものが顯はるゝと、周章狼狽して天下の笑を招いたりするのは、皆此經世家的眼光を有して居ないが爲めである。宗教家は若し科學や哲學や若しくは宗教界に於て新しい意見が出た時には、能く其根底を極め、其理由を明かにし、其結果を考へ、然る後其正當動かすべからざるものであつたならば、之を採りて

自家藥籠中のものとなし、說明の具に供し、若し其採るべからざるものであつたなら、棄てゝ顧みざるやうな雅量と活手段とを具備しなければならぬ。然るに唯其曾て習ふ所を以て唯一の標準となし、偏狹なる意見によつて一切を律せんとする時は、宗教の遂に民心を失ふに至ることは亦止むを得ざるのである。之を譬へていへば彼の學者や布教者は自轉車の兩輪のやうなもので彼宗教組織の中心となる政策家は其ハンドルの如きである。兩輪なければ固より自轉車も走ることは出來ない、けれどもハンドルを失つた時には、其折角の運動も盲動に終らなければならぬ、而して兩輪が愈活潑に動けば動く程不幸は重大となつて來る。又彼の音樂に於ける指導者が如何に合奏に必要なるものであるかといふことを見れば、宗教政策家の缺くべからざるものであることも思ひ半ばに過ぐるであらう。彼音樂の指導者は何等の樂器をも手にせず、唯一本の棒を取り、其頭と共に或は左右、或は上下に振り廻はして居る、部下の音樂家は皆それ〳〵前に譜を控へて彈奏して居ることであるから、彼は一見した所、如何にも無用のものゝやうにも考へられ、又誰れでも出來得るものゝ如くにも思はれるが、彼は至難の役であつて、彼なければ合奏は到底能く整はないのである。莊子は無用の用といふことを唱へたが、彼は實に無用にして而も大用を爲すものといはなければならぬ。天下の事は皆然りであるが、宗教も亦決して此數には漏れないのである。

余輩が斯くいへばとて學者や布教者が必要でないといふ譯ではないことは繰り返し注意して置かなければならぬ。唯彼宗教政策家なるものが、必要中の最も必要なることを論ずるに止まる。此等總べての範圍に於ける人材が愈輩出すれ輩出するば程、宗教は隆盛となり、其發展を期することが出來る。兎に角人物を作るといふことは、現時我邦佛教界に於ける最大必要の事件であつて、近時佛教衰退の禍根も之によつて始めて一掃することが出來、將來に於ける發展の基礎も之によつて始めて確立するを得るのである。だから今日の佛教家は須らく其全力を盡くして之に從事しなければ

ならぬ。彼の堂塔伽藍至る所空に聳えて居ても、將た又財寶什器山の如く積重なつて居ても、今日佛敎の衰殘に對しては、何等の功はなく、又將來佛敎の發展に向つても、寸分の用を爲さない。一切之を賣却し去り、若しくは破壞し了つても、美術品古物としてこそ惜しい氣もするが、宗敎の流布に對し、人材の養成に對しては、愛惜の念は秋毫も起るべき筈はない。財寶伽藍は其價如何に貴いとしても、何時にても己が意に從ひ之を造らしむることを得るが、人材は無價の珍寶てあつて決して意に隨つて顯はれ來らしむるとの出來るものてないのてあるから、平日から常に注意して之が養成に勉めなければならぬ。

人材を養成するには學校を興すより外に途はない。て人材を養ふに全力を濺ぐといふことは、即ち所有手段を盡くして學校の經營を成さしむるといふことてある。現時の各宗には各其學校を建て、子弟を養成して居ることは事實である、而して其二三の學校に於ては、確かに從來の敎育よりも、其內容に於て、又其方法に於て遙かに進步して居ることは最早や疑を容るべからざるのである。然しながら余輩を以て之を觀れば尙ほ甚だしく不完全たるを免れぬと思ふ、宗敎界內部の人といへども公平に之を言へば、亦其事實たることを承認するてあらう。此の如き不完全なる學校を以て滿足して居らなければならない唯一の理由は、即ち財政の不足といふことに外ならぬ。然しながら余輩が前既に之を論じたるか如く、此理由は到底理由とはならないのて、今日の佛敎家が眞に永く現時の禍根を洞破したならば、斯のやうなことを口に籍つて、以て姑息の策を弄すべき秋てはないのである。極端なる節約を行ひ、一切のことを犧牲に供してても、兎に角學校だけは之を完全に經營しなければならぬ。之が人材の唯一泉源てあつて、將來佛敎の興廢は一に繫つて此に存するのてあるから、現時佛敎界の當局者に向つては切に此一事の斷行を希望して止まないのである。

加之、他の社會的事業に比しては學校の經營は比較的單簡て、又比較的僅かの金額て以て出來るものてあ

る、而して其結果に至つては實に計算の及ぶべからざる程莫大なものであることは今更めて之を論ずるの必要はない。殊に佛教學校といへば既に其專門とする所が狹い範圍に限られて居るのであるから、帝國大學に對照すれば、唯文科の一大學にしか當らない。文科の中に於ても、佛教學校としては不必要なるものもあるであらう、其代り佛教學校としては文科大學現設の學科以外に設くべきものもないではなからうが、是れは極僅かで足りると思ふ。だから大體に於て、文科大學一箇を設くるとすれば充分であらう。文科大學は帝國大學の中に於ても、其經費の最も僅かな所であつて、他の農科や醫科のやうな設備は入らない、只適當な教授と圖書とさへ得れば大體は充分なのである。だから國家が每年一個の帝國大學に費すだけの經費を一度積み立てさへすれば、永久に立派な佛教大學が設立せらるゝ譯であつて、帝國大學以上のものを造り出すことは極めて容易であらうと思ふ。此ばかりの經費は、現時の宗教界衰へたりといへども、若し其意志さへあれば、何時にても出來得ることではなからうか。殊に目下の事情を仔細に考察し來れば、如何なる事業をも差置いて之に盡力さすべき筈である。

佛教將來に於ける消長は、實に我那佛教各宗の共同に感ずべきことであるから、余輩は嚮きに各宗孤獨に學校を經營するの不利益なるを論じ、寧ろ此際合同して以て一大學を設立すべきことを論じたこともあるが是れは最も容易な方法であつて、何時でも其當局者の間に意志が疏通し、意見の一致が出來れば、實行し得らるゝことで、余輩は今に至つて益々此意見の實行せられんことを希望するのである、が若し萬一にも其實行が困難であるならば、學校の設立は決して其多きを厭はぬのであるから、各宗が別々に其大學を經營するも愈妙である。但現時のやうな小規模のものは、如何に增加した所が勞多きのみであつて更らに大なる利益はない。少くとも佛教並びに其關係の事項に就いては、帝國大學を凌駕するものでなければならぬ。若し各宗當局者が其寺院を賣り、其財寳を拂ひ去る決心があれ

ば、一代の人間も、其信と不信とを問はず、亦決して之を冷眼に看過することはなく、必らず大なる同情を以て之を扶翼し、助長するに努むることは論を俟たぬ。然らすれは各宗が大學を經營するも決して困難なことはないてあらう。

若し斯の如きの精神を以て、斯の如きの學校を經營するならば、今後五十年を出てずして、必らずや有爲の人材の輩出するを見るてあらう、而して百年の後は現時佛敎の面目は全然一新し、以後歲月を經るに從ひ、愈發展し彼東洋諸邦の佛敎國民が翹首して我が國に期待する所も亦正さに之を成すことが出來るに相違ない。若し然らてなければ我邦の佛敎も亦印度の末葉に於けるが如く、竦然として懼るべきものがあるてあらう。佛は嘗て三界安なく猶ほ火宅の如しと說かれたが、佛敎現時の狀態は實に之に當るので、早く頭燃を救はざれば忽ちに全身を焦殺し了るてあらう。

小說的人物

三宅雄二郎

小說中の人物に己れの知人を容れしとて、種々批難を被むれるものあれど、世には實際小說に恰當の人物あり、又從來有り觸れたる主人公に優れる人物あり、能く寫せば小說以上にも見らるべき、斯かる實際の人物の一例として、玆に此頃世評に上れる故黑田伯を擧ぐべし。寡婦瀧子は、今は伯の家より離緣となり、新に吳服店の小林某と結婚したり。思へば昨年六月の事、黑田家より養女取戾の訴訟出でし時、各新聞は一齊に其殘酷を攻め、實に生木を裂くものなりとて、非難の筆は後見人たる黑木大將、並に調所男に及びたりき。當時寡婦の行狀多く外に聞え、離緣は當然の處置のみ、否寧ろその早からざりしを怪むと言はれし程なるを、不思議にも左る事實は當時の三面記者の耳に入らざりしが如く、一向ら寡婦虐待なりと稱して非難する樣なりき。然るに寡婦の不行跡は近頃事新しげに掲げられ、

今更のやうに評判せらるゝ新聞の雜報は意外に機敏なるとあると共に、又意外に遲鈍なるとあり、此一件の如き、恐らくその最も遲鈍なるものに屬す。

寡婦の不行跡、必ずしも珍しとはなさず、此件はその珍しからぬものゝ一なれど、實は小說家にとりて好箇の材料たるのみならず、又心理學者の硏究を値するものあり。寡婦の不行跡は固より斷じて恕すべからず、左れど故黑田伯の性格は俄に理解し難く、之を理解せざれは以て判斷すべからざる無しとせず。何人にも幾分矛盾あるかに見ゆれど、伯はその頗る著しかりし者なり。伯や極めて情に厚く淚に脆かりき、人の急に赴いて身を忘れしことあり、寛大なりき、能く人に施しき、夜間馬車を驅り路に車夫の醉うて臥せるを見、毛布を上に被ひて種々劬はりたることもありき。斯くも情に厚きこと遙に常人に超えしかど、一面には又極めて無情なりき、殘酷なりき、己が憎めるものには、如何なることありとも關せざるなり、僅に一過失ありても手痛く報復せることあり。されば先夫人に對しても不穩の所行ありしが、特に後夫人に對する擧動は往々人の顰蹙せし所、元より過失なきを虐待せしにあらず、分別は確に之れありき、されど一たび怒れば能ふ限り之を苦を厭はず、或は綳にて緊縛し、押入に投じ、斯くて出さゞること長時間、夫人悔いて罪を謝すれば、謝するに從つて愈よ窘迫することありき。

元、瀧子の伯に行くや、芳紀未だ二十を超えず、約婚のこと唯父母の意志にのみ任せたりと云はる。父母が己れの意志を子に强ゆるは敢て珍しとなさず、特に其子が父母の意志に從ふといふこと、更に普通の事といはざるべからず、唯多少異とすべきは、瀧子が良人に對して全く戀愛を感ぜざるに終れりとの巷說あることなり。好しや約婚の初に於て己れは毫も與かり知らざりしとも、日數經るまゝに自づと愛の成り立つこと、これ世間の常にあらずや、然るに伯の一家に於て遂に戀愛の何たるを知らずして終れりとは、幾分夫人の性質にも心掛にも因るべけれど、伯の性格には、實に普通の婦人にて意を迎へ得ざる所あるなり、今少しく凡

を抜ける婦人にもあらば、或は巧にあやなして案外圓滿に至りしやも知れず。されど伯は性來破格の人なり、極めて涙に脆くして又極めて冷酷なる、此處常人に取りて最も解し得ざる性格なるべし。夫人を辯護するものは曰く、彼の如き家庭に居りては到底精神錯亂を免かるゝ能はず、全く愛を感ぜずとすれば、之に代るべき何者かを見出さゞるべからず、不行跡に陷るも是れ畢竟已むべからざる結果なりと。斯くてその罪を恕するは、夫の凡ての罪惡を境遇に歸するの說に紛らはしきが、その境遇の爲に次第に性情の變化し來る點は種々攻究すべき者ありて存せん。現時に在つて、能く伯が這般の性格を寫し、如何にして瀧子が彼の如き狀態に至れるかを解剖し得るものありや。

元來伯に存する矛盾は唯だ情に於て見らるゝにあらず、事に處するに於て亦然り、極めて緻密にして又極めて疎漫なりき。官省に在つて政務を執るにも、眼光甚だ徵細に透り、頗る愼重を事とする方にて、時には杞憂に失すと疑はしめしことあり。さるかと見れば或は猛然として物に拘らず、如何なる事情の下にも顧慮するなく、思うて一たび斷ずれば貫かずんば已まず、何人が如何に忠告すとも斷乎として動かざることなり。人の伯を觀るに諸種の說あるもの實に之に因る、或るものには極めて溫順なり寬厚なりと見られ、或るものには極めて跋傲なり磊落なりと見らる、矛盾を示すところ全く情に於けると相同じ。人は幾分斯かる傾向を帶ぶる者にして、人物評に誤りあるも這裏より來る、評者は大抵一面を觀て他面を推す、故に他面を知れるものよりして見れば直にその說は誤謬の如く考へらる。世間の廣き、矛盾の露はに見ゆる人の多からざるに非ざれど、伯の如く顯著なるもの少し、伯は殆ど矛盾の權化なり。さはいへ、矛盾は如何に矛盾なりとも、元、同一人格に收めらるゝ以上、那邊にか調和の點あるべきを疑はず、大人物には大なる矛盾あり、而して又大なる調和ありと認むべきことあり、老西鄉にせよ、大久保にせよ、將た木戶にせよ、皆幾分さる矛盾を有せざりしにあらず、現に生存し居る有力者にも此種の

人あり、ありと雖もその調和の成り立つ間は別に異樣の感を惹くことあらず、從つて研究の材料と爲し難たし、故黑田伯の如きは蓋しその調和の未だ到らざりしなり。伯や頗る豪傑の資を具へ、順路を追はゞ明治の第一流に位すべかりしに、その割合に振はず、却て小器の徒輩に制せられしは、種々の事情あるも、又資質を調和し得ざりしに因らん。其他、唯その調和の十分ならざりし一事より、些末の事に損失を招げると少からざりしならんと察せらる。其の延て家庭に及べるに至りては寧ろ悲慘ともいふべかりし。

伯爵夫人にして今は呉服店のおかみさんたること多く例なきことなり、而かも此處に到れる經路は決して偶然にあらず、その因を尋ぬれば、言はゞ不釣合の結婚にも歸せん、されど長き歳月の間、室を同うして住み、而かも他より見て愛の成り立てる樣なく、爲に醜聞を傳へらるゝに至れるの消息は、尋常一樣の觀を許さず、小說家にして能く箇中に洞察の及ぶものあらば、實に一好箇の材料を有するを得ん。左れど現今幾多の小說家中能く這般の機微を捉へて巧に描寫し得るものあるか、靑年男女の痴態を寫すに十分なる筆力あるも、此種のものに於て如何にあるべきか怪むべし、若し有りとせば優に一頭角を儕輩に拔んずるを得ん。實際の人物を小說の材料とする可否に就いて議論なきに非ざるも、黑田伯のことの如きは已に世に隱れなしと言ひ得べく、而かも從來の小說にて彼程の性格を捉へて解剖したるものなし。予は敢て必ずしも此件に限れと言はず、言はんと欲するところは何か斯かる性格のものに筆を染めては如何にやといふ一事なり。他に之に似るもの一にして足らじ、普通の男女を捉ふよりは、更に性格の複雜なるものを捉ふる方、苦心の甲斐あるにあらずや。(筆記)

次號の本欄には
金子筑水氏の論文
掲げらるべく其他知名の大家に寄稿を依賴し置けり



樂天主義に對する獨帝の見解

「エヒヨー」

ウヰルヘルム皇帝陛下と有名の作家ルドヒヰ、ガングホーヘル博士との間に交はされたる興味多き話柄は載せてミユンヒネル最近報知紙上にあり。

舊臘十二日の夜、陛下は宮中冬園殿に於て昵近者數輩を玉座近く召見せられたり、中に博士ガングホーヘルあり。陛下は該詩人が最近の作に就て親しく優渥なる御掟を給はり、該著ホーヘン、シヤインは昨今に於て讀終らせ給ひし者なりと仰せられ、尙進んで其內容及思想に關して宣ふ所あり。該書が殊に皇帝陛下の御心に叶ひし所以は、陛下の御掟の如く、憂然たる樂天的高調即、現世に對する確信、人生暗影の解脫、將來の確信、人類の信仰等を促進せむとする教說に於て存す。陛下宣はくそは淸く朕が腦裡に印象を與へたり。所以者何朕は徹頭徹尾樂天觀を懷抱せるものにして、之を以て朕が終生の主義とするに於て何等の障碍も有らざらしめむとすと。

陛下は窮らと以て多端の事務を身邊に有し而も自己の事業に對しては信ずる所あるが如き人士に比し給ひ、更に

朕は向上せむ事を希ふ。朕はよく朕が意を體し、よく朕を扶翼する者あらば、是大に滿足とする所なり、と宣ひたり。

之に附加して皇帝陛下は、逆境に就て說を成し給ふ、人は如是の際に當つて事々物々疑惑を以て臨むものなりとて、ガングホーヘルの著「山中の雖」を引證して、陛下の所感を陳べ給へり、是此書は陛下の人生觀を名殘なく說明せるものなるを以てなり。其章句にいふ、何人と雖懷疑の念を以てするものは他に對して不正を行ひ併せて自家を毀傷する者なり。吾人は萬人を好愛すべき責務を有す、若し他にして吾人に敵意を挿むに非らざる限りは。と

陛下宣はく、此文意の如くして朕は爾來朕が關係を有せる普れくの人を待てり。其間幾多の嫌惡嫉視を招ぎしと雖、之が爲に平素の主張を拋つべきにはあらざるべし。これ人共に平素人類に對し人世に對し常に信念を以て世に處すべきなり、と。

該報知紙は說き進んでいふ、陛下はロミンテンの狩獵宮なる公務局の

壁上に大ガンクホーヘルが小說中より携帶せる如上の格言を、大書したる座右銘の板額を吊げ給へり。陛下は此板額を持來らしめ、附物としてガンクホーヘルに賜へり。額面の文字には陛下は深き御同情の念を以て對し給へる旨此時親しく告げ給ふ、何者此句意陛下の人生觀と一致する所あるが爲なりと聞ゆ。抑天下の事物之を厭世の眼を以て打見たる時よりは健全なる樂天觀を以てし、信仰厚き人生觀を以てしたる方、小は一箇人の私生涯に於て、大は職務執掌の上に於て遙かに多を爲す、獨り政治に於てのみ然らずといふ理由は毫もなし。獨逸國民は尙前途を有せり、さはれ是一箇文字に過ぎざるを以て耳にする毎に常に吾人を惱ます、そは國民の懶惰といふ事なり。陛下躬ら問を發して宜はく懶惰何爲るものぞ？、寧ろ活動し向上を期せむには如かざるべし。朕は怠らず活動す、而も又信ず如是にして尙朕は向上するを、と。

上述の御掟を尙續け給ひ、進んで陛下は、日常事務を辨じ給ふ方法と狀態とを述べ給ひ、玉體に掛れる事務及發務の多端且つ困難がいかばかり厳しく陛下を疲らすべきかと語り給へり。仍是觀之陛下に在つても常々身邊の羈絆を脫し、更に新世界を觀察し、進んで自己を鞭撻すべき人類を知る事の必要を生じたるを知るべし。されば陛下の北方を漫遊し給ふは一に肉心の休養を旨とせるものなるべし。陛下は口を極めて漫遊の日一日と休安養新の効を收むる者なる事を說き給ふ、初日には事務、電信、書翰の類玉體の四邊に蝟集して、御乘船の間と雖止まず、爲めに陛下及び左右隨伴者は久しく事務の間より脫するを得ざるに、日を經るに隨つて稍閑散となり稍靜寧を覺ゆるに至り、遂には全く閑靜の裡に自然の美觀を拜して遊放するを得給ふに至るといふ。

次に陛下は人をして實境に臨ましむるが如く漫遊談を爲し給ふ。或は他に見るべからざる長汀曲浦の美しき眼、或は北光の偉觀、特には人民の淳朴敦厚なる、毫も僞る所なき天眞の流露をいたく愛でさせ給ひたり。凡て朕を抑壓せし事物は此二三週日間は全く去つて跡を留めず、而もさばかりも朕が歡喜とする所を人民は甚だしく誤解せり。世上朕を綽名して旅帝と喚做す事は朕之を知らざるに非ず、されど朕は毫も介意せず。朕はかゝる世評の爲めに意を枉て人生の歡喜を抛つの勇なし。朕は信ず、朕が漫遊は之に仍て同人種たるの觀念を益強ふする上に於て功なしとせずと。獨逸人の多數中には自己の鄕土のいか許り美景に富めるかを知らざるものあり。朕は未だ見聞せざりし獨逸の一地方を知り得たる時は常に心中の快いふべからざるものあるを覺ゆるなり。

就中南獨逸は獨逸人の目には僻びても見え又交通の便に仍つて同情多き地方とも覺ゆるなるべし、と陛下は一層語勢を强めて仰せらる。獨逸人は嘗て數年前レヒテスガーテンへ旅せし事を念ひ起す時は心中の愉快禁ずべからざるものありき。そは實にうるはしき日なりき、ヒシターリースの山中なる叔父コープルヒ大公爵の邸に月日を送りたりし折なりき。若し其漫遊がさばかり種々の事情あらざりしならんには如何ばかり寂寞を覺えけんを。漫遊には常に此地より彼地へと移るに要する各般の準備なかるべからず。最も朕が欲する所としては展自動車を須ひむ事是

也。兩日か三日、飄然として雲烟罩むる彼方の空を遊び暮し、再び活動の郷士へ還る。かくの如き休神療養は朕が第一の職として必須のものたり、いな更に必須のものたり、何者幾多の誤解を打破せざるべからざればなり。世人は朕に少許の自由をも與へざらむとするを以て、かゝる時に當つては洵に忘恩の地位にあるものといはざるべからざるなり。朕にして成功せむか、世人は口を齊うしていはむ。誰れか皇帝を輔助せる？と。若し一朝にして失敗するが如くんばいかに、人は吾に皇帝は事を解せざる底の人たるなりと言ふなるべし。他の君主に在つては明々白地の事相も朕に在つては穿鑿極め盡して然る後に間はむ。そは何故ぞと。而も此奇問に對する應答は下の外には出でざるべし、何故にとや、然り予は獨逸帝國並に獨逸國民の爲めに利益あらしめむと欲すと。世人と雖屢幾多の利益を知れり、最も其然るものは朕が漫遊なるを衆人は之を將つて朕を難ぜむとす。さればミユレヘン滯在の間は純一無雜の歡喜裡にありたり。住民の溫情、都市の美觀は甚しく美術的趣味を牽くものなりき、と。


KOEPENICK'S NEW MONUMENT.
Immortalizing the Kings Coat.
—*Humoristisch Blaetter* (Vienna).

MAN.

かくの如くにして遂に談は文學上、政治上の各般に亘り、又陛下は宮庭の內事に及ぼし給ひぬ。宮室の事は長けれども兩陛下より諸公子諸公主に至るまで孰れも仁慈愛憐のみ心洽く渡らせ給ふよし陛下の御唇より洩れしにや承る。陛下は絕えず最も親しきみ辭を以て「皇后」「皇后」と口を離し給はず。又特に懇篤なるみ辭もて陛下は太子傅を稱揚し給ひ、渠は最多難の際にあつて能く思慮を廻らし且つ忠節の念厚きものなりと御褒めありたり。尙此時太子傅は聖壽の萬歲を祝ぎ奉れり、と。

更にフオスシツセ、ツアイツング紙はいふ。

樂天觀及び厭世觀に對する皇帝陛下の宣ふ所は、特別なる試驗を通過せしものとして公衆より認められたり。若し樂天觀及び信仰が事實上充分なる根據を有するものならばそれらは極めて好事なりと言ふべし。然るに若しそれらにして事實と矛盾せるものならば一箇人に取りても亦一國に取りても忌々しき事共なり。健全なる樂天觀なく早きか晩きか兎にも角にも其結果に對する確信なからむには何人と雖、家庭に於て、學術的生活に於て、美術的生活に於て將

又政治的生涯に於て活動する事なし。従つて渠は何等目的もなく、身に拮据を敢つて苦役を為すに非らざるべし。よし現在に於て判ずる所好望的ならずといふことなからむには、當來に於て確乎たる希望を有せざるもの誰かあらざらむ。一は決して他を排するものにはあらざるなり、世人は厭世の不平家と見え乍ら、實は根本的に樂天家たる皇帝に向つて、獨逸國民の強固なる力を驅りて之を均一ならしめざらむが為には、眞實誤れる政治は永久に甚しく重大なる損害を生ずるものにあらざる事を證明し得べし。終に君主の漫遊が關する所は、漫遊に仍て君主自らが得たる印象の奪ふべからざるが如く、極めて注意すべき事なり。陛下が休養を求め給ふ事は何人と雖難せざるべし。さはれ世人は陛下が纔には其都度為させられたるよりは頻繁に外國の君主を訪問するを知れり。而して又かくの如き訪問は諸の宮室に



NICOLAS—"Hang it all, that's the third time I've missed that bear! Do any of you happen to have, er—a bomb?"
—*Jugend* (Munich).

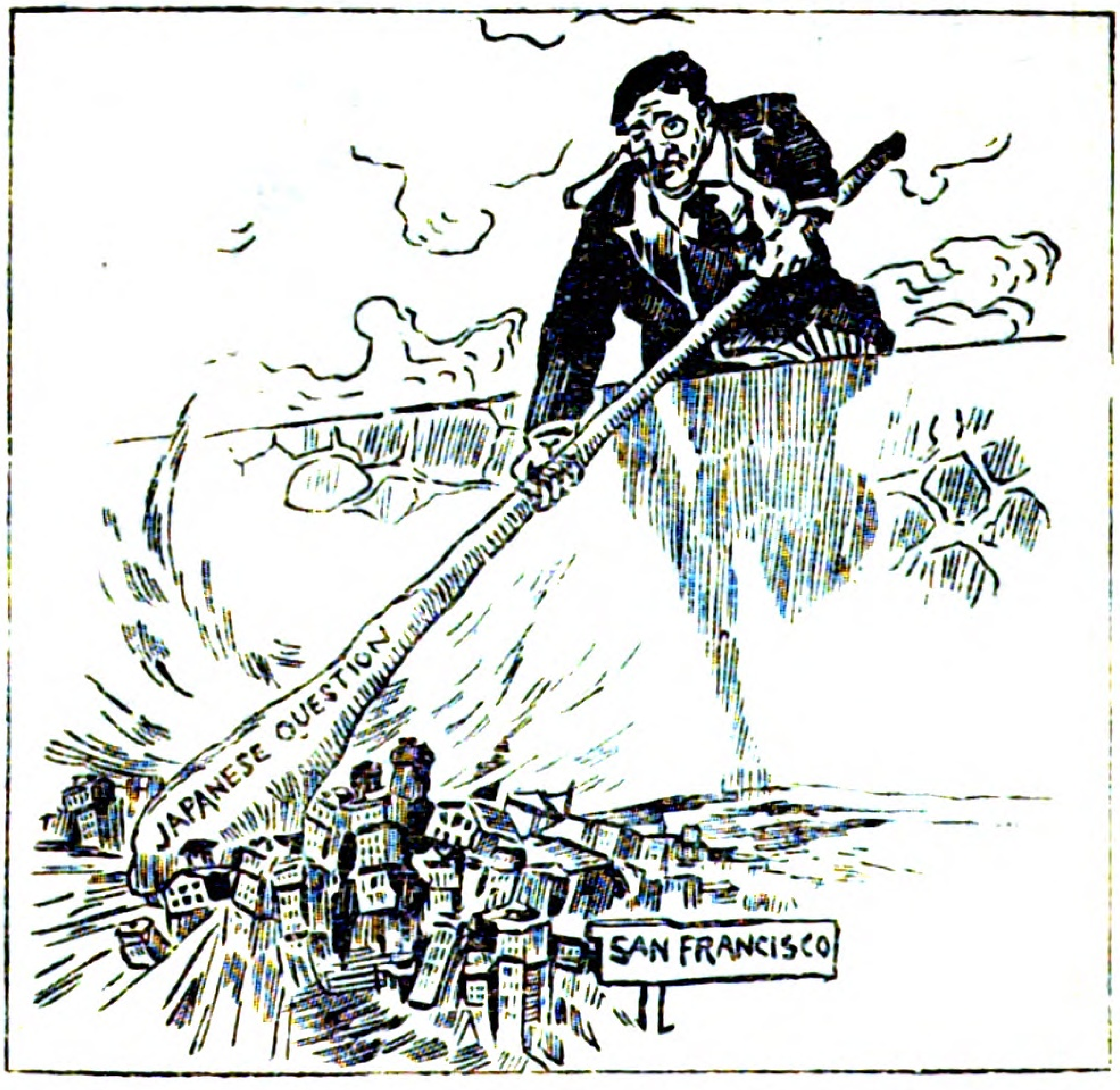
於て重き費用を要するものたるを知れり。更に世人は陛下の政治行動は時あつては全然陛下の所期の矛盾せるものなるを知れり。尚進んで世人は國内漫遊は君主が卓越の人と思込める人々に毫も豫算なき巨額の出費を命じ給ふ事を知れり。世人は漫遊の頻次なるより下の如き觀察を為せり、即漫遊に伴ふ移動は休養ならずして却りて終に君主の疲勞を招くや必せりと云ふ事是なり。ウヰルヘルム第二世陛下に在つて、少くとも一箇月に一回の漫遊なく、一回のお祭騒ぎなからむ事を民の熱望せる事は、恰も旱天の雲霓に異らず。陛下も亦出遊の都度必ず要する所の大鹵簿の容易ならざるを歎じ給へり。然れども此鹵簿なくして出遊するを得可きや否や。陛下が眞に要用の際にのみ出て給ひ自餘は宮庭を以て之に充て給はゞ、此にも越えて安全なる休養はあらざるべし。陛下は蓋し熟知し給ふならむ。陛下は亦到る所

の國民の眞の意嚮を恰も綺羅を盡せる凱旋門や貴婦人達の接待や或は頌詩同様に認め給ふに吝ならざるべし。

東亞に於ける獨逸の商業界

『ベルリンポスト』

東亞に於ける獨逸の商業界は頃者當地同業の衰頽を嗟き、日本との競爭に就て前途を憂慮せり。絕對的には獨逸の商業は發達せるに相違なきも、相對的に見れば明かに退歩せりといふに躊躇せず。此絕對的の進歩は之を他の諸國の商業の發達に比較する時は實に微々たるものにして、殆んど靜止の狀態にありといふも不可なき如し何者靜止たろや頓ては退歩を來すものなるを以てなり。世界市場の競爭は漸く雜遝を加へ來り、益複雜を増し來る。東亞に於て、殊に支那に於ては爾來稍



ANOTHER EARTHQUAKE.
—Macauley in the New York *World*.

寛なるを覺えたりき。即ち支那は毫も世界的商事に指を染めず、其國產は他の諸國の商業家に取りては此上なき恰好の商品たりき。然るに彼の日露戰爭後日本が一躍して列强の間に伍してより局面は正に一轉化を爲し、日本は自國のみにては狹少を覺ゆるに至り、更に世界の舞臺に打つて出て、其辣腕を西隣支那に揮つて侵略を逞うし、歐洲の先進諸國と中原に鹿を爭ふに至れり。然るに支那に於ても舊夢漸く醒めて活動の色を呈し來り、歐洲の仲介者を經ずして輸出の一部を自らするに至れり。彼の外國より食料品を輸入したるの功は當然獨逸に皈すべきは疑ふべからざる事實なるが支那に於ても珈琲、米穀及茶等を以て相當の役前を演ずるに至れり。抑世界の商業は貿易商業なるを以て吾人は各地方に於て獨逸國へ向け吾人が工業の材料たるべき商品の輸入を圖らざるべからざるなり。然るに支那は過去に於て

も現在に於ても此等のものを獨り有せり、故に吾人は他の諸國に先鞭を着けられざる内に確乎たる地盤をこの間に造り置く事極めて肝要なり。此種の攻擊は已に眼前にあつて而も今や其逆襲あらむ事は日本との競爭開始の後には極めて明瞭なる事實なり。日獨間の商戰か東亞の市場に於て起る可きは到底避くべからざる事なりとは誰人も豫知する所なるべし。總には我邦は日本が獨力開拓せざるに先ち、逸早く英國と相提携して東亞の工業市場に覇を稱へ、かくて自國より日本への輸入に後顧の憂なからしめたりき。然るに今や日本は獨り自國に於て難事を成せる而已ならず支那に於て將又吾人の殖民地膠州に於て其手を擴げたり。

然れども日本がかくの如く奮鬪せるを以ての故に日本人を曲解するは非なり。日本は實に如何樣の手段を講じても玆金錢を儲けざるを得ざる次第あり、所以如何船艦や增築せざるべからず、戰爭の瘡痍や癒さゞるべからず。玆に於てか百方詭計を廻らして下の如き暗號を以て商業上の惡戰を挑む、曰はく日清兩國は共に黃人種に屬し唇齒の國なりと。事態已にかくの如くなるを以て獨逸の商業家たるものは須く緊褌一番、努力以て此勁敵を一掃するの覺悟あるべし。若し日本にして其慾望を達し得しめ支那が其勢力下に入つて各般の便宜を日本に支へなば即ち例へば關稅の寬假、船舶の貸與を支那政府が日本に許すに於ては、洵に由々數一大事と成るなり。日本にして東亞の市場を一手に占有せば傲然として獨り高く嘯かむ。かくの如きは支那にして覺醒し、支那へ向けての輸入が擴張せられたるの日にあつては斷じて有らしむ可からざる事なり。而して其沙汰や重且つ大、決して姑息一時の安を偸むべきものにあらざるなり。



JAPAN'S PROPOSED "FRIENDLY VISIT."
UNCLE SAM—"Do you feel as friendly as you act?"

支那へ向け獨逸より輸入する所今日にては六百萬と稱す、然るに若し

獨逸商業家にして更に一歩を進むる時は之を三倍額に上らしむるは易々たる業而已。獨逸商業家たるもの果して此に到達し得べきか、商戰に贏を得能ふべき乎。

嗟、誰か如上の問に向つて然矣と答へ得べき。東亞に於ける獨逸商業家は日本人に似ず由來勤勉を缺く、又熱心に事に當るの勇なし。かくの如きは彼等の職として耐ゆる所にあらず、然るに之に反し日本人は生得敏捷にして猾智に富む、殊に歐人に在つては能くし得ざる大胆の振舞を試むるを常とす。支那に於ける獨逸商業家は已に其勇氣挫け執拗の性を失ひ耐久の力なく、直ちに萬事を放擲せむとす。疑もなく是病根とする所あり。支那の獨逸商業家がかくの如き慘状を呈するに至れる罪や本國の工業が渠等の希望を協へざるに皈すべく、毫も渠等を咎むべき理由無し。即其求むる以外のものを與ふるか、左もなくんば何者をも與へざるが常態なればなり。かくの如くんば東亞の商業家たるもの何をか爲し得む。例へば之を棉花工業に於て見るも明けし。獨逸本國の工業家は實に利己的なり。されば獨逸商業家は外國の商品を販ぎ、從つて此等商業家は支那より得たる金錢を以て本國を益する事なく、却りて亞米利加を益し英吉利を益し日本を益するに至る。かくの如き事情なるを以て渠等は目前に横はれる有利なる商戰の如きは毫も眼中に措かず。若し一朝商業上に戰端を開いて有利ならむか、本國の工業家は在支那の商業家と相提携するの考なかるべからざるなり。先づ吾人の手よりして一度吾好望なる市場即支那を逸し去らむ乎、敗戰の非は已に各方面に互りて相踵いて至らむ。獨逸は實に世界に於て第二の商業國なり。嘗て英吉利と商業上の戰を爲して屢之に贏ち得たり、東亞に於て日本と戰ふに當つて、何故に之に勝ち得ざるべきぞ。



TRIPLE ALLIANCE OF THE TOTTERING MARIONETTES OF IMPERIALISM.

—*Fischietto* (Turin).

反阿片烟運動

「モーニングアドヴアータイザー」

(一)馬來半島に於ける新醫正法

馬來半島に於ける反阿片烟運動に關し、去歳十一月九日附け、在彼南ロイテル通信員よりの書信によれば、其運動は唯巨大の二字能く之を盡す、其傳播普及の速さは遲愚なる支那人の運動よりは遙にウエルス復興事變のそれを想起せしむべし、初め支那より該運動の通報來れるとき、一二熱誠の徒起りて、無料喫烟習慣匡正病院を開きたりしが、捗々しき進歩を爲さゞりき。

然るに數週前セランゴアの首府、クワラ、ランパア在住の一富有なる支那人、喫烟の悪習匡正に特効ありと稱せらる、植物の見本を得たり、尙ほ其植物の少しく搜索すればセランゴア州中野生にて多く存するを知り、間もなく多量の右の藥草は採集せられ、非常の流行を來したり、予は只その乾燥せられて原形を失へる見本を見たるのみなるが、ガンピル草に稍や似たるところある如き此植物の葉片は、數日間日光に曝され、それより細かに刻まれ、炙られ、水を注がれ、而して後その藥劑をば治療の用に供するなり、最初の試驗者は歐人に使役せられ居る或る支那勞働者なりき、彼は非常の耽烟者なりしも僅々一週間にて全治したりといはる、

今や反阿片烟會はクワラ、ランパアにも設けられ、かくて右の藥液は無料にて頒與せらる、さるにも拘らず、支那人の語る所によれば右の植物の需要は次第に多く該地にてそれを採集し居るものは一ピクルを十ダラーにて賣り渡す程なり、此藥草頒與の爲に設けられたる施藥所は到底その需要に伴ふ能はず、クワラ、ランパアに於ける需要者のみにても日に二千人を算するなりと。

(二)阿片販賣店閉鎖

反阿片運動者は、概藥草發見以來僅々數週日內にクワラ、ランパア地方のみにて已に一萬四千人以上を治したりといへり、そは阿片商會の一店員の言によりても確めらる、その店員といふは元來深くこの事件に對して興味を感じ居るものなるが、クワラ、ランパア市內、幷に附近に於ける阿片販賣店への賣渡額は從來の三分の二を減じ、同時に多くの商店は需要者缺乏の爲に全然閉店したりといへり。

又クワラ、ランパアより來れる一人は吾人に斯く語れり、その頒與時間の迫るや、諸方より集る勞働者の群は施藥所門前市を爲す有樣にて、各々その日の藥液を得るべく、ビール、又はウイスキーの空瓶を所持す、平均悪習匡正に要する迄の時日は二週間乃至四週間なるが、彼等施藥を受けたる徒は、最早やその藥液要求の必要永久に止むと信ずるに至れば、所持せる阿片喫烟管、喫烟用火器、幷に喫烟用一切の附屬品、凡そ通算すれば數ダラーにも上るべきものを盡く施藥所に持ち來り、破棄せられよとて、一括りにして渡すなり。

此藥草の風評は馬來全島に普く傳播し、その供給は、各州の重なる都市に及びたり、彼南にては漸く此頃反阿片團體を見たるに過ぎざるに、已に多くの被匡正者を出したり、予は初め此藥草の奏効に對して懷疑の態度を取りたる罪を謝せざるべからず、それが或は心理的効果に基づく

か否か、そは尙ほ斷じ易からざるものありと雖も、兎に角、その藥草の奏効に就いては予は今日最早や疑を挿まざるなり、二人の富有なる支那人、彼等は二十年來の喫烟者なりしが此頃の事なりき喫烟を廢止し得たる後烟管その他の一切を一夕彼等の倶樂部に持ち來り、未だ喫烟を止めざる儕輩の面前にて毅然として破棄し去りたり。彼等が用ひし凡ての喫烟用器は、之を百ダラーに換算し得べき程なり。

馬來聯邦は喫阿片烟の風習全然根絶せられたりとて、彼等の收入の大部分は、阿片に因るものにあらざるが故に、左までの影響を感ぜざるべし、唯、同半島移住民に在つては少しく其事情を異にす、阿片栽培は吾人の收入の重なるものなればなり、栽培者はセランゴアに於ける商人程には尙ほ利害を感ぜざる點もあり、又反阿片運動の結果の如何、幷に右の藥草が殖民地にも輸入せらるゝに至らばそれを亦販賣し得るを知れり、兎もあれ一ヶ月程にて、その反阿片運動が勃發當時と同速力にて忽ち廢絕に至るか、或は然らずして阿片栽培者の零落に終り、次いで殖民地政府の困難を惹起すべきかの點分明とならん。

第十回萬國禁酒會議の景况並に酒と犯罪の關係に就て

法學博士　小河滋次郎

明くれば一昨年であるが即ち千九百五年晩夏九月、匈牙利の都、ブダペストに於て第十回萬國禁酒會議なるものが開かれた、幸ひ其當時、萬國監獄會議に參列の公務を帶びて同地に滯在中のとてもあり且兼て自分の職務の上より此禁酒問題には多大の興味を有して居る者であるから自分も會員の一人として出席を申込んだ所が早速、快諾を與へて呉れたのみならず日本國人として會に加盟したる者あるを見たるは今回が嚆矢てあ

り殊には戰勝の日本帝國を代表したる者てあるかの關係も其爲に加味せられたる者と見へて歡迎、到らざるなきの優待を蒙むり各國政府より公派せられたる代表委員と對等以上の資格を認められたるとは誠に身に餘る無上の光榮として感謝せねばならぬ次第てある、歐米諸國の內には殆ど一國として其政府の代表者を此會議に派遣せざる所は無い、代表委員と各國の有志者とを併せて本會に加盟參列したる者の總數は約八百名內外てあつてロンボルゾー、ビルグマイヤー、ハンダアンン等吾々の專門科學に關係のある諸名家を始めとして醫學者、心理學者、敎育家、社會學者、法學者、宗敎家等として世界に名の聞えた名士の顏も少からず、有名なるフヲーレル氏の如きは相變はらず本會の中堅となつて熱心に斡旋しつゝあるを見受けた、宗敎家としては就中、加督力派に屬する者が多いやうてあつた、匈牙利政府は本會に對して多大の同情と歡迎賛助の厚意を表したる由て現に開會に先つて文部大臣は全國、大小各種の學校に對じ、陸軍大臣は各地に散在せる聯隊に向つて禁酒主義の實行を奬勵する諭達と共に學校長聯隊長の如きは成るべく萬國會議に參列すべしとの旨趣を內訓した趣てある、會議開設の當時は恰も匈牙利に於ける政海大波瀾の時て內閣は瓦解の危機に迫り解散後、新たに招集せられたる議會は今將さに開かれんとして怪焔萬丈、人心は殆んど沸騰の極點にありとも云ふべき凄まじき光景てあつた、忘れもせぬ禁酒會議の開會式擧行の日は九月十二日て是日は內閣に對する大々的示威運動會を催すべしとのことてあつて農民、勞働者等のブダペストに聚合する者十五萬人、市中は朝より戶を閉ぢて業を休んて居ると云ふ始末、如何なる椿事の起りもやせんと誰れ一人として安き心を持つ者は無い、況んや當の仇たる內閣員に於てをや、午後三時の開會と云ふに僕は兼て市中の騷擾を豫期して居ることてあるから見物かたく一時間もかゝつたら會場に行き着けることてあらふと思ふて少し早目に一時頃車を僦ふて旅宿を出た、然るに市中雜沓は豫想の外に甚しく殊に何百人何千人と云ふ大團體が隊伍を組み行

列を正して幾旒となき大旗小旗を押し立てゝ整々堂々と練りあるくことてあるから往來は之れが爲めに阻絶せられて而かも長い時間、一隊の行軍の行き過ぐるを待ち合はさゞるを得ず、僅かに三四丁を進み得てまた停止を餘義なくせしめらるゝこと數十分、此くの如くにして平常なれば馬車を疾驅して十五分間もかゝるべき道程をば凡そ三時間餘りも費して四時點鐘の頃、辛ふじて會場として定められたる公園内の美術館に到達することを得たり、是れは僕一人のみに非ず參列者の多數も亦た同一の故障に遭遇したるが爲めに幸にして開會式擧行の時刻は四時半過ぎ彼れ此れ五時にも近からんとする頃まで繰り下げらるゝことになりこれが爲め開會の時刻に後るゝの不幸を免がるゝことを得た、斯る國際的、公けなる會合に對するの恒例としていつもなれば國務大臣諸氏の臨場あるべき筈なれども政爭の峻烈にして而かも危機一髮、包圍攻擊の裡に惡戰苦鬪しつゝある今日の場合、よもや内閣大臣の臨場を見ることは恠ふまじと何人も豫想せしに思ひきや見渡す式場の正面には文部大臣ジョールジ、ルカース氏を始めとして內務、農商務の兩大臣も亦た椅子を駢べ其他夫れ〳〵各官省を代表すべき要路者の如きも一人の缺席なく威儀を正しく參列するものあるを見るが上に文部大臣が匈牙利政府を代表する資格に於て縱容迫らざるの態度を以て滔々一時間に餘まる禁酒會議歡迎の大演說を試みたること流石に外に對して匈牙利の鼎の重きを示すに耻ぢざるものと謂ふべく參列せる外國委員の如きは殊に感嘆措く能はざるの念を起し轉た時の內閣員の運命に深厚なる同情を寄するの想ひを禁ずること能はざりき、議事の題目又は議場に現はれたる諸大家の講演の如き何れも禁酒の必要及び禁酒の目的を達する所の方法手段を明かならしむる適切有効なるものにあらざるはなしであるが是れは他日の機會に譲ることゝして聊か本會に就て見聞したる二三の事項を咄さふ、先づ第一が本會に附屬して實物敎育の目的から設けられた所の物品陳列場のことてある、此陳列場は部が四區に分けられてあつて各區、其陳列の物品・

にして居るが何れも酒毒の恐るべきを證明し之を豫防制遏するの方法に關係を持つて居るものに非ざるはなしてある、第一區に陳列したる所のものは重もに衞生的施設に關する圖畫、模型の如き類であつて例へば水道、下水又は貧民長屋の構造に關すること、酒精に代はらしむべき礦泉其他菓實又は牛乳を以て製したる種々の飲料物の見本等てある、第二室―此所が一番多く吾人の注意を惹き興味を深からしめたる所であるが此所には即ち酒精問題に關して各國で出來た所の書籍、雜誌、新聞、圖畫、報告、統計表等の類が山の如くに而かも秩序善く極めて豐富に網羅排列せられて居る、是を以て見ても禁酒問題の勢力が近年到る所に俄かに勃興し且つ眞面目に之を解決するの必要を促かしつゝあるの事實が分かる、別して圖畫の內には所謂一目凄然の感に堪へざらしむとも謂ふべく何とも得も言はれぬ善い出來のものが少くない、窮困墮落、妻子路頭に迷ふて身は不治の惡疾に苦み、段一段と悲慘の境遇を階下して終に牢獄又は癲狂院に其運命の終はりを見るに至らしむるの光景を描きたる巴黎の名工ルグレーンの作の如きは之を一瞥せしむるだけで既に幾萬の酒客を翻然開悟せしむるに足るの魔力否な眞の勢力ありと思はれた程である、圖畫の出品は佛蘭西が一番多く英吉利、獨逸之れに亞ぎ魯西亞からの出品も可なり多くに陳列せられてあつた、第三區は專ら酒毒の人の生理機關に及ぼす影響に就て學術的に調査したる所の結果例へば壽命の上に、體力の上に、又は腦力即ち神經系統の上に發現すべき狀態をば最も理解し易き方法に製表又は製圖したるものを粹めて居る、精神病學の大家ホロッシ氏の病理解剖圖は最も多く人の注意を惹き起さしめたやうである、第四室は食堂である、酒精の飲料物を用ひずして極めて旨く極めて廉くまた極めて愉快に貴賤老幼を通じて攝食するを得るの模範を示さんとするのが即ち此の目的である、所謂下戸にも宜く上戸にも適せしめんとの六かしい注文で瀟灑たる趣向を凝らしたと云ことてあるが果して上戸連を滿足せしむる所ありしや否やは恐くは正當の判斷を下すの道がな

かつたことてあらふ。酒精問題を唱道する者の內にも禁酒派と節酒派の二派がある、又專ら火酒の如き酒精分の多いものを禁遏若くは節制するに止めて麥酒や葡萄酒の如き輕き飲料は之を禁制するの必要なしと唱ふる一派と總べての酒料、如何に「アルコール」分を含むことの少量なるものであつても悉く之を禁遏せねばならぬと極論する一派とある、歸着する所はツマリ双方共に酒毒の禍害を防遏せんと欲するに外ならざるは勿論であるが內部に於ては此流儀違ひより生ずる暗鬪なるものがなか〱豫想以外に烈しいやうであつて之れが爲めに萬國會議などに於ても容易に相談の纒まらぬことが多かつたと云ふことてある、然るに年所の經過と共に追い〱絕對禁酒論の方が勢力を占め麥酒や葡萄酒などに就ても段々其害毒の反て火酒類に優さる所あるも劣る所なしと云ふが如き事實の證明せらるゝことにもなりかた〱先づ今日の大勢、少くも萬國禁酒會議の大勢として絕對に總べての酒精を禁遏せんと欲する方針に傾きつゝありと云ふことを斷言することが出來る、本會の牛耳を執る所のフヲーレル氏の如きも無論、絕對的禁酒論者の錚々たる者である、氏は醫者て心理學者と社會學者と生物學者とを兼て居る所の有名なる大家てある、氏の所說に依れば如何なる場合に於ても又如何に適度なる分量に於ても決して人の生理機關に有益の効果を與ふべきものでない、少量に用ふれば血液の循環を助くるとか或は衰耗せる體力を興奮するの力ありと謂ふが如きは渾へて一も憑據する所なき臆斷たるに過ぎぬ、多くの醫者が卒先して酒精の害毒を鼓吹すべき任務を有しながら尙ほ此暗示的盲動の支配を脫する能はず、世俗を誘惑しまた自己を蠱毒して悟る所なきは遺憾なり、醫者は其職責上、禁酒家たるべき自然の義務を有する所の者であつて禁酒の運命は殆んど一に醫者の匙加減に由て左右せらるべきものとも言ひ得らるべきである、醫者にして積年の迷夢を破り惰習を脫して大に奮進努力するに非ざれば永劫禁酒の目的を完ふすること能はざるべし云々と云ふにあつて氏自身か醫者であるが爲めてもあらふが滔々た

る世間の醫者の不養生と不謹愼とを攻撃する論法の峻烈なると共に醫者の前途に囑望する所も亦た甚だ多大である、氏の一派否な萬國會議に參列する者の最多數は大體に於て略ぼ氏と其主義を同ふすることであるが故に瑞西に於ける酒精專賣法に對しては無論、之れに滿足せず瑞典、諾威、芬蘭等の諸國に行はるゝ所の所謂「ゴーテンブルゲル、システム」なるものに對しても亦た一時の姑息法に過ぎずとして之を攻撃するの態度を取つて居るものゝ如くである、序でながら瑞西の專賣法及び瑞典其他の所謂「ゴーテンブルゲル、システム」なるものに就て知り得たる內容の概略を記して見よふ、此二つの方法は其內容に於て何れも一種の專賣法たるに外ならぬのであるが彼れは政府の手にて之を行ひ此れは一私人の力にて之を行ふの相異がある、後者の方は一八六五年の頃、ウヰーゼルグレンと云ふ一僧侶の創意で瑞典の海都ゴーテンブルグに實行を試みたのが起原であつて今では全國到る所の都會地方に普及せられ其地方の數は殆んど九十個所の多きに及んで居ると云ふ、是れは詰り一大私立の株式會社を起して其力で所在地方の酒精類販賣店を買ひ占め之れに代ふるに會社自營の酒店を開き信用ある相當の人物を撰んで其店の主人たらしむるの趣向であつて普通の酒店に固有する所の弊害を防がんが爲めの色々の條件が勵行せられて居る、店主の給料を始めとして點燈、薪炭、修繕、裝飾等の費用は總べて會社の負擔とし礦泉、茶、珈琲、菓子、料理、煙草の類は店主の隨意に之を販賣することを許す、酒店の構造は槪して宏壯開豁であつて裝飾向などに就ては殊に入念を加へ淸潔は最も其厚き注意を竭す所の要點である、日曜日には何人に對しても一切、酒精類の販賣を禁じ、貸賣を禁じ、泥醉者又は十八歲以下の未成年者に對しても亦た酒精の供給を嚴禁す、會社の利益配當は五分を以て限度となし其餘の純益金は之を公共慈慈の事業費に充つるの仕組みである、幸に瑞典に於ては政府を始めとして社會一般の輿論も亦た禁酒又は節酒の必要を確認するに至りたるが爲めに追い〳〵立法の上からも亦た之を奬勵

保護するの方針を取り之れと相待つて益々圓滑に「ゴーチブルグルシステム」の成功を遂げつゝあるの現況を見るに至ることが出來たと云ふことであつて固とより一方には多少の非難あるを免かれぬことではあるが此方法の普及の爲めに少くも瑞典に於ける酒精類釀造高の減少、風俗の改良殊に飲酒に基く諸種の犯罪件數の著るしき減少を見るに至りたることは爭ふべからざる實際の事實であると云ふことである（alsErfolge des Systems werden angegeben: das bedeutende Sinken des Schnapskonsums, die merkliche Besserung der sittlichen Zustände, erhebliche Abnahme der Bestrafungen wegen Trunkenheits vorgehen. Bär.)、曾て（一八八九年）巴黎て開いた萬國會議て「酒精は酒店の數に伴ふて幾何學的に其害毒を蔓延せしむるものである」と宣言したことがあるが兎に角、一地方に多くの酒店の開業せらるるものあるを見ると云ふことは酒毒製造所の多いと同じ譯て風敎の爲め甚だ憂ふべきの現象であると思ふ、是等は差向き何とか警察規則の上に相當の取締を要すべきことてあつて現に獨逸の職業條例改正案などの上に於ても入口に對する酒店業の制限、酒精貸賣の禁止等の規定が見へて居るやうに記憶する、それから瑞西の酒精專賣法、是れは一八八七年以來、聯邦法に由て酒精の製造及び輸入の總べてを官營の一手に歸屬せしめた所の方法てあつて是れにもまた一つの特色がある、即ち酒精官營に由て得たる純益の十「プロセント」は酒毒豫防の公共事業費に充つべしと云ふことてある、所謂公共事業の費用とはどんなものであるかと云ふに（一）幼年者の敎育及び矯正に關すること即ち棄兒、不良少年又は犯罪幼者を收容感化する所の建設物維持の經費（二）孤兒、白痴、低能又は癲癇性の幼兒女を保護するの經費（三）瘋狂院費（四）貧民の營養を保護するに必要施設の經費（細民給食所、消費組合、小學貧兒童の給食、兒童夏期旅行の補助等）（五）講演、出版物等酒精の害毒を一般に周知せしむるに適當なる方法を實行するに必要なる經費（六）酒狂院の建設及び維持費（七）免囚保護事業の補助費及び行旅貧民の宿食費等の種類てある、

社會政策の理想を實現するに足る所の誠に嘆稱すべき着眼であると信ずる、酒精官營の結果は良好であつて官營に關する總べての事業費を見てゝ尙ほ年々約五百萬「フラン」以上の純益を收めつゝありと云ふことである、其十分の一、即ち年々五十萬「フラン」內外の金が自然に浮て來て公共慈善の費用に利用せらるゝと云ふことであるから誠に好都合の算當のやうに思ふが利弊の兩側面から研究して見るとまたそふも行かぬものと見へて瑞西に於ける禁酒主義の有力なる團體である所の靑十字社の如きは常に此專賣法に向て惡感不滿の意を表し「フヲーレル」一派の絕對禁酒主義の論者からは國家自ら女衒的醜行を犯して人身賣買に依る不當利得を私するものと一般なりと云ふが如き烈しい攻擊を受けつゝありと云ふ始末である、今日では文明各國、何處へ行つても此酒精に對して多少の制限少くも恐るべき酒精の害毒を認めて成るべく之を制限せんとする公私、何等かの働きあるを見ざるはなきの實況であるが就中、立法上の公力を以て最も思ひ切つて之を抑壓するの方針を勵行して居る所の國は北米聯邦中のメーン、カンサス、ヲハイヲ、ロードアイランド、アイヲワ等である、歐羅巴の內で禁酒主義の割合に善く實行せられて居る所の國は流石に禁酒家の泰斗テヲバルトマツソーを出した本家だけあつて先づ指を英國に屈するが至當であらふと思ふ、英國を旅行した所の人は知るであらふが倫敦を始めとしてビルミングハム、マンチエスタア、オックスフヲルド等到る所の都に所謂「テンペランスホテル」即ち「ノービーア」「ノーワイン」の看版を揭げて居る所の「ホテル」がある、日本の茶代廢止の宿屋とは違つて普通のに比すると此方が反て品格の高い部に數へられてあつて中流以上の紳士淑女は成るべく「テンペランスホテル」の方を撰ぶ風になつて居る、英國に亞いでは瑞西である、瑞典諾威の二國は先づ瑞西と伯仲の間にありと云ひ得らるべしと思ふ、佛蘭西は例の「アブサント」の爲めに年々非常の慘害を蒙むり夙に先覺の識者に由つて國力の銷沈も亦た此に原因する所、少からざるべしと唱へられて居る

にも拘はらず兎角倘ほ未だ遲々として禁酒主義の實行を普及せしめ能はざるものゝ如き實況である、禁酒主義の上から濟度の甚だ困難なるべしと思はるゝものは獨逸及び魯國の國民だらうと云ふ先覺者の說である、然かも獨逸にあつては年々長足の進歩を以て禁酒主義の運動を盛んならしめ其勢力範圍は既に意外に廣く擴充せられたるものゝ如くに見へる、各官衙内に於ける麥酒飲用の禁止、官吏殊に鐵道官吏の間に締結せられたる禁酒同盟の如き何れも最近の出來事として實際的に實行の歩を進めつゝあることが分かる、酒精問題に關する學術的及び通俗的出版物の類も近年に至つて俄かに增加の傾きを呈したものゝ如くである、其他酒療院の如きも目下既に各地方を通じて二十個所の多きを有し政府は之れに向て年々相當の補助費をも支出して居る、思ふに職業條例改正案の決定を見ることにでもなつたら一層禁酒主義の氣焔を高めることであらう瑞西にはあの小さい國であるに拘はらず倘ほ全體を通じて大小五百軒餘の禁酒旅店があると云ふ、世間の大公園とも稱せらるゝ瑞西、殆んど年中、觀光外客の懐を當てにして暮らしを立てゝ居るかとも思はるゝ此國の旅店にして畢竟營業上の利益あればこそ禁酒主義を實行しつゝあることゝ思ふ、人の爲めになるの一面には同時にまた己れを利するの裏面がある禁酒旅舍、禁酒下宿、若くは禁酒料理店—日本にも既に實行せられて居ることではあらうが若し果して禁酒が實行せらるゝことであつたら如何に旅舍の居心が愉快であらふ、如何に下宿の弊風が一洗し得らるゝことであらふ、國として酒毒の慘害をば最も甚しく蒙つて居るのが魯國である、上流になればなるほど益々其慘毒が甚しいと云ふことで滔々たる魯國の上流者は總べて是れ病膏盲に入つて到底改良の見込みなき酒精中毒者であると酷評した者もある、上みの好む所、下も之れより甚しと言ふが如く上みに倣ふは下俗の常、上流既に此くの如しとすれば國を擧げて「ウヲッカー」に醉死するの民たらしむるに至るべきは當然である、萬國會議に於てバロッシー教授が酒精問題に關する一場の講演を試み

たる終はりの段に日本軍をして常勝軍の名譽を博するに至らしめたるは偶然に非ず、彼れ泥醉の弱兵、否な彼の二六時中、常に「シャンペン」の爲めに昏睡狀態に陷れる將校の指揮の下に盲動する所の魯西亞軍爭てか能く新鋭剛毅、常に淸淨なる水の力に其森嚴犯すべからざるの軍紀を振肅せしめられつゝある日本軍の敵たることを得べけんやと云ふ一句があつた（…Schon dazum war es nicht zu verwundern,dass der immer nüchterne Japaner fortwährend Siege auf siege über diese Säuferarmee davontrugProf. Palóczy）、形容の餘まりに極端に失して居る嫌ひはあるが少くも若し酒精を魯軍より取り除くことが出來たならば最ふ少こしは我れに取つて相手として耻かしからぬ資格を全ふし得せしめたことであらふ獨逸のミユンヘンは誰れも知る麥酒の釀造元として名高い都府である、此所の大學に居るゼンチーネル教授の調査報告に依ればバワリヤ（即ち「ミユンヘン」所在の一聯邦國）に於ける料理店の主人は平均五十歲釀造家の主人は平均四十歲に達せざる以前に死亡するの事實

だと云ふことである、會議には個人としてまた團體の代表者として婦人の出席者が二百名近くも見へて居つた、各國到る所に婦人禁酒同盟會なるものゝ設けあるを見ると云ふことであるが曰く醫師、曰く教育家曰く宗教家、是等のものすべて禁酒運動に對する最も有力の「ファクトル」たるに相違ないが其れ以上に尙ほ偉大の勢力を有し得らるべしと思はるゝものは婦人である日本の今日に幸に酒毒の未だ甚しき猖獗を逞ふするに至らざる所以のもの蓋し我が家庭の保護神たる婦人の最多數が自然の禁酒家たる資格を全ふして居るが爲めであると思ふ、此上、若し積極的に進んで禁酒運動を試むるやうになつたならば歐米各國等に比して必らず一層、成功の著るしきもののあるべきを信ず、匈牙利にも數年以前より婦人禁酒同盟會なるものが設けられてあつて上流知名の婦人も多數、之れに加盟して居ると云ふことである、萬國會議の機會を利用して其總會を開くと云ふことで僕も案內を受けて之れに臨席するの榮を得た、數番の演說、多くは皆、女性の擔任する所に

して來賓としては歐洲の禁酒運動界に有名なる女傑グレー夫人、カンウキッツ夫人（維納婦人禁酒會々長）等の講演あり、正々の論、滔々の辯有髯男子も後へに瞠若たらざるを得ざるの感に打たれたことである、萬國會議には必らず諸種の宴會又は接待式の伴ふものであつて禁酒會も亦た其例に漏れず、曰く王室の接待曰く政府の招宴曰く市長の慰勞會曰く聯合慈善團體の歡迎會其他或は「エキスカーション」あり或は有志の懇親會あり、朝餐を除くの外、會議中は殆んど單獨にて食卓に就くことは稀れてあつた、會食には必らず酒盃あり、酒盃の强制必らず之れに伴ふ、下戶僕の如き者の殊に苦痛に堪へざる所なるが流石に本會議に關係して催ふされたる各種の宴會には曾て一とたびも酒氣を用ひず、卓上に排列せる大小各種の酒盃、一見して毫も普通の酒席と異る所なきのみならず給仕の齎らす所の酒瓶を見るも麥酒あり、「シャンペン」あり、白赤各種の葡萄酒あり、「リコイル」と思ほしきものまた數種あり、然かも內容は是れ淸水のみ礦泉のみ生乳のみ然らざれば卽ち下口の口に適する「リモナーデ」又は各種の菓實を以て製造せられたる甘味の飮料たるに過ぎず酒に捨つる所を以て之を食費に充つ、食膳豐富にして調理、また一段の精を凝らす、下戶黨の我等に取りて萬歲、之れに如くものなきは言ふを俟たず、八百の會衆男女、盡く淸き半夜の樂みに均霑し和氣堂に滿ちて快興益々深し、眞に是れ理想的社交の粹を實現したるものと謂つべきか我れは常に宴會は苦痛のものなりと謂ふ、慰勞の爲めに開かるゝ所の宴會も我れに取りては空しく唯だ疲勞を加へしめらるゝ所のものたるに過ぎざるの感がある、宴會に酒あればなり、酒を取除けしめらるゝことに由つて宴會は此に始めて樂みの意義を生じ我れも社交の人となつて吾人々類の本分を全ふすることを得んか

酒は百惡の長なり、世に犯罪の絕へざるも之れが爲めなり、不和、喧騷、無智、殘忍、貧苦、淫猥、虛僞、陷擠若くは諸種の疾病の如きも多くは此に基き不健全なる社會主義の勃興を見んとするに至りたるも、亦た之れあ

るが爲めなり、個人の敵、家庭の敵、社會の敵斯くしてまた彼れは吾人々類の不倶戴天の讎敵なり、火藥の爲めに國を失ふは少くして火水の爲めに國を亡ぼすものは古來其例に乏しからず、彼れは「ヘック」となつて埃及を亡ぼし彼れは「メルーム」となつて羅馬希臘を奪ひまた彼れは現に「シナップス」となつて「インヂヤ」「ネーグロ」等の憐れむべき原人種を族滅しつゝあるに非ずや、詩家ウエーベルの酒盃に銘するの歌に

破壞は此器の内に棲む
窮乏は其底の上に漂ふ
其泡立つ音に墮落の聲を聽け
死の神は其緣邊に舞踏しつゝあるに非ずや

と云ふが如く酒精のある所、凡べての不幸、凡べての罪惡は必らず之れに伴ふ、今試みに酒の犯罪に對して如何なる影響を及ぼすものなるかの一斑を觀察して見よふと思ふ

ベール曰く犯罪の增加は必らず酒精消費高の增加に伴ふ、酒稅に由つて得る國庫の收入は警察、裁判、監獄、病院、勞役場、瘋狂院等の費用に充てゝ尚ほ之れに多くの足前を餘義なくせしめられざるを得ずと之れと同し意味に於て普王フレデリッキ、ウヰルリヤム四世は曾て朕は我が國家の爲めに酒稅收入の零に歸するの日あらんことを切望して止まざるものなりと言はれたこともありと云ふことである、現にまた一八八〇年、ブレーメンに開いた獨逸監獄協會の總會に於ても滿場一致を以て「獨逸監獄官吏の實驗に依れば大小各種の犯罪、少くも其大部分は直接間接の原因を以て之を酒精に歸せしむるの適當なるを確認す」と云ふ提案を可決して居るが如く其他各專門大家の研究した所に由つて之を見ても兎に角酒の爲めに多くの犯罪を生出すべしと云ふ一般の想像は今日に在つては最早、想像に非ずして實際の事實に適合したる定論と認めざるを得ぬ譯である、酒が犯罪の原因として働くには固とより間接と直接の區別があつて酒の爲めに神經及び心的狀態の上に影響を受ける、其影響の爲めに理解力を弱め判斷力を鈍らし思考力を麻痺するの結果は所謂自省克己の

能力を失ひ僅か計りの外的刺激に對しても忽ち之れが爲めに其自然の獸性を反撥せしめらるゝことになる、斯くの如き瞬間狀態が幾度となく繰り回へさるゝ內にはそれが何時となく習慣となり慢性となり此に終に酒客の盲心、殘暴、道德的觀念及び意識の喪失と云ふが如き常態を現出するに至らしむべきは必然であつて此常態の前途には必らず犯罪あり、酒と犯罪、其間に心態變化の一段階がある所に由つて之を見れば是等は即ち酒の犯罪に對する間接的原因の部に屬するものと見て善いと思ふ、ベールが普國に於ける四十九の男懲役監及び三十二の男禁錮監並に十八の女懲役及び禁錮監と二十一個所の勞役場に就き男囚、三萬四十一人女囚二千七百九十六人合計三萬二千八百三十一人を調査したる所に依れば男囚の內、一萬三千百九十九人即ち百分の四三、九女囚の內、五百十七人即ち百分の一八、八は所謂酒客と認むべき者であつたと云ふことである（ラング、アッシャッフェンブルグ等の諸家の最近に調査したる結果も亦た略ぼ此に同じく以下、ベールの報告を基礎として述ぶる所のものも大概ね此二氏を始め其他の多くのヲーソルチーに由つて調査の確實なるを證明せられたるものにかゝる）尙ほ左に少しく細かに右の調査に基く男囚に就ての酒と犯罪の關係を記述すべし

懲役男囚一一九、五三一人、此內酒客と認むべき者、八、八一七人即ち百分の四五の割合に當る、此酒客の內更らに之を一時的酒客と常習的酒客とに區別して調査するに前者の數は四、六〇六人即ち百分の二三、六、後者の數は四、二一一人即ち百分の二一、五と云ふ割合になる、尙ほ酒客と罪質の關係に就て觀察せんに謀殺は百分の四六、故殺及び故殺未遂は百分の五八、六乃至六一、强盜は百分の六九、重き身體創傷罪は百分の七四、五（獨逸の犯罪地圖に依れば身體創傷罪の最も多く行はるゝ地方はブロムベルグ即ちシナップスの最も多く消費せらるゝ地方、ニーデルバイエルン即麥酒釀造の本元、及びバルツ即ち葡萄酒の生產地方として最も有名なる場所是れなり）竊盜は百分の八四、奸淫罪百

分の六〇、是れだけが即ち酒客に由つて而かも其酩酊狀態に於て犯されたる事實であると云ふ所に就て之を見るも酒客の多數の者は即ち酒より蒙むる物質的強制の下に所謂思慮分別力を失はしめられて以て此に至つたものであると云ふことが分かる放火犯の如きが殊に其適例であつて固とより放火の大罪を犯すやうな者の內には豫てより惡意を挾み計畫を凝らして居る者の少くないことは勿論であるがこふ云ふ奴でさへも愈々實行に着手する場合になると先づ酒の力を借りる若くは酒の爲めに實行の決心を促がされたと云ふやうな事實が多いのである、ベールは放火犯罪者の內、百分の四七、六殆んど四八の酒客を發見したと報告して居る、累犯者即ち慣習的又は職業的犯罪者と稱する者の內に殊に多數の酒客を見ると云ふの事實は頗る注目に價することであると思ふ、即ち前にも述べた通りに總べての懲役男囚に對する酒客の割合は百分の四五と云ふことであるが是れが累犯者だけに就て調べて見ると再犯者即ち前に一度犯罪したことのある者の內に於ける酒客の割合が百分の四九、八、再犯以上の者即ち再三再四、犯罪を累ぬる種類の者には更に進んで百分の五五に當る酒客の割合を見ることになる、酒に進むは即ち犯罪に進むものであると云ふの事實を證明することが出來る、

飜つて禁錮囚人の方に就ての調査を見るに總計七、三九二人の內酒客三、三二四人即ち百分の四一、二、更に此內に就て細別すると一時的酒客が二、四六五人即ち百分の三〇、五常習的酒客が八五九人即ち百分の一〇、七と云ふ割合になる、懲役囚に比して禁錮囚に常習的酒客の非常に少ない殆んど其半數に過ぎざるの事實は大に注意すべき所の現象であるが是れは輕罪の多くが一時的酒力の影響を受けて犯かさるゝものであらうと云ふの事實を證明すると共に一方にはまた酩酊に依る意識の耗弱と云ふことが刑法上に所謂酌量輕減の理由となつて犯罪自身としては重罪即ち懲役に處せらるべきものも輕罪禁錮の刑に輕減せしめる場合の多いと云ふ事實を表示するものである、酒客と罪質の割

合は輕き窃盗が百分の三二、詐欺取財が僅かに百分の二五の割合に過ぎぬ、此種の犯罪に就ては何故に斯くの如く酒客の割合が少いかと云ふに是れは即ち犯罪自體の性質が然らしむるものであつて輕き窃盗と云ふやうなものは重もに經濟的事情即ち貧困、窮乏、怠慢、勞働の缺乏等の事情に基くものであつて酒と直接の關係を持つべき場合の少いが爲めてある、又詐欺取財の如きものに至つては是れは言ふまでもなく深考熟慮を要するものであるが故に酒客は寧ろ此犯罪に無資格てあると云ふ事實を證明することが出來る、然るに同じ輕罪の內ても毆打創傷罪を犯すが如き者に就て之を見ると受刑者一、一三〇人の內七一六人即ち百分の六三、四に該當するの割合が酩酊狀態に於て犯罪を爲したるものであると云ふ事實てあつて此內、一時的酒客が五八一人即ち百分の八一、一、常習的酒客なるものが一三五人即ち百分の一八、九の割合を占めて居る、毆打創傷罪などを犯す者の最多數は勞働者又は血氣盛りの壯丁であつて平生は極めて眞面目てあるが酒を飲むと終に之れか爲めに氣を狂はされて口論が喧嘩となり打合となり打合の果てが此に毆打創傷罪を構成すると云ふことになる、此犯罪に一時的酒客の最多數を占むる所以は即ち之れが爲めて常習的酒客などゝ云ふ奴になると滅多に酒宴などの席には顏を出さぬ、顏を出しても多くは隅に引つ込んで酒を飲むに專らてあると云ふ始末である、最近刊行の獨逸帝國刑事統計年鑑の示す所に依れば毆打創傷罪の最も多く生ずる場合は日曜日にして月曜之れに亞ぎ土曜また僅かに月曜に讓るも他曜日に比しては遙かに優勢を占む、火曜以來遞減し金曜に至つて最も少數となる、是れは即ち土曜の勘定日を日曜に持越し休暇を利用して此に御輿を据へ月曜に至つて宿醉尙ほ醒めずと云ふの影響事實を證明して居るものであると言ひ得らるべしと思ふ、國權に對する反抗罪即ち官吏に抵抗し又は其職務の執行を妨害すると云ふが如き犯罪であるが其處分を受けたる者六五二人の內四九九人即ち百分の七六、五は酒客であつて尙ほ其內に四四五人即ち百分の八九の多き一時的酒客ある

を見る、家安妨害罪の處刑者中、酒客二二三人、此内二一〇人即ち百分の九四までは是れまた一時的酒客である、奸淫罪二〇〇人、此内酒客の數一五四人、即ち總數に對する百分の七七の多きを占むるの割合であつて此内、一時的酒客一一三人即ち百分の七三、三、常習的酒客四一人即ち百分の二六、七の數を見る、シャルテンマイエルが醉へる時に惡魔來ると謂ひしか如く酒に飲まるゝは酒客の常、一時的酒客と云へば一寸、罪の淺いやうにも聞へるが其實反て罪が深い社會に取つては最も危險の儕物と謂ふべき者であつて酒が犯罪の上に如何に大なる直接的原因をなすかもまた彼れに由つて其事實を明證し得らるゝことが出來る。

グーリーは佛國に於ける謀殺一萬件の内二、三七四件は酒舖に在つて犯されたるものなりと言ひマレンバーは四人五、三二二人に就て調査を遂げ此内、酒客と認むべき者百分の六六以上あり、尚ほ累犯者の內には一層多くの割合即ち百分の七五に當る酒客の數を發見したと報告して居る、ロンブロゾーの調査に依れば英國に於ける犯罪者二九、七五二、人の內一〇、〇〇〇人までは酒精と直接の關係を有し九〇、九〇三人の內五〇、〇〇〇人は酒舖に於て犯罪を爲したるの事實であると云ふことである。蘇蘭にあつては酒舖に對して日曜閉店の規則を勵行するの結果他の各曜日に於て毎日平均百七十二人の逮捕犯罪者あるを見るに反し日曜日に限つては僅かに平均二十二人の少數を出だすに過ぎずと云ひ又英領印度の軍隊に就て調査したる所に依れば犯罪千に對する酒客九二、八四の割合なるに反し酒客に非ざる者僅かに三九、七〇に出でずと云ふ此現象を見てサー、リチャルド、テンプルは兵卒にして若し酒精より遠ざかることを得ば彼れはまた犯罪に陷るが如き虞なかるべしと云ひヒルチィ氏は幸にして若し酒精を軍隊より取除くことを得ば此に終に軍事裁判の撤回を見るに至ることを得べしと述べて居る

之を要するにラングが足を酒舖に入るゝ者は監獄又は癲狂院の門に向つて一歩を進むる者なりと評したるが如く酒が犯罪に對して直接間接に至大の關係を有する

ものなることは東西古今を通じて爭ふべからざるの事實であつて幸に禁酒主義の必要が一般に認められ且つ普く實行せらるゝことになるを得ば之れが爲めに多くの裁判所は閉鎖せられ且つ在監受刑者の少くも半數は之を減少し得らるべしと思ふ、文明の進むと共に從て酒精も亦た益々其猖獗を逞ふし之れに伴ふて犯罪の增加は愈々進んで殆んど底止する所を知らざるの勢である、上流と下層の區別なく社會到る所に最早酒精の慘毒を蒙つて居らぬ所は無い、彼れは財產を奪ひ生命を奪ひ健康を奪ひ公安を奪ひ又彼れは兒童の無垢と婦女の淸節とを併せ奪ふ、血の海、涕の雨、また神を呪ひ天を泣かしむる幾多の波瀾、其湧く所は皆酒精にあり、酒精は吾人々類の不倶戴天の讐敵なりと謂ふ所以にして吾人は宜しく國家的及び社會的爲し得らるゝ凡ての方法手段を盡して之れが剿滅を計ることに全力を注がねばならぬことゝ信ず

予はシカゴにて何を見たる乎

金子喜一

予は紐育を去りて新英州にいり、新英州を去りて終にシカゴに來れり、予は紐育にありて黃金の全盛を見たり、而して新英州にありては、多くの儀式的ヒポクリシーを見たり、シカゴに於て予は果して何を見たる乎。

世人シカゴを說く者は先づ曰ふ。『シカゴはキタナキ町也』と而してその他を知らざる也、シカゴは曰ふまでもなく煙多き町也、紐育は固炭（ハードコール）を用ゆれども、シカゴは柔炭（ソーフトコール）を用ゆるが故に從ふて煙多き也、塵多き也、世人の所謂『キタナキ町』なる也。

然れども柔炭を用ひて煙多きことと、『ジヤングル』に依りて不潔の名をなせしアーモアの製肉所とを除きてシカゴに就いては曰ふ所あらざる乎、否な大に然らざる也、吾人の見る所を以てすれば、シカゴは紐育よりも進步せる町也、紐育よりも文明に一步を進め居る也。

人一度シカゴに來れば、先づその不調和なる建物に驚かされむ、不調和なる電車に驚かされむ、唯だにその建築物、街衢のみにあらざる也、總て眼目にうつる者一つとして不調和ならざるはなし、最も進步せる

置は最も退歩せる設置と併立し、最も善美なる光景は、最も醜惡なる光景と相接す。

而もこれシカゴの特色、偉大、將來のありて存ずる所も又これあるか故也、思ひ見よ、シカゴ市の發達は吾か日本の飛躍史よりも更らに驚くべき飛躍史也、百年前のシカゴには只だ一個の壘場（フォート）のありしのみ、何等の住民もあらざりし也、八十年前のシカゴはなほいまだ亞米利加土人の跋扈する所にして、少數の市民は往々その迫害を受けたりし也、シカゴ市の紀元は實に今より五十年前に創まりしと曰ふも不可なき也。

而して今日のシカゴは如何、人口二百萬餘を有し、米國に於て紐育を除きて、商業に於ても工業に於ても、學術に於ても比較を見る能はざるほどまでに、進步發展せり。

予は物質的側面に於ては、紐育にて見たるものと、シカゴにて見る所のものと多くの差異を見出す能はず、物質的進步に於ては紐育もシカゴも見たり難く弟たり難きの觀あり、而して精神的側面に於ては、予はその甚だ異なるものあるを見る、異なるものとは何ぞや。

曰くその向上的精神の發現これ也。紐育にありては予その黃金萬能力を見る、黃金萬能力のみを見る、從ひて一種のあはれむべき滿足を見る也、『予は萬金の持主也』てふ一種のプライドを見る、紐育は黃金の勢力に滿足せる陰府（インプ）也、

シカゴには然らざる也、素よりシカゴにも黃金の勢力は强し、而も向上的精神の强大なる者又ありて存ず、それを事實に徵せば、無政府主義の强大なる勢力もこのシカゴにあり、予は數日前メーソニック會堂（テムプル）の一室に於て彼等の集會に列せり、その自由の討論、横議實に近來予のまれに聞きし所なりき。彼等は自ら社會科學協會（ソシャルサイセンスリーグ）と稱してその集會をなせる也、同日の論題は「單稅主義」にてシカゴ有數の單稅家の講演ありて後例の質議ありたり、質議者には社會主義者あり、單稅家あり無政府主義家あり甲論乙駁その盡くる所なきほどなりし、而て最も快絕なりしは質議者中五十歲餘の一老婆壇上に現はれ來りて、熱心に無政府主義の見地より講演者を駁し、壇を下るや否や傍（カタワラ）に座し居りし一同志にすがりつきて頻る無邪氣に接吻せし狀は、滿堂の聽衆をして感嘆措く能はざらしめたり。

社會主義の運動もシカゴに於ては一大勢力たり、先年市有主義者のダン撰擧の時の如きも、社會主義は一大打擊を彼等に與へし也、先年米國社會黨大會の開かれしもこのシカゴ也、今冬正に來りつゝある撰擧に當りて二週間の間社會黨日刊新前の發行を實行せんとするも『シカゴ社會黨（ソシャリスト）』也、抑も社會黨の日刊新聞計畫たるや、米國にありてはいまだ空前の事實にして、『シカゴ社會黨』はこれが先驅者たらんとする者也、勿論社會勞働黨日刊は已に既に紐育にありと雖も、これ所謂世界的社會黨にあらずして一種の地步（ローカル）運動たるに過ぎず、近者ミルオーキー市に於て又社會黨日刊の計くわくありと曰ふもいまだ事實として現はるるは多少の時日を要することとならむ。されば事實に於てシカゴ社會黨日刊は米國にて最初の企くわくたり、而て同記者サイモンス君の語る所に依ればこ

の日刊は唯だ罷業二週間のみに止めずして、今後永久に繼續發行の決心也と。

予はシカゴに於て又「新思想（ニユーソート）」運動の盛大なるを見る、彼等にはその機關紙「新思想（ニユーソート）」ありて、その特長たる向上的、樂天觀を說法してあり、新思想は一種の宗教運動也、精神運動也、當今米國の有名なる新聞記者、小說家、文士にして此の一派に加はらざるもの盡しまれ也、閨秀詩人にして、ジヨーナル記者として有名なるウイルコツクス女史も熱心なる新思想家なり、詩人クロスビーも代表的新思想家たり、小說家アトキンソンも同主義家なり、その他數へ來れば吾人はその餘りに多きに耐へざる也。

予は又シカゴに於て菜食論者の多數なるを認めたり彼等は『菜食雜誌（ベヂタリヤンマガヂン）』を發行してその主義の擴張につとめ居れり、菜食料理店の如きも、紐育市には僅に三個所なるに比してシカゴは五ヶ所を有せり、『菜食雜誌』主筆のエルフリンク君の如きは最も熱心なる菜食家なり。

予は又シカゴに於て米國有數なる婦人社會改良家あるを見たり、シカゴ、フール館の館主にして、『デモクラシーと倫理』の著者、ジエーン、アダムス孃、女醫デイベイ孃、慈善局のレースロツプ孃、トレード組合運動（ユニオン）家たるマクドウエル孃、市有主義のチヤムピオン、ヘエーレー孃等は『シカゴ五人オバサン（シカゴス、フハイブ、メードン、アンツ）』として知られたる老孃にして、シカゴ市中五孃の名を知らぬ者はなきほど也、シカゴに起れる社會問題と日ふ問題にして同女等の關係せざる問題は一つもなしと日ふ、一昨年の製肉所同盟罷工の時の如きも、デイベイ孃は勞働者の側に起ちて努力同盟罷工を成功せしめたり、ジエーンアダムス孃のフール館は蓋しシカゴ市民の誇りたらざるべからず、外國移民の巢窟にして貧民街たるホールステツド町に嶄然として起てる同館は如何に多くの貧民に文明の餘澤を味はしめしとするぞ。酒屋に集まるべき勞働者もこゝに來りて、有益なる講話に耳傾くる也、予は米國何所を探しても、シカゴを除きてかゝる有力なる五女性改良家ある市を見出す能はず。

予は又シカゴに於て極端なる女權主張家ハルマン翁の如きあるを學びたり、ハルマン君の雜誌『ルシフハー』世界唯一の二つと見ざる最も進步せる女權雜誌也、予は幸にして『ルシフハー』のため、日本の一小話を英譯せし緣（エン）よりして、ハルマン翁の一女リリヤン女史と交通の道を開き遂に知遇を得るに到れり、予は彼等の熱心なる獻身的精神に深く動かされたり、

この他シカゴに於ては米國唯一の佛學者たるケーラス博士あり、彼は常にその『オープンコート』『モニイスト』等の雜誌を通して佛道の傳緖につとめつゝあり、今日米人が多少なりとも東洋思想を哲學的に味ひ得るに至りしは、ケーラス博士の盡力に依る所多大なりと日はざるを得ず、同君の著『佛陀の福音（ゼゴスペルオブブツダ）』の如きは英語にてかゝれたる佛教書中最も平易にして、簡明なるものの一つと日ふも不當ならず、又ケーラス博士は鈴木大拙君と共に老子の道德經を英譯せられたり。印度セオソフイスト一派の勢力も又シカゴにあり、彼等は多くの富豪役者學者間に持てはやされ

て中々の勢力也。有名なるザイチン市のダアウヰイーありてその勢力やあなどるべからず然れどもこれ恰も天理教の一種なれば予は向上的シカゴ市の代表となすを許さず、

つゞめて曰はば、シカゴは進歩思想家の市也、『ラヂカルスの町也』、あらゆる急進的思想あらゆる社會運動はこゝに保育せらるる也、信奉せらるる也、勢力を作りつゝある也、根據地となしつゝある也、注意せよ、シカゴ三百萬の市民は悉くこれ商賈(しやうか)にてあらざる也、黄金崇拜宗のみにてあらざる也、彼等は無政府主義者なり、社會主義者也、佛徒也、新想思家なり彼等の中にはサーコンベ君一派の如きホイツトマン信奉宗すらもあるる也。

予はシカゴ市民に於てはしめて現代の物質宗、黄金崇拜宗に對する、強激なる反抗の氣風を見たる也、予は已に米國學問の府と呼ばれしボストンを見たり政治の首府たるワシントンも見たり、歷史的都市たるフヒラデルフヒヤをも見舞ふたり商業熱(コムマーシヤリズム)の横行せる紐育にも住みたり、工場に富めるプロビデンスにも住みたり、然れどもこれらの諸都市に於ては、いまだこの強大なる物質文明に對する反抗の聲を聞く能はざりし、

シカゴ文明の不調和それ自身は果してこの産物を產み出せしか、將た又これ一般文明に對する不平の徒がこのミシガン湖畔の新開地に集り來りしもの乎、予は今深くその理由を探ぐるの暇あらざる也、何れにしても他日もし米國社會問題解決の使命を負ふ先驅者たるものありとすればそはシカゴ市民也、吾人は米國現代の文明を考察して、而して一轉シカゴ市民の存在を思ふ時は、潛かに微笑の禁じ難きものなくんばあらざる也

文藝雜考

遊戲としての創作

醒雪

嘗て本誌にも論じたことがあるが、日本の歌人俳人は、皆古の君子であつて、人の爲にする和歌俳諧てはない、必ず己の爲にするのだと心得て居つたものだ。現に、去來なども、「俳諧は萬人にかなへんことは易し、一人にかなへんことは難し、人の爲の俳諧ならばなしよからんなどといつてゐる、景樹なども、亡妻を傷む秀歌を得て、大に自ら慰めたことを說いて、これを以つて詩歌の德としてゐる。既に讀者の爲の創作ではなくて、作者の爲の創作であるから、例へば二條家の歌人のやうに、和歌三昧は。神慮に適ひ、佛果の緣となると說くか、或は鬼貫のやうに修身道德に益があ

るといふか、乃至は芭蕉のやうに、俳諧は風雅の爲なり、風雅は俳諧の爲なり、名は二にして實は一なりと悟らするか、その孰れかに歸着せねばならぬ。若しそのいづれでもないとすれば、和歌俳諧は遊戲なりと斷ずる外はなからう。

無用の書を著して有用の書を買ふといつた馬琴から見れば、文藝の耽讀は遊戲であるが、その創作は職業である、入銀を出して自作の葩翳本を出版してもらつた蕩樂者も、創作を遊戲視してゐたであらう、現に戲作と名乘つてをる、だが、そこには又名を賣らうといふ、別の目的がないではなかつた、唯歌人俳人の間には、名をも利をも思はないで、單なる遊戲としてゐたものが尠くないのである。

「人ごとに一つの癖はあるものを我には許せ敷島の道」と何某の法師が詠むだか詠まぬかは問題であらうが、一つの去り難い癖である、最も樂しい遊戲であるといふ考は、王朝の歌人の頭にも既に宿つたものであつて、西行法師すらも、なほ、この遊戲が佛の御心に適ふか適はぬかを疑ひつゝ死んだのである。近く德川期に入つて、大膽にも遊戲であると斷定したのは梅翁宗因であつた。「上手は上手、下手は下手好きなとして遊ぶに若かず、夢幻の戲なり」とは、實に思ひ切つた放言で、創作遊戲觀の爲に萬丈の氣焰を吐いたものと言つてよからう。だが、この人すら、流石に門弟等が放縱な句作を慨いては、犬櫻の句を作つたと、宗因句集の序に記してある、而來蕉風は眞面目なものになつた、俳諧道は人生の意義にも通ずるやうになつた。しかし、芭蕉自身も亦、世間の俳諧に遊ぶものの多數が面白き遊戲としてこれを弄ぶに過ぎないことを認めてゐた。

顧て歌道の方面を見ても、二條家の歌學が權威を失つてからこの方、契仲以來の復古派又は萬葉派の歌人は、古歌に對する古典的研究即ち古代の國民の思想感情の尊重すべき遺物としての研究の如何に貴重なるかは、極力これを主張したのであつたが、歌を詠ずるといふことが、人生に對し國家に對して、如何なる意味があるかといふことは、深く論じてゐないやうで、

神ながらの風俗として、その喜怒哀樂を詠ずるといふのは、美しい優しい遊戯であると認めてをつたに過ぎないやうだ。だから、宣長などは、夕方の薄闇がりなどて、讀書には不便ながら、火を點ずるにはまだ早いといふ頃を、歌を詠む時間と定めてをつたといふことて、必竟古典硏究中の閑つぶしに過ぎない。更に篤胤に至ると、「月花を我もあはれと見てはあれどあはれと謠ふいとなかりけり」と、彌々實務家の本色を發揮してゐる。ではあるが、その所謂る「月花のあはれ」を感知することは、神ながらの道を守るものゝ當然なる資格であつて、その「あはれ」といふ心は、敬神尊王の大義とともに、日本國民の誇である、だから、その詠ずるところは、邪のない、外來思想の混じない、純乎たる大和心でなくてはならぬ、宣長が動もすると西行の歌を酷評してゐるのなども、その僧侶であるといふことが、尠からず宣長の感情に影響してゐるらしい、こゝにも、やはり、道德と詩美との交渉を全然度外してゐるとも斷ぜられないやうだ。

然るに、こゝに一人、判然と斷然と文藝を遊戯視してゐる人がある、寶曆の也有がこれである。彼は人道とか職業とかいふものと、全然無關係なる、純乎たる遊戯として詩歌聯俳を說いてゐる。曰く「袴きる日は休まする團扇かな」、袴着るとは人間としての職業に從事するのである、己が職業に從事する時間に於ては、詩歌の類は毫もその頭腦を煩すべきではないと信じた。

曰く「倫理道德は別に師あり、狐狸の豈に欺かれて俳諧と混ずべからず」、と。だから芭蕉の所謂俳諧の心法は也有の關知しない所であつて、俳諧を以つて身を行はんことを說いた去來の徒は、狐狸の豈として罵倒せられてゐるのである。

彼は芭蕉の所謂る「常の人」であつた凡人であつた、唯慰としてのみ俳諧を歡んだのみて、決して俳道に一身を捧げようとは思はなかつたのである。これが爲に、その俳諧は、動もすると敬虔な態度を失つて、稍輕浮なところがある。流石に自在を極めた俳文の中にも、

輕薄な駄洒落が混じてゐないとは斷じ難い、彼の生前は詩人としてよりも寧ろ俗吏として成功した人で、極めて温厚篤實な君子であつた丈に、天然又は詩美に對しては寧ろ冷靜な觀察者で、毫も熱烈な態度がない、否なその詩美に對する天賦の熱烈な感情が、時とすると、我を忘れしめて狂熱的な詩人たらしめようとする瞬間に、忽ち、儒道に養はれた克己心が冷靜な態度に引き戻す、だから浮世の辛酸を嘗め盡して、洒々落々と、あらゆるものに對して微笑してゐるといふ趣はあるが、浮世の外に一歩踏み出したといふ高遠な思想はない、芭蕉も屢々道德を說いてゐるが、それは道德以上の人が、凡人の爲に說く道德であつて、自己の感情の奔放を壓へようとする克己心ではない。

降つて安永の蜀山人これ亦文學を遊戯視してゐたことは同樣で、俗吏としても同樣にまづ成功してゐたといつてよからう、その和漢の學は勿論種々遊戯までに通じてゐたことも、頗る也有に似てゐる、だが、人生に對する考は、也有ほどに生眞面目でなかつた樣で、その感情の奔放に任して、時とすると、眞面目な人間の常軌を逸した擧動もあつた樣だ、從つて、その作物も也有よりは下品で、名高い狂歌の中にも、頗る下等な駄洒落の多いことは、也有の俳文よりも甚しいが、又何となく、窮窟な浮世の埓外に脫出した、思ひきつて小氣味のよい磊々落々たるものがほのめいてゐる。換言すれば、也有は謹直で克己心が强い丈に、例へば、戀の說に、若者の戀愛に同情して、老人の守錢奴よりは、若き程の無分別を見易しと說きつゝも、忽ち借金の山の危險を戒める、箇中の消息に通じないではないが、折角にして觸れた詩興が、强い常識の爲に冷却せられて、蜀山が所謂

世の中をくその如くに見下して屁つぴり儒者と身はなりにけり

といふ境地には遠いのである。

さもあれ、若し遊戯として文藝を弄ばうと思ふならば、也有の見地が最も危險のない立ち場であらう、戰爭の爲に鐵砲を擊つものは、自分の安全ばかりを考へてを

るべきではないが、遊獵の爲に危地を踏むのは智者のことではない。僕は我が文學史の上から見て、日本には文藝に身を捧ぐるものと、文藝を遊戯とするものと、二者が必ず並存すべきものであると信ずる者であつて、僕自身も、若し創作を企てることがあるならば。唯遊戯としてである。だから也有のやうなものも、一人の先聖として尊重すべきものであると信ずるとともに、純文藝の見地から見れば、流石に不十分なところがあるといふことを論じて見たのである。

今の若者には、宛も也有の反對に、感じてもゐない極端な狂熱を描かうとするものが多い、これこそ實に巣鴨行きの代物でなくば、とんだお茶番であらう、凡人は寧ろ正直に凡人らしい作物に遊ぶがよいではないか。

春なが

伊藤まさ女

道を持つて來い

橫須賀の造船廠が、まだ始まつた時分なり凡てのお師匠さんは皆西洋人、中にもふらんすが、一番幅を利かしてゐる

『あなた、道持つて來る宜しい、』

『道を……ハイ』

とは云つたが、職工わからず、聞きかへせば、例の疳癪にちがひなし、まゝよ、どうなるものか、大方ぬかるみへ敷く板だらうと、手頃のものを持つて行けば

『これ板あります、あなた、道わかりません』

ひどく腹を立てゝ、そこら中をかけ廻り、泥を兩手にすくつて來る

『これ道あります、板いりません、日本人駄目あります』

一とまはり

御維新前の話ながら、おかしければこゝに並べます

お醫者樣曰く

『此御病人は、大變疲勞しておゐでなさる、藥も何だが、牛の乳を御

用ひの方が可い』
病人の御亭主曰く
『ハイ、承知致しました、しだが何方で求めませう』
『牛乳かな、牛の乳ならば外にはない、あの雉子橋のな、御厩に行つて、馬丁に頼むが可い、彼等も內職、大方は寄越しませう』
『何で御座いますか、ぢやアあの將軍家の御厩に……
『おらんだから渡つた大きい牛が二頭居ます……飴牛の美事なのぢや……將軍家御料の乳をとる爲めだが毎日上るではなし、ふだんは買ひに行く人に賣りますのサ』
『左樣で御座いますか、ぢやア早速……』
籠と云ふ身分ではなし、其時分の事なれば、悠長に構へて、番町あたりから、遊び半分に、エッチラオッチラ雉子橋へ行き、馬丁にわけをはなしてかん德利にもらつて來る
『先生いたゞいてまゐりました、が、どう頂かせませう』
『左樣さの　かうむしく＼とおあつたかくはあるし、精の强いものぢやに依つて……かうと……あのかうなさい、一合ならば一週間に、二合ならば二週間に……なんの、これを上げれば、即座に御內儀御全快ぢや、イヤ遠路を御苦勞々々々……アッハッハ………』

下座

『オイ君、村上が上京したと云ふが、例の奇人だ、又面白い事もあらう、一つ行つて見やうぢやないか』
『よからう、だが、何處へ泊つて居る』
『何處へとまるもんか、林の家サ、廣くはあるし、馴染ではあるし』
『たしか四片町だつたね』
甲乙二人連立つて、かれて案內の林家へたどりつく
玄關には事なし、入つて見れば村上の居間の前、廊のあなたに小さい札あり能く見れば
『村上三郎御泊』
是には二人せゝら笑つたまゝ通りたれど、座について挨拶もすみ、茶菓も出たのに、入り口に座らせられたまゝなり、村上は一人當り前と云ふつらつきにて、うづだかく荷を積んだ、床を後に斜にかまへてゐるが、いかにも窮なりとて、二人とも
『此野郎』
とは思つたれど、此男のを、わけなうてはかなはずと、云ひ合せた樣に後を見れば巾三尺長さ是にかなふと云ふ紙を欄間に高くかゝげしに、上座とこそは書かれたれ、さてはと床の方を見れば、同じく紙に
『こつちが下座』

明治座

高麗屋や澤瀉屋に寢返りを打たれたとて、これ見よがしの大車輪は、あッぱれ男と買つてやる所なれど、何ぼ何でも小團次にはちと食傷をいたしましたテ
曰く　前田犬濟

曰く　岡崎正行
曰く　六藏
曰く　助六
曰く　五郎

これが万遍なく出られて御覽じ、たとへば第一流の役者だつて、いやになつちまう

孔雀

土手に孔雀と云ふ俥屋があるが、どう云ふ所から出た名だらう

よしてもおくれ

よしてもおくれは、音樂學校のペンキぬり、そのけばけばしさ、もう一つは不忍の新規の橋、辨天樣にそぐなはないと云つたら

にはか雨

俄雨、芝居のかへりがけなどに、白張の傘を賣るは可し、ついでに齒のついた安下駄を賣つたら
但し此方は買つたことなし

蘭蕙始芳

畔柳都太郎

テニスンのイン、メモーリアム八十二節に次の一句がある、

Bring orchis, bring the foxglove shire,
The little speedwell's darling blue,
Deep tulips'dash'd with fiery dew,
Laburnums, dropping-wells of fire.

此うちオルキスを用ゐたのは珍らしい、元來英吉利を本場としての蘭科植物は四十種程もあるけれども何れも見榮えのするものがなく若しくは詩句に這入るやうな資格に乏しい、强ゐて探し廻るならば蝶蘭と早咲紫蘭とが目につくてあらうけれども、併し夫れ〲不足の點がある、蝶蘭 Habenaria bifolia は大きな稍圓形の二葉若しくは一葉を具えたる高さ五六寸乃至一尺六七寸の丈夫さうな一本の莖に十數の白花が黃又は綠の暈を帶びて夕暮より芬香を放ち始める極めて高尚なも

のであるが、惜しいかな海面上約千二百尺の高地にあつて通常衆人の逢遭せざるものであると共に、花期が六月乃至八月といふ他に數多き花の咲く時であつて、机頭に春を携へさする資格を持たせるとまては出來まい、テニスンの詩句は其前後によつて早春を歌つて居ることが明瞭であるから、此場合のオルキスは早咲紫蘭 Orchis mascula を指すに相違ない、是れは早春に野邊牧場森地を飾る淡紅紫色の花であつて、莖の高さ凡そ八九寸、下部は楕圓形の紫斑點ある葉に包まれて、小供等が櫻草や九輪草と一處に摘み去るので何人も熟知して居るが、普通に在るといふことが取柄になるだけて、花色の嫌氣を催さしめると共に堪えがたき匂ひのするのを缺點とする、所詮英詩には蘭が現はれ難い。

試みに蘇轍の幽蘭三首を默讀してみる、

幽花耿耿意羞春。紉佩何人香滿身。一寸芳心須自保。長松百尺有爲薪。

李徑桃蹊次第開。穠香百和襲人來。春風欲擅秋風巧。催出幽蘭繼落梅。

珍重幽蘭開一枝。清香耿耿聽猶疑。定應欲較香高下。故取羣芳競發時。

春初冰霜の後、濃厚ならずして清遠なる幽香の馥郁として衣を襲ふに驚喜し、國香と贊稱し香祖と嘆美して書屋の一本もなほ璧を拱するが如くに愛惜した樣子は所在の詩句で證左を與へることが出來る、或者は竹節梅花松葉に香を加えたものは蘭なりとまで言ふて居る、しかし後世に斯く鄭重するは餘程得難い珍らしい蘭であつて「世俗之蘭生於深山窮谷」とか「江南以蘭爲香祖」とか「北方尤爲難致間得一本置之書屋」とかの文字よりして古書に散見する蘭でないとの想像が湧くてあらうし、事實上後世の蘭なれば紉佩すべき筈がない、後世の蘭は幽蘭であつて上古の蘭は藤袴である、故に詩經の士與女方秉蕑兮と彼澤之陂有蒲與蕑と易經の同心之言其臭如蘭と禮記の婦或賜之飲食衣服布帛佩帨茝蘭則受而獻諸舅姑を始め諸子に散見する蘭は言ふまでもなく孔子が蘭當爲王者香今乃與衆草爲伍と嘆じて猗蘭操に自ら時に逢ざるを傷みて辭を託したるも屈

原が離騷に紉秋蘭以爲佩と歌ひたるも悉く幽蘭ではなくして藤袴である、否、形體の如何は詩領域外に逸して仕舞ひ、秋蘭と言ひ春蘭と言ふ程季節の如何も又同じく隱れて仕舞ひ、唯だ芳香を優視するのみであるが爲めに所謂蘭が果して蘭科植物であるかないかの判斷さへ必要としない詩句も數多ある、劉孝綽の蘭芽隱陳葉とか白居易の掃逕避蘭芽とか陳旅の雨暖蘭抽笋とか芽の方面から句を作ると蘭科だらうと思はれるが、香の方面からだけでは蘭科に春蘭と同じく秋蘭もあるから蘭科か菊科か不明のものが甚だ多い、花の方面からならば明瞭に區別が出來る、例せば元の岑安卿が吐舌終不言と俯首若有思とは花形と花態との特徴が發揮されて居るし、張羽の能白更兼黃は花色が充分に指示されて居る、

岑安卿

猗猗紫蘭花。素稟巖穴趣。移栽碧盆中。似爲香所誤。吐舌終不言。畏此塵垢汚。豈無高節士。幽深共情素。俯首若有思。淸風颯庭戶。

張羽

能白更兼黃。無人亦自芳。寸心原不大。容得許多香。

蕙に到つては更らに分らない、論說紛紛として定見なく、從つて本體の何物なるかを辨知すること難くして或は七月頃の花盟主だと謂ひ、或は早春に蘭と共に佳く匂ふと謂ひ、或は葉は麻の如く兩兩相對して南海に出づと謂ひ、或は鈴蘭だと謂ふ、試みに蘇軾の一首を微吟してみる、

蕙本蘭之族。依然臭味同。曾爲水仙佩。相識楚詞中。幻色雖非實。眞香亦竟空。云何起微馥。鼻觀已先通。

相識楚詞中でなくむば蕙なるもの丶名高くなる筈はなかつたので、從つて後世頭を惱ます種子も蒔かれなかつた筈である、李白の春蕙忽秋草も蕙草留芳根も杜甫の蕙葉亦難留も極めて抽象的の表彰法であつて恐らく當人さへ明瞭の觀念なくして歌つて居たのだらう、蘭蕙と併稱せられながら蕙其ものに關する獨立詩句の

僅少なる事實は此邊の消息を傳へるものと解して差支あるまい、補筆談に次のやうなことが書いてある、

零陵香本名蕙古之蘭蕙是也又名薰左傳曰一薰一蕕十年尚猶有臭即此草也唐人謂之鈴鈴香亦謂之鈴子香謂花倒懸枝間如小鈴也至今京師人買零陵香須擇有鈴子者鈴子乃其花也此本鄙語文士以湖南零陵郡遂附會名之後人又收入本草正經自有薰草條又名蕙草注釋甚明南方處處有之本草傳會其名亦出零陵郡非也。

此文は明らかに鈴蘭即ち百合科の君影草を指示して居る、此推測をして適中せしむること能はざる理因を自分は數ヶ條懷抱して居るけれども、少くとも斯く推測する者を生じたといふ現象は、西歐に於いて比較的近代に詩界の寵幸を專らにし始めたる君影草と、日本に於いて北海道の野生や信州邊の野生を東京に移して樹蔭に滯りなく繁殖すると共に西詩の感化を受けて和歌俳句に昨今詠み込まれる鈴蘭とを聯結して、世界的になりゆく此もの丶前途を祝さずには居られない、自分の見窄らしい瓦鉢にさへ毎年初夏になると可愛らしい鈴を振り始める。

本邦所産の蘭では、建蘭が最も卓絶したるもので、夏末に新苗を生じ始め、淡黃花の微綠暈を帶びたる極めて淸香高き品で、寒地でも結實するといふ話である、漳蘭は大同小異、七八月に花咲くコランは建蘭に優る香ひがあるが、初冬紀州幷びに西國暖地に花咲く草蘭は建蘭に比して微てある、山野に多く自生して衆人の熟知する春蘭一種ホクロは惜むべし香氣殆んど絕無てあるが、反之流石に唐土本場より輸入せる玉鋨蘭も素心蘭も光澤ある深綠色の葉に幹莖靑く花潔白にして芬香蘭中の魁と稱すべく、共に秋季に花がある。

蘭の性質上若しくは配布區域上、机上のもの室内のもの庭園のものたるに止まりて山野自然のものになり兼ねても、境遇に適應して如何なる詩觀も構成し得るから、蘭とまで訛つて自己藥籠中のものとせんと試みたる和歌の發心は健氣てあつたが、聲調が古人の耳に驚はないで中止して仕舞つたらしい、俳句の方では季

を秋に定めて隨分歌つて居るが十中九分九厘まで蘭の香をのみ引立てゝ其他には及むで居ない、此科の多數のものゝ特徵になる蟲の恰好をしたる花形を婦女小兒は愛でやうが大人は嫌いだと悟り顏の人もあつたであらう、蓼太は蜂にして仕舞つた、英吉利に蜂蘭 Ophrys apiferaがあるから一層可笑しい、

蜂になれ折る人あらば蘭の花　蓼太

下の二句は支那を脫却し得られないと露骨に自白して居る、

詩を作る妾持ちけり蘭の花　周竹
蘭の香や佛にもあらず神にもあらず　鶯笠

嗅覺を視覺で言はせるなら、蘭の香は薄月夜に相應すると感じた、

蘭の香や物に譬はゞ薄月夜　乳峰

擧げ來れる句の外に名家の句々を讀み來り讀み去つて、つまらぬ句、分らぬ句と感じても成程と言ひ當てられたやうな經驗が現はれない、

夜の蘭香に隱れてや花白し　蕪村
蘭の夕狐のくれし奇楠を炷かん　同
蘭の香に老も若きも寐覺哉　白雄
まさ〳〵と蘭に古人の匂哉　士朗
蘭の香や蝶の翅に薫す　桃青
痩せたるを悲しむ蘭の莟み皃　太祇
もるゝ香や蘭も覆ひの紙一重　同
蘭の香や衰へそむる日のうつり　青蘿
栗に飽いて蘭につく鼠捕へ皃　召波
蘭を愛す賓主の座未だ定まらず　几董

援兵や伏兵が續々出て來て自分の過言を抹殺する時期があつて欲しい、それとも蘭蕙始芳の四字は花戸の日記に限られて、詩界が鈴蘭の占有に歸する大勢を奈何ともすることが出來ないのかしら。（完）



深く警しめざる可からず

『時事新報』

近來米國の新聞紙などに日米兩國の間に戰爭の免かる可からざるを云々するものあるが如き殊更に矯越の言を成し目下國內一部の地方に流行しつゝある排日熱を煽揚せんとするの目的に出づるものにして論者の意味の存する所は自ら明なりと雖も此種の說は實に排日熱の盛なる米國の地方のみに止まらずして他の外國の方面よりも往々にして聞ゆることなきに非ず畢竟我國の眞相を知らざる外國人の中には日本人を以て戰爭好きの國民なりと認め世界の大國たる露西亞さへも破りたる其國民がますます勢に乘ずるときは如何なる事を仕出すやも圖る可からずとの恐怖心を懷くものあればこそ斯る說も自ら世に現はるゝ次第なれ固より無稽の妄說にして我國民に於ては意に介するに足らざるが如くなれども國際の關係は甚だ微妙にして是種の感情も亦大に影響する所なきに非ざれば今日の日本國民たるものは國の地位の高まりたると共に其地位は萬目環視の焦點に中りて一擧一動の容易ならざるを心に記し其注意を周密にし其言動を愼重にして成る可く他の嫉妬を避るの心掛なかる可からず固より一國の權利を主張し又その體面を維持するの必要ある場合に際しては正々堂々毫も遠慮する所ある可からずと雖も恰も大國の大を鼻に掛けて人に驕らんとするの言動を演するは彼の成上り者が人に嫉まるゝと一般、事に益なきのみかます〳〵他の感情を害して微妙の邊に案外の影響あるを思はざる可からず或は外國人の感情を憚かりて左視右顧、萬事控目にしたるは往日の事のみ今日の日本には他の感情を云々するの必要ある可からずなど思ふものもあらんかなれども試に歐洲列國の有樣を見よ堂々たる强國互に肩を比して互に相下らずと雖も他國の感情を顧慮するの一點に至りては殆ど神經過敏とも評す可きものあり一新聞紙の記事一士人の言論と雖も苟くも他の感情を害す可きものは之を輕々に看過せず時としては政府自ら說明の勞を吝しまざるが如き畢竟その交際上に不利の影響を受くるを掛念すればなり外國の感情を云々して自ら愼しむは毫も强國の面目を損せざるのみか國の地位ます〳〵高まりて國際の關係ますます復雜なるに隨ひます〳〵他の感情を顧慮するの要あるを見る可し此程米國にて刊行する日本字の新聞紙が大統領ルーズウエルト氏に對して狂暴の言を爲したりとの報あり苟も日本人にして斯る言を爲すものある可しとは如何にしても信ずるを得ず假に之ありとするも固より一狂人の言

に過ぎざるは明にして狂人の暴言は如何ともす可からずたゞ我國人中に斯くの如き狂人を出し苟めにも他國の主權者殊に我國に對して最も同情に富める米國大統領に不敬を加へたる事實あらんには我輩は深く之を悲しまざるを得ずとして日本國民たるものは我國の地位が今や正に萬目環視の中に立ちたるを自覺し其一擧一動をも慎しみ外國人の感情を害するが如き言動は斷じて之を避け對外の一事に就ては國民銘々に外務大臣たるの心掛を以て事に當らざる可からず。（抜萃）

在野政治家と言論

『東京朝日新聞』

在野政治家の言論主張の振はざるや久し。啻に振はざるのみならず、互ひに自ら其口を緘して以て計ごとを得たりとするもの有り。進歩黨改革派が大隈伯の退隱を希望したるも、伯が餘りに早く長廣舌を揮ふを厭ふがためとも傳へらる。多分は虚言なる可しと思へど、政治界の實情を察するに、選擧競爭の始めより政權爭奪の終りに至るまで、祕密運動が役に立つ場合のみ多くして、言論主張の有効なる場合少きは、政黨政治家の自ら實驗し來れる所。此實驗よりして、彼等は言論主張を重んぜざるのみならず、却つて其言責を厄介とするに至れる氣味もあり。大隈伯に對する注文も、此邊よりして如何にも殺し兼まじくも思はる。殊に大隈伯は一たび其政黨を以てして（聯合體とはいひながら）、内閣を取り得たるに拘らず、槿花と一朝の榮を競へるのみにて、直に罷め去り、却つて爲に政黨の勢力の能く爲す無き實證を與へ、益言論に長じて實行に短なるを表示したれば、其反動としても多少の注文を迸出せざる可からず。故に吾人も或る意味にては進歩黨の注文を一應尤もとせざるにあられど、軍人出身以外、官僚出身以外、殊に藩閥出身以外、今の政黨政治家が身を立て事を爲すの道としては、矢張り言論主張に倚るを以て當然とせざる可からず。いつも其旗色を曖昧にし置きて、都合次第に其行動を左右するの餘地を存するは、畢竟オッポルチュニストの事、立憲治下の政治家の當に履むべき所にあらず。國民の先覺たるべき政治家は、國民が未だ疑惑の間に在るの時、速に其方向を指示せざるべからず、是彼等の義務たるは勿論、窮極する所、亦其利益なり。蓋し憲法治下の政黨は、國民と政治を共にせざる可からず。然るに國民の輿論は、卒然起るものにあらず。もと人民の願望感情なりと雖も、一般人民は案外無識因循なるを以て、之れを提起誘發するは少數有力者、特に往々一二識者先唱の力に須たざる能はず。且人民の願望感情も痛切なる其實感より起るよりも寧ろ想像上の逼迫より生ずること多し。而して人民が想像上逼迫を感ずるに至るは、有力者の說述に支配せらるゝ結果にして、然も其說述は之に眞理の多量を含むよりも寧ろ屢之を繰返して聽者の思想上に習慣を生ぜしむるとき、却て其効多しとす。夫れ然り。去れば有力なる政治家は其言論說述を以て人民を其欲する所に誘ひ入れ得べきの便宜を有す彼等は輿論を指導すると云はんより、寧ろ或點に於ては之を種育するの

力を有するなり。故に政治家の言論は其事業の半なり、少くとも其端緒なり。然るに我國の政黨政治家は殆ど啞の集合なり。國民は何物をも彼等より聞くを得べからず彼等は國論とは別範圍の天地に居る。斯の如くして國民の歸信を得んことは難し。

東西の異同

釋宗演

西と東と今と昔と、其風俗なり習慣なり其他社會百般の事柄に於ては、地球上如何なる所にも、人類の生活する限りの所に於ては、夫が絶對的に同一と云ふ事も無ければ又絶對的に異つて居ると云ふこともありません竟まり之は時と所とに依つて多少比較的の異同があると云ふもので、斯んな事に就いては我國丈けに就いて見るも明かなことであります、喩へば西洋人と東洋人とは違ふ、然し其違ふ所は唯だ腰より下の部分であつて其外には大した變はりは無い樣である、即ち西洋人は槪して長脚で有つて日本人よりは一般に背が高いが、胴の方に至つては殆んど同一である、夫れから今一つ人種の價値を決める重要な條件たる頭腦は何うかと云ふに、夫れは殆んど酷似して居ると云ふても好い位いで彼此の間に殆んど徑庭は無い、這んな工合で西洋人と東洋人とは比較的に不用な四肢に於ては異つて居るが、其他は先づ同一と云ふても宜敷い、夫れであるから矢勝に西洋人は東洋人よりもエライと云ふことは不條理な話で、日本人の如きは實際に於ても、彼れ等西洋人よりも數多上位にあることを事實に於て證明して居る、日露戰爭の狀態は即ち夫れであつた、又留學生などの事に就いて見ましても、日本の留學生は彼地にありて學校に在る間は、決して彼等の前に遲れを取らない、然るに歸朝した曉になると存外發明とか云ふ樣な、學術上に資する所は彼れに比して甚だ尠ない、之れは事實であります、が然し之れに就いては色々な原因もあるであらう、結り日本は未だ國が若い從つて飯を食ふことに忙はしい餘地が無い錢が無い、學者を學者として遊ばして置くことが出來ない、と云ふ樣なことは大きな原因である樣です、先づ這んな工合で人種とか人間とか云ふ上に就ては多少の異いがあると共に大體に就いては同一と云ふことが出來る、

今一つ非常に痛切に感じたことは時間と云ふ點である、米國なぞでは路上で丁稚に逢ふて「何時ですか」と云ふ問ひ突如とし受けたことは度々である、此の丁稚や小僧等は何も差程に責任の有る者ではない、然し乍ら彼等が此の時間に對する觀念は實に非常な者で殆んど傳聞や想像の外であります、而して此の時間を重んじ時間を敬すると云ふことは、やがて文明と未開、利益と不利益、賢と不肖との別れ目である樣に思はれる、時は黄金なりと云ふ諺は歐米へ行つて始めて之れが日常彝倫の間に而も匹夫匹婦の間に實行されつゝあるを見ることが出來る、先日も東北を巡敎致しました際などに、秋田時間、靑森時間と云ふ樣な一種の時間の爲めに、僅か一席の話を致すのみに遂には一日を毀すと云ふ樣な顯栂

て大に閉口しましたが、日本に於てはまだ普通紳士と云はるゝ人々に於て此の時の觀念が甚だ乏しいのは實に遺憾至極なことて、此の觀念の有ると無いとは、一個人の事業の上に就いては勿論、惹いては一國の發展上に非常な大影響の有ることと思はれるが、此點は實に西洋と東洋との最も著しい差異點の一として擧げることが出來ると思ふ、

夫れから今一つ大に異つて居るのは審美感である、即美に對する鑑賞點の差異である、私は米國に居ました間、ミセス、ラッセルと云ふ人の家に居ました實に太平洋に面した非常に風景の好い所て、月夜などには何んとも云へぬ風情のある宅でありまして、或る明月の夜のこと私共は觀月の宴を催ふしました事があろ、所が吾々てあつて見ると皓々たる明月に對しては、我心似秋月とか又天上の月は一輪であるが之れを視る者は萬國皆一樣であるとか、故國の友は此月夜如何なる感想を抱いて見るやらん、一言にして云へば吾々の見方は情的又は詩的である、然るに彼地の人は大に異なつて居る、彼等に月見と云へば望遠鏡を携へて之れを見るのである、そして彼處は火山に似て居るとか玆は植物に似て居るとか云ふので、吾々の風流的、文學的なるに比して非常に物質的である、之れ等も其趣味性に於て異なると云へば、餘程異なり居るものと思はれる。（抜萃）

普通選擧の理論

法學士　林田龜太郎

余も普通選擧論者の一人である、併し世間一般のとは聊か論據を異にして居る、

余は全國皆兵主義を實行し、兵役義務を負擔したるものでなければ、公權を與へないと云ふ考を持つて居る、選擧權は公權中の最大最要のものであるから勿論のことである、

從來の普通選擧論者は、丁年以上の者には悉く選擧權を賦與すべきとな主張するのが多いが、余は之を兵役義務を負擔した者に制限するの適當なるを認むるのである、何故ならば血税こそ國家存立の根本的要素であつて、凡て國家と名くべきものは血税に依りて出顯し而して奈何に文明に進みても、尙血税を以て之を支持せざるはないからである、

勿論血税を强制せざるの邦なきにしもあらざれども、是は變態であつて、或る事情の下に國家の形態をなしたるか、否らざれば血税を納むる者の中に於て、志願者を常置するの制度を執るのみ、彼の血税を全廢して雇兵となしたるもので滅亡せざる例は古今決してあることとなしてある、

之に反して現今選擧人の資格を定むる、多くは金税を以てすることが流行するが（我邦も其流行に洩れず）抑々此金税なるものは其富貧の程度に依りて國家に捧ぐる法定の冥加金に過ぎない、故に血税は其國民に

限り負擔すべき名譽ある義務なれども、金税は其邦國に住居するもの、強制的義務であつて、其國民でなくとも負擔するの義務を有するものである、

現今の制度は此重大なる義務（血税）を負擔したるものには選擧權を與へずして、却て比較的輕少なる義務（金税）を負擔したる者には選擧權を與ふると云ふので、實に事理顚倒と云はなければならない、

それて余は帝國の臣民にして血税を納めたるものでなければ、選擧權を與ふべからず、血税を納むることの出來ないものは迚も此貴重なる公權を與ふる資格はないと云ふのである、（投華）

國樂を如何にすべきか

（趣味）　金子筑水

西洋樂の特長數多き中にも、其の全體の組織の大仕掛にして其の奏樂の壯大なるは、著しく日本樂の小仕掛なると趣を異にして居る。而して此の特長中最も著きは、聲樂にては合唱、器樂にてはシムフォニーであらう。合唱とシムフォニーとは、或意味に於て、西洋樂の最大特長といはんも差支なからう。日本樂には殆ど此の式の音樂は無いのである。西洋に於ては、既に中世紀の昔から合唱は行はれた、羅馬教會の宗教的音樂のうちに、今日の合唱の基が据ゑられたと聞いて居る。我が謠曲なども、一種の合唱には相違なけれど、嚴密に謂ふ合唱ではない、又多人數同時に歌ふ俗曲とても、西洋風の合唱とは性質を異にして居る。西洋樂の合唱は、日本樂の合唱の如く、同一音調を揃へて歌ふにあらず、ソプランあり、アルトあり、テノアあり、バスあり、それ〴〵高低を異にせる衆音が調和して、所謂ハーモニーを成せるものなるは皆人の知る所である。而して日本樂の合唱は、普通の場合に於ては、多くとも十人を出でざれど、西洋に於ては、合唱者の數に限りがない、就中近代發達せる大仕掛な合唱に至つては、到底我が國に於ては見るべからざる多人數の會合より成るのである。

若し夫れ近代發達せるシムフォニーに至りては、げに西洋樂の最高發達の形式とも見らるべきであらうハイデュン、モツァートを經て、ベートーフェンのノインテ、シムフォニーに極まれる器樂の此の大組織は、眞に古今無比の奏樂の方式と稱へらるべきであらう。我が國にも合奏といふもの無きにはあらねど、大體樂器は様々ながら孰れも同一音調の集合に過ぎず、西洋の管絃樂の如く、音色と高低とを異にせる衆音が妙に調和してハーモニーを成せるとは、甚しく趣を異にして居る。西洋近代のシムフォニーの意義に就いては玆に言はず、兎も角も西洋樂は、斯くの如き階段まで進歩し來たれるに、我が國に於ては、未だハーモニーを有せる聲樂も器樂も無きは何故ぞ。音樂の根底の性質異なるが故に、日本樂にはハーモニーを許すべからずと解すべきか。我等は斯かる解釋に大なる疑なきを得ない。

西洋樂の合唱もシムフォニーも、共に大ハーモニーを成せる音樂であ

る。暫くシムフォニーに就いて、其の特別な意義を探つて見やう。無數の様々なる衆音が唯一に調和して、限りなき複雜さの中に微妙なる統一を示せるがシムフォニーの特質であらう。斯かる大ハーモニーの音樂と、殆ど全くハーモニーを缺ける唯のメロヂーの音樂と、孰れが進歩せるものにして、孰れが藝術の理想に近きものなるかは、くだ／＼しく論說するまでもない。無數の差別相の裡に、おのづから平等の姿の宿れるが、宇宙の實相である、異なる部分が互に親密に聯關して、而して全體の上に統一を成せるが有機的組織の特質である、個性を個性として、自由に其の特長を發揮せしめて而も衆個性の團體の上に、おのづから調和の大精神の宿るが、發達せる社會組織の實相である。和して同ぜず、無數の差別音の裡に、平等の諧和の妙音響くがシムフォニーの特長であらう、ハーモニーなきたゞの合奏は、個性又は差別相の未だ充分に發達せざる、謂はゞ尙プリミチーヴな音樂にして、未だ宇宙人生の實相を標象せるものとは言ひがたい。西洋樂が與ふる眞の感銘を充分に味ふ能はざる我等も音樂的天才の手に成れる大シムフォニーを聞いてはさながら造化の秘密に參したかの如き感に打たれざるを得ない。千差萬別無量無限の形なき精靈が、神秘の世界に於て、妙に相抱擁せるかと見るまに、忽ち離れてはまた更に相合し、深奥幽邃の境まのあたり無限の大精靈に接するが如き感に得堪へざるは、これシムフォニーが與ふる一種特有な感銘ではないか。西人がシムフォニーを激讃して、宇宙的生命の權化と謂へるは、決して無意義な讃辭ではない。而して斯くの如き感銘は、實に大ハーモニーの本質に基けるものではないか。ハーモニーなき音樂は、所謂プリミチーヴな音樂たるを免れないのである。

我が日本樂には、多少のハーモニーの影が無いではないが、全體より言へば、先づハーモニー式は無いと見て差支ない。此の點こそ我が音樂者の、須べからく研讃討究すべき大問題の一つであらう。我等門外漢の注問を言へば、我が將來の國樂は、必ずハーモニー式のものでなければならぬ、若し然らずんば日本樂は、永くプリミチーヴな階段に停滯することゝなるであらう。されど玆に一つの疑問がある。我等は專門の音樂者が、屢々下の如く言ふのを聞いた。日本式のメロヂーにハーモニーを加ふれば、餘りに西洋式に成り過ぎて、殆ど日本樂の旋律を破るに至るべし、事實、之れを器樂の上に試むるに、此の言の誤らざるを知ると。斯かる問題に至りては、我等門外漢は、是非の答辯に惑はざるを得ない。日本式のメロヂーなりとて、其れがハーモニーに消されぬさきにハーモニーが附かぬものにや、眞の音樂者の手腕を以てしても、なほ其れが不可能な事にや。日本式のメロヂーが西洋式に成り過ぎるといふは、一つには西洋風なハーモニーを附ける事にも因るべく一つには西洋の樂器を用ふる事にも因るべく、又一つには日本式の曲をハーモニー式に聞き馴れざるにも因るべし。論じて玆に至れば、我等は今の音樂者、並びに將來の音樂者にむかつて、つぎ／＼に起こる大疑問の解決を望まざるを得ない。日本音樂は果たしてハーモニー式に進み得ざるものなりや。音樂は最も能く國俗の特質を示すべきものなれば、將來の國樂は、假令著く

西洋樂の趣味を帶び來たるものとするも、倘其の根底には國俗の特長が無ければならぬ。斯かる意味に於ける國樂は、果たしてハーモニー式に進み得ざるものにや。斯くの如きは、現在の音樂界の程度より推せば、倘前途遼遠な問題であらう。されど問題は問題として、宜しく今より眞面目に研究すべきものではあるまいか。無論樂器の問題も、此の疑問の中に含まれて居る。將來の國樂の主要なる樂器は、現在の日本並びに西洋の樂器中より選まるべきか。將た新に發明せらるべき樂器に俟たざるべからざるか。斯かる疑問は、今の專門音樂者には、餘りに空漠に失せる疑問とも聞こゆるであらう。されど此等は何時かは解決を要する疑問にはあらざるか。我等は諸家が、斯かる疑問に對して、盛に平生の所見を公けにせん事を望まざるを得ない。(拔萃)

地球以外に生物なきか

『早稻田學報』 理學博士 横山又次郎

月には生物の居ないことは確である、それは望遠鏡で見て、見えないからと云ふ譯ではない、如何に月は吾れに近い世界であつても、今の望遠鏡には、小さな生物までも、見得るような、廓大力の强いものはない、それなら、何から生物の居ないことを知つたかと云ふに、それは此の月には、水と空氣とがない證據があるからである。假しあつたとしても、其の量甚だ少なく、又水の如きは、多分氷の形をなして居りはしないかと云ふのである、又其の自轉速力が、甚だ遲い爲に、寒温の差が、極めて大である筈である、我が地球は、二十四時間で、一回轉するのであるから、何れの方側も十二時間を經れば、必ず太陽に向ふようになる、それで夜の側の冷却も、極端に至らざる內に、再び日光に温めらることになる、然るに月の自轉は、丁度一ヶ月間掛るのである、其の結果、月は絕えず、同一の方側を、太陽に向くるようになる、それで、半面は常晝で、半面は常夜である、常晝の半面は、間斷なく、日光を受くるのであるから、地盤は熱して、其の暑氣は、原形質の生物には、とても耐へ難いものと思はるのである、之に反して、常夜の半面にては、地盤は非常に冷えて、又絕えて又生物の存在を許さないと、思はるのである。

・然らば、他の遊星には、如何と云ふに、ざつと左の如きものである、水星と火星とには水と空氣とは稍多量にあるかも知れぬか、水星は、餘り太陽に近い爲に、暑氣は非常なものと思はる、又地球より遙に小さな爲に、引力は餘程微弱でなくてはならぬ、火星は、地球より大分小で、太陽からの距離は、地球よりも少し遠いが、兎に角、吾が世界の隣の世界である、此の世界には、早くから天文學者が、生物存在の望を置いて居るものである、望遠鏡で、之を眺むれば、其の面に薄黑い所がある、此の部分は海と見做されて、他の部分は陸と見做されて居るのである、さうすると、海は陸より狹く、地球と正反對になるのである、然し茲に一つ疑問であるのは、海である、陸であると、口では言ふものゝ果して、さうであるや否やの事である、一說に、火星面の空氣は、甚

球のものより稀薄である爲に、其の表面に於ける氣壓は、吾が地球のヒマラヤ山の最高峰上に於けるよりも、一層低からうとのことである、若しさうであれば。地面より立昇る水蒸氣を、天外に飛び出さないようにして置くことが、不可能のことになる。隨つて此の星の南北兩極に、白く見えて、是迄氷の塊と見做されたものも、其の實、氷の塊ではなく、固體炭酸ではなからうかと云ふのである。

金星も、吾が世界から見れば、火星より稍近い、隣の世界で、今日までの研究によると、先水と空氣とは、充分に存在するようであるが、然し最近の調査によると。月と同樣常に同一の方面を、太陽に向けて居るとの事である、さうすると、太陽に向いて居る常晝の半面では、氣溫が高過ぎて、原形質の生活を許さず、太陽に背いて居る常夜の半面では、氣溫が低過ぎて、水は恐か、空氣までも、凍結して居りはせまいかとの心配がある。

五百有餘の小遊星と稱ふるものに至つては、光熱共に、地球より少なく、又引力弱き爲に、水と空氣とは、星面外に飛び去つて、今は、全く之を有せざるならんとの說である。

木星は、全部瓦斯から成り立つて居るようである、其の譯は、星體は、常に全く濃霧の如きものに包まれて居て、且幾分か、自光を發するようであるからである、又太陽からの距離が遠い爲に、此の天體から、受くる光と熱とは、吾が世界が受くる分量の、僅に二十七分の一にしか當らないのである。

土星は、木星より、一層疎質の世界である故に、全く瓦斯のみから出來て居るものらしい、熱と光とは、吾れの九十分の一しかないのである。

天王、海王の二星は、前の二星と同じて、全く瓦斯の球に過ぎないのである、熱と光とは、吾れの九百分の一にも當らないのであるから、自家の發する熱がないものとすれば、其の表面は、極めて寒い所であらうと思はるゝのである。

以上で、太陽系だけは、吟味が終つた譯であるが、是によると、此の系には一世界として、吾が世界に見るが如き條件を、悉く備へて居るものはないと言はねばならぬ、又今後に至るも、永久に之を備ふるような有樣に立ち到ることはなからうと思はるゝのである、何故なれば、木星以外の世に至つては、其の冷却すること、終には地球の如くなるとするも、彼等は非常に彪大にして、其の面に於ける引力は、非常に強いのであるのみならず、太陽から受くる光熱は、其の力微弱にして、其の面に浮游する雰圍を、飛散消滅せしむるに不充分であると思はるゝからである。

右の如き次第であるから、吾が太陽系に於いては、吾々が稱して生物となすもの丶生活に、必要の條件箇條は、地球を措いて、他に之を完全に備へて居る世界はないと、斷言しなければならぬ、換言すれば、若し生活なるものは、必ず酸、水、炭、窒、の四元素より成る原形質に宿るもので、他の物質には、宿ることの出來ないものとすれば、地球以外の遊星には、生物を蕃する望なしと言ふの外ないのである。(抜萃)

(中挾ノ一)

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

早稻田大學講師
廣池千九郎著

日本文法 てにをはの研究

總洋布製頗美本◉紙數三百二十餘頁
正價金壹圓◉郵稅金拾錢

日本文法に於て重要なる位置を占むる所のテニヲハは古代文法の遺制にして今日語學教授の任に當るもの一として其不便を感ぜざるなし然るに著者夙に支那文典研究の立脚地より此テニヲハに對つて非常の研究を重ね支那の語法は勿論日本語と同系統に屬する所の朝鮮語の文法に比較して更に之を歐洲語の文法に徴し研鑽數年遂にテニヲハの名稱を廢して悉く之を八品詞の中に編入することを得たり其學問上の成功は比較文典の鼻祖ボツプに亞ぎ語學教育上の功績は更に名狀すべからず曩に本書の一部分を本出版部にて公にするや之を見るもの皆許して日本文法史上に一新時期を畫せるものと云へり國語問題の勃興せる今日學者の一讀を要すべきや多言を要せず

發行所 東京牛込早稻田 早稻田大學出版部
（發賣所 東京日本橋區本町 博文館）

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

東京春陽堂新刊

第壹卷
木版密畫挿入
洋裝菊版美本

近松世話淨瑠璃詳解

高野斑山氏著

貴族文學の粹たる源氏物語に湖月抄ありて平民文學の花たる近松の淨瑠璃に此種の著述あるなし、著者此缺を補はんと欲して先づ其世話物に着手し、博引傍證數年を費して漸く稿を脱したるもの近松世話淨瑠璃の詳解たると同時にまた未曾有の元祿文學辭典也

春陽堂發行

定價金八十五錢　郵稅金八錢

高野斑山氏著

淨瑠璃史

實價金壹圓　郵稅十二錢



針の綻

素人

或る朝のこと空はドンヨリ曇つて昨日からの雨に往來は泥濘て居る。唯てさへ心持の悪い天氣だ。辯護士プラーゲルは窓に立て掛けた鏡に對つて黒の襟飾を結び着け樣として居る。兩端を握つて右へ左へ引張つて見るが例の通り巧く結び目が出來上らない。折々鏡の横から外を睨み附ける面相と云つたら、凄い顔で、下唇を前へ突き出し、額には深い皺を刻んで、兩の眉を一所になれと計り引き寄せて居る鹽梅、丸て首縊りの稽古でもして居る樣だ。が頓て此難關を通り抜けて辯護士先生口を尖がらせ、溜息吐く〳〵鏡を見ると美事に飾り結びが出來上つた。今此人の居る部屋は廣々として天井も高く、家具の工合から見ると中々物持てあるらしい。其寝室てあることは一方の隅にある寝臺が證明して居る。所が左の隅にも今一ッ寝臺があつて其持主が今少し前に出て行つたらしい。シテ見ると辯護士先生奥樣の持合せもあると見える。果せる哉二番目の寢臺の前には牀の上に婦人の衣類が算を亂して散らばつてる。恩も怨もない夫人のことを何もさう明白に素破抜には及ばないが、事實は飽くまで事實として傳へざるを得ない

辯護士夫人は事實相違なく存在して居るので、隣室から小さな用を訴へる子供の大きな聲に應じて夫人の高笑が聞える。其間に辯護士の身仕舞は荒増片が附いて、髮刷子を使へばこれで宜しいと云ふ段取まで進んだ。所が肝腎な刷子が見當らない。鏡臺にもない、化粧臺の上にもない。部屋中探して廻つたが矢張り見附からない。やつとの思ひで夫人の下袴の下から搜り出して見ると驚いた、髮刷子は靴刷子の代りに使はれたのだ。又もピク／＼と眉間に波を打たせたが、思ひ返して丁寧に刷子を清め、大分薄くなり掛つた髮を手際よく梳き別けて、空地の目立たぬ樣に仕つらへ、鏡を下ろして窓の扉を左右に押し開け、一寸往來を見下ろしてから、さて隣室へと朝飯に出掛ける。かの神聖を汚された刷子は此時も腋の下へ挾んで持て行くことを忘れなかつた。部屋を出て行くには婦人用の靴やら靴下やら、其他種々雜多の品を跨ぎ越すのであつたが、これも胸のムシャクシャを紛らす効能は無かつたらしい。

實の所辯護士先生今暫らく寢室の窓から外を眺めて居た方が宜かつたのだ。と云ふ譯は家内中打ち揃つて朝の珈琲を飲む隣室は今以て混沌たる有樣である。迚も打ち寛ろいで食卓に就く樂みを助ける譯には行かぬ。大きな圓卓の上には茶碗、珈琲さし、コップ麵麭、匙等が手當り放題投げ出した樣に載て居て、おまけに卓子の片一方に押し寄せられて堅く小さくなつてると、一方には座蒲團形の枕が二ッ並んで其上には五ッになる男の兒と六ッになる女の子が寢間衣の儘で座てる。辯護士夫人が女の子の片脚へ靴下を佩かせ樣と盡力して居ると、今一人中婆さんが片々の足へ靴を着けて紐を結ばうとして居る。昨夜脫ぐ時紐が千切れたので今それを繫ぐやら大騷ぎだ。男の兒の方は女中の掛りと見えて大きな海綿で顏の

始末に取り掛つてる。中々腕白で喚きながら四方八方へ首を振るから海綿からも顔からも雫が飛び散つて、珈琲へも、牛乳へも、麵麭へも迸ね掛る。いや中々世話の焼ける坊ちやんである。

辯護士は食間へ這入て此有樣を一目見ると驚いて立止まつた。大きな咳拂ひをして、肩をピクリと聳かしながら

「食卓の上で子供に衣物を着せることは成らんと何遍も云てあるぢやないか。寢間で幾らも出來る事だに、バタやパンの傍で石鹼や汚ない水を迸ねかしてむさくて堪るものか」

夫人は見向きもせずに

「そんなむさい事は滅多にも致した覺が御座いません。それに何もかも仰やる通り行くものですか。今日は寢間の拭き掃除を爲るのでバベッテ(女中の名)が片附けて居たのです」

「そんな事は前に濟まして置くが宜い私は唯食間は着換の場所ぢやないと云て置くのだ」

妻君は少し激した調子で

「食間では決して致しせません」

「決してせぬ？」

と辯護士は不思議な笑顏で問ひ返す

「決して！」

と細君の答は斷乎たるものだ。すると中老女はまだ靴の紐を結んで居たが

「食間では決して子供に着換させませせん」

と加勢する。　辯護士はジット辛抱しながら天を仰ひて獨言の樣に呟いた

「我が此眼玉で慥に睨んだ事が跡形も無いのだ相だ」

「よしんば有つたにもせよ、　現在我子の事ぢやないか、　むさいの何のと云はれた義理ですか」

姑は中々萎縮まない。　細君も爰ぞと

「それあねお母さん餘り子供が可愛くないと爲る事爲す事むさく見えますのさ」

「併し我は自分の子供がむさいと云た覺はない」

と辯護士は峻しい目附きで髮刷子を懷劍の樣に構へながら云ふ

「云ひはしないが考へたのさ」

と云ふなり姑は衝と身を起して女の子に近寄り、　聞えよがしの接吻を一ッ與へて

「可哀相にお父樣はお前達が嫌ひだとよ、　其代り私達が可愛がつて上げるからね」

辯護士は再び天を仰いて沙上の魚の樣に息を吐き始めた。　其處で髮刷子を靑眼に構へてお手の物の手厳しい告發の文句を案ずる樣子と見えたが又思ひ返したと見えて存外優しく

「以來私の髮刷子を靴磨きに代用しない樣にして貰ひ度ものだ」

「髮刷子を靴磨に？」

ブラーゲル夫人はサモ驚いたと云ふ風て叫んだが、　此驚は慥かに拵へ物てある

「ババッテお前何か心當りがあつて？」

ババッテは目を吊り上げて首を左右に打ち振る。其樣子と云つたら髮刷子が頭髮を搔く外に使ひ道があるものだらうかと如何にも仰天したと云ふ風で罪のない殊勝な顏附だ。姑は肩をビクリとさせて娘（夫人）に對ひ

「エミリーもう宜いよ旦那は今朝亦御機嫌が惡いのだから」

斯う云て置いて母子は仰山に溜息しながら二人掛りて女の兒に着物を被せる。暫くして此仕事も滯りなく相濟んだが、ババッテの方は啼面坊子がどうあつても奇麗な半ズボンを穿くまいと拗ねるので中々埒が明かない

女中は賺しながら

「坊ちやま、これはあなたが大好のズボンですよ、ほらねお父樣の樣な隱袋が附てゝ此中へお錢でもお菓子でも入れられますよ、まあ宜いこと」

「坊は外のズボンが宜いやい」

「けれども一ッのは昨日濡れたまゝでそして隱袋も何もありませんのよ」

ババッテは頻に宥めて見たが果しが無いから小聲で

「ズボンを召すとお母樣が五錢の白銅を下さる相ですサア召しませ」

「厭だい、坊は厭だつてば」

辯護士の玉子は中々强情だ
辯護士は髮刷子の攻盤を物の見事に撥ね返され澁面作つて龜の子の樣に思ふさま縮こまつた。と云ふ譯は腮を襟飾に埋めて、肩を恐ろしく張り上げ、手を燕尾服の裾の下に潜ませたのである。所が兩方の裾の間から例の髮刷子がニヨキリと現はれて辯護士がムシャクシャ腹て行きつ戻りつすると刷子があちこち振れていきり立つた喧嘩犬の尻尾の如しだ
全體御機嫌斜めなる所へ以て來て妻と姑に遣り込められ、業が煮えて堪らない、途端に跡取りの倅が二度まで「坊は、厭だい」を甲走らせたから、辯護士は左の靴踵を中心としてグルリと向き直つた。スルト燕尾服の裾はバット左右に煽つて同時に今迄握り詰めて居た刷子を放したから此奴もけし飛んだ。
辯護士は自由になつた双の手を遊ばせては置かない。右の手てフリッツを宙に吊り上げ、左の手て尻端をシタヽカお見舞申しながら
「何に？厭だ？お前は厭なのか本當に厭か」
此お手柔かてない取扱を受けてフリッツの泣聲が猶々烈しくなつたと云てはフリッツに申譯がない。實際父親の權威が突然發揮せられた爲めに三方四方に鎮壓力を與へてフリッツは今啜泣するばかりてある。併し中々容易ならぬ啜り方て啜る度に首はしやくり上げられる。そしてダラ〱涙の流れる頰をバベッツテの方に向けて居るとバベッチは喫驚して無言て立つてる。其顏には父親が腕白息子の仕置をするのを怒つてる樣が有々讀まれる

女の子は卓子の後へ逃げ込んだが無論弟の肩を持つて金切聲を絞り上げて
「御母ちやん、お祖母ちやん、フリッツがお父ちやんに殺される」
父親は仕置を濟して息子を枕蒲團の上に卸した。姑は凄い目付て急いてフリッツを抱き上げ、頻りに頰摺りをしたり接吻したりする。妻は妻で
「私達は罪も咎もないのに復お定まりの人泣かせが始まつた」
と我鳴る。辯護士は怒氣心頭に發して居るから姑の目付も妻の叫聲も敢て念としない。今度も手を背中て組んだが例の刷子を持たずに部屋の中を荒々しく行たり來たりする。其目付きは恰も血を啜つてる獅子の樣て頗る劍呑だ。
今までフリッツは靜に泣いて居たが、母や祖母が宥める言葉で思出した樣にワッと吠え出したことは云ふまでもない。祖母さんはジロリと婿殿を一睨み睨んで
「外のズボンはお前穿かれはしない。あれは……あれは……」
と咄嗟に旨い理由が見當らないて居るとパペッテが如才なく
「中がスッカリ破けて居りますから」
と跋を合せる。フリッツはこれて漸く合點する。
辯護士は恐しい目付て嚇かして見たがどうして効目があるものか。一人が三人を相手だものを！然も男一人が女三人に刄向ふのだものを！彼は右手を胸に當てゝホット吐息を洩しながら隣室に退却して心を

鎮め樣とした。

其間に母と娘と女中の三人は子供の身仕度を濟まして汚れた水や海綿や枕蒲團を片附け、茶碗と珈琲注をそれ〴〵相當の場所に安置させてから、扨主人を珈琲の席へ呼んだものか如何かと云ふ相談が始まつた。祖母さんの說では主人丈一人先へ濟まさせた方が上策だ、さもないとまた直ぐ喧嘩が始まるからと云ふ

「そりやもう急度さうなるに違ない」と娘は溜息を吐きながら云ふ。女中は女中で「こんな旦那樣は私始めてヽムり升」と相槌を打つ。孫娘までが「お父ちやんは何時でも怒鳴つてばかり居る」と黃い嘴を挿む。矢張り主人を珈琲の席へ呼んだ方が宜からうと評議一決して、孫娘を使者に立て樣としたが中々應じない。此調子で行つたらヒヨツトすると主人はズット後に廻されて、冷めた珈琲を煖め返して進められる非運に陷つたかも知れぬ。所が折好く使者も受けず寢間から食間へ歸つて來た。寢間では再び窓から外を眺めて居たが、朝の凉しい空氣で額の熱も冷めたし、夫れに今日一日の中には、幾度も家へ歸つて來なければならぬのに其都度ブリブリした厭な顏を見るのも御難だといふ所に思當ると氣が折れて來て、去り氣ない顏で珈琲の席へ出ることが出來た。其落着き加減と云つたら、折さへあらばニッと微笑を洩すだらうと思はれる位天下太平の面相である。

所が不和の女神エリスの命は今朝飽くまでも此辯護士の家を目蒐けて居ると見えて、トロイ戰爭の時の樣に黃金の林檎こそ轉がさないが、何かかにか種子を蒔いて內輪喧嘩の火の手を上げさせ樣として居る。

珈琲は銘々の茶碗に波々と注がれて、祖母さんは戰勝者の顏を見たかと云はぬばかり、鼻高々と邊りを見廻して居る。細君は大分心が折合つたと見えて「昨晩はよくお寢られましたか」と尋ねる。此間は良人の神經を益々鎭めて「アー充分寢ました」と返事した上「お前は如何だつた」と聞き返した。こゝまでは萬事滯り無く進んでパンを千斷つて珈琲に漬けたり、珈琲を啜つたりして居る。娘のルイゼはお父樣に半分背中を向けてお祖母さんに感心されてると、フリッツは「お父ちやんに打たれた所はもう痛かないよ」と當擦りめいたことを云ふ。バベッチは彼方へ往たり、此方へ行たりしながら、辯護士の背後で驚いた振りや蔑すむ風をしてお祖母さんと暗號電信を交換して居る。が朝飯は格別の事もなく濟み相な景色である。

所が辯護士プラーゲルが殘少なの珈琲を匙て攪き廻し始めた。何遍か攪き廻して居る內に、何か腑に落ちぬと云ふ樣が顏に現はれる。これは確かに珈琲でも牛乳でも砂糖でもない或る物が匙に懸つたのだ。モウ一遍攪き廻して此或る物を巧く抄ひ上げて見ると栗色の塊だ其何物なるかは一寸見分けが附かぬ。プラーゲル夫人は胡散臭い目付て見遣りながら

「何かありましたか」

と尋ねる辯護士は

「何だか丸で緣のない物らしい。けれど斯ういふ事も有勝だらうから咎立をする譯ではない」

と飽くまで優しい。するとお祖母さんは中音て

「ソラ又何かお目に留つた」
「お母さん目に留る物なら留めたつて差支ないてしやう」
と一本極め込んで置いて今度は細君に
「何だかよく見なさい、それからバベッテによく言ひ附けて以來こんな事の無い樣に氣を附けさせなければいかん」
ブラーゲル夫人は匙に入れて差向けられた物を眺めて居たが、アハヤ證據物件を捲き上げてイサクサの種子を無くし樣とする。途端に姑は
「これ式の事に何もがみ／＼騒ぐには當らない、牛乳の上澄に珈琲が染み込んだのさ何が這入るものか」
「御母さん騒ぐとは誰が騒ぐのです」と辯護士は早中腹だ
「それはさうと慥かに牛乳でも珈琲でもないから、さう思つて貰ひませう」
「私はね此二ッの目より外何にも當にはしません」と老婦人は答へてそれから細君に對つて「エミリーや私の云ふ事が間違てるかどうかよく見てお呉れよ。屹度上澄と珈琲だから」と何處までも自説を通さうとする。ブラーゲル夫人は肩をビクリと聳かして「御母さんの方が本當らしい」と云ふと
「いや今度こそ御母さんの方が本當でない」と辯護士はキッパリ云て「論より證據、其胡亂な品を此コップの水に浮かせてお目に懸けやう」サア如何だと云はぬばかりの目付て兩婦人を見遣つた。若し此時
「マア宜いぢやありませんか全く見當違なものが飛込んで居たのです。これからはバベッテのにも氣を附

けさせますから今日の所は」とか何とか優しく穏に出たら辯護士は直ぐ證據調べを止めたてあらう。所が姑が「珈琲と上澄と高々パンの屑位のものさ」と繰り返して「何か喧嘩の種子が見附かれば嬉しいのだらう」とまて云ひ足したものだから、紛議の種子は水呑ゴップの中に漬かつた。引き上げて見ると海綿の屑だと分つた。どうしてこんな物がこんな所にあるかと云へば、其仔細は何でもない、フリッツが身體を洗ふ海綿を引チ切つて慰みに珈琲の罐子へ放り込んだのだ。

「さあ、上澄と珈琲か、それとも白パンか」と辯護士は勝誇つて詰め寄せる。「それてなくて何です」と姑は一寸見てから落着拂つて云ふ「エミリーよく御覽、矢ッ張牛乳の上澄と珈琲てすよ」と此ですよに殊更力を籠めて娘に目て催促するものだから仕方なく同意はしたもの丶聲音は御母樣程づう〳〵しくなかつた。

「これは餘り嚴しい」と辯護士は呼はりながら沸き立つ胸を無理やり押へて「お前達に云うて聞かさうこれは海綿だ」

夫人「併し海綿がどうしてテーブルの上へ來たてしやう」

主人「是は奇體なお尋だ、タッタ今茲て子供を海綿て洗てやつたぢやないか」

夫人「洗ひは致しません、着物を衣せた許りてす」

姑「さうとも、着物を被せた許りてすとも。私共だつて少しは物の作法も心得て居りますからハイまあさう思つて貰ひませう」

「バベッテ」と辯護士は呼掛けて「お前は此テーブルの上で坊を洗つて遣たらう」と怒鳴る。下女は祖母と目で信號を代はしてから「私ですか私は坊ちやまにお召をお被せ申したことゝ存じます。ネー坊ちやま昨日のズボンをお穿かせ申したのですね？」

「ウン」と子供は言たが直にわめき出す。又一騷動持ち上るのを恐れたからである

「これや言語同斷だ」と主人は眞赤になつて「子供を此卓子の上て洗たのは此己れが己の眼て現に見たのだそれをそてないと打ち消す。海綿は此手て此珈琲茶碗から抄ひ上げたのだ、それを白パンと珈琲だと無理往生に說き伏せ樣とする」

「珈琲の中に海綿が？」とバベッテは頓狂聲を張り揚げて「そんな事のある譯はムりません旦那樣其は餘り御無代てムります。今迄私の奉公先の御主人樣方は皆樣が私の事を奇麗好だと仰しやつて下さりました。それを私の入れた珈琲の中に海綿とは……」と以ての外だと云ふ權幕

「さうよ海綿たから海綿と云ふのだ」と辯護士の怒りは今や極點に達した「サア見ろ淸潔好もないものだ」と彼一物を下女の眼前に突附ける下女は忙がわしくお祖母さんに目で助大刀を求める

「それは牛乳と珈琲だよ」と姑は毫も動じない

「本當に左樣て御座います」とバベッテは大急ぎて調子を合せて「これはよくある事てムります。私も手前の珈琲茶碗の中で度々見受けました、ネー奥樣昨日もお目に懸けましたネー」

ブラーゲル夫人は輕く頷いて良人の方へ向くと良人は眼をギラ〳〵光らせ兩の拳を握り詰めて居る

「貴方モウ宜敷いぢや御座いまりせんか。本の些細な事で顔を赤め合ふにも及びますまい」

「イヤ旦那は喧嘩が仕度いのだよ」と姑は威猛高になる

辯護士は開き直つて

「御母さん私は喧嘩が仕度はありません。私は自分の家で馬鹿あしらひされたり、滿足な目を持ちながら盲目扱ひにされたくないのです。事柄は些細だが、何時も〳〵旋毛曲りの剛情を聞かされるのは些細な事ではありません。御母さん私が此珈琲茶碗で見附たのは海綿です、天地のあらん限り海綿と極つて居ます」

辯護士は非常に激して居たから斯う云ひながらも劇しく卓子を敲き立てたので、珈琲茶碗は喫驚して跳ね上り、銀の匙は蜻蛉返りを打ちてチャリンと牀の上へ落る。彼自身も飛上つた拍子に椅子を顛覆す、子供は啼き出すと云ふ騷ぎ、姑は姑で

「エミリーお前の家にはモウ居耐まらないから其積りでお出で」と女には珍しいシッカリした聲で邊りの騷ぎに負けない音を響かせる。辯護士は隙さず其言葉尻を押へて

「やつとのことで其處へお氣が附かれましたら、それこそ私の爲め此家の爲め萬歳です」

此事は恐らくまだ〳〵跡を引く所であつたらうが宜い鹽梅に此折入口の鈴が鳴つたのでバベッテは入口に飛出す。主人は一生懸命氣を取り直さうとあせりながら食間を出て應接の間と號する隣室に這入る。廊下では「先生に一寸お目に懸れますまいか」と低い太い聲が聞える。バベッテは此問を繰り返すべく

内へ這入る。所がバベッテは主人から飛でもない言懸りを受けて、痛く名譽を毀損せられたと思てるかして、足音荒く歩行いて居る主人の方には向かず、反對の側にある暖爐に對つて取次の言葉を演べ「書記さんがお出になりました」と佛頂面でぶつつく。

「書記なら通せ」と許り主人は權柄ヅクに云ひ竦めて右の手を服の下に納め、怒てると云ふよりも氣六ヶ敷い澁面の樣に見せ度いものだと顔の造作に苦心して居る。書記は音のしない樣に戸を開けて中に這入り又徐かに戸を閉めて恭しく一禮し、郵便局から取寄せた數通の手紙を渡す。辯護士が差出人の名前をズット見通す間に書記は「格別大切なこともなさ相です、事務上の用向丈けて私信は一もない樣です」

「其通り」と辯護士は手紙を返しながら「これは事務室の私の机の上へ載せて置て下さい。今直ぐ行つて見ますから」と云たが書記がいつもに似ず直ぐ出て行かないで此方を見て居るから「まだ何か用がありますか」と尋ねる

「なに太した事でもないですが先生から二三度見習が置き度い。餘り費用が掛らないで役に立ち相なのを雇ひ度い外て奉公して居た書記は好ましくないからと云ふお話がありましたな」

「左樣々々夫れは私も覺えてるが」と辯護士は悶かし相に「併し夫れが今如何したと云ふのかね」

「イヤ偶然一人見附かりましたから。まだ子供ですが手は奇麗に書きますし、親許は宜し、本人の忠實なと口の堅いことは私が保證致します」

書記が斯く注進する間辯護士は委細構はず部屋中をドシ〳〵散歩して居た。そして何を隱さう書記の話

には半分しか耳を假さなかつたので、彼の注意は隣の部屋で珈琲談を繰り返し〳〵様々に尾鰭を附けて囀つてる姑と妻の話に奪はれて居た。折々主人公の顔に穏な氣分にならう、優しい言葉で家庭の平和を回復し様と努めて居る様が見える。けれども拇指と食指の間に抑へてる紛議の種子をフト見ると頭はキツと高く昻り、歩調は速度を増し鼻息は著しく荒くなる

「先生今のお話は如何なものでせう」と書記は暫して尋ねる。親玉が斯く暴らかに走り廻るのは此事柄を熟考して居るものと見て取つたのである。途端に姑は聞えよがしの聲て

「あの人は何なりと云ふが宜いさ。又喧嘩が仕度は思ふ存分するが宜いさ。詰り喧嘩が仕たさの言懸りなのだからね。」が茶碗の中にあつたのは誰が何と云はふと珈琲と牛乳の上澄許りさ」

此言葉を聞くと辯護士はピタリと散歩を中止して勢込んで食間に這入り相に見えたが、直ぐ思ひ返して心を靜める呪でゝもあるか、右の手て額から顔中を撫て廻し、書記の前に寄つて、左の手て證據物件を目先に突き附け不思議に落着いた聲て

「此指の間にある品は何だか云て見て下さい」

書記は一目見ると

「海綿てす」

「でしやう海綿てしやう」

「全く海綿てす」

「事實相違なく綿海だ」

此言葉を聲を張り揚げて隣室の方へ首を向けて云うた

隣室では突然靜まり返つた。書記は此機會を利用して見習の問を繰返す。辯護士は書記の海綿と云ふ證言て胸が清々したので「其子を序の節事務室へ連れてお出なさい。一度見てからの事にしませう」

書記は恭しく一禮して音も立てず部屋を出て行く。辯護士は公明正大な裁判官が出て、自分の正理を充分に認めて吳れたし、其宣告は聲高に下されて、隣室の婦人連も必ず聞いたに相違ないと思はれるから、大分心が平和に傾いて來た。其處て食間へ歸つて和議締結の印に握手をさせて遣らうとした。其瞬間に執念深い姑は

「書記には海綿を見せたらうさ。併し何處から持て來た海綿だか神樣は御存知だらう。珈琲の中に海綿の無かつた事は私が此首を賭けて保證する」

辯護士は之を聞くと體が鯱張つて、折角起り掛けた優しい心持は春の雪が朝日に融ける樣に消え失せた。隣室の奴等を睨み付けて辟易させて遣らうと思ふでもなく、思はぬでもなく食間へ威張つて行て見たが妻も姑も二人共と云ふ中特に姑の方が鼻高々と口の周りに冷やかな蔑すむ風を浮べて居る。之を見ると思はず握り拳を固めたが「待てよ！これは頭から怒鳴り附けたものか、それとも初めは優しく出て段々憤怒の度を亢ぶらしたものだらうか何方にし樣？いや矢ッ張第二の方にし樣」と、斯う思ひ定めて口を開き例の縁義の惡い海綿の一條を云ひ切るが早いか、姑は極々眞面目に言葉を遮り、立ち上つて目を

半眼に開き、下唇を垂れ、首を左右に打棹りながら
「婿殿、今となつてはモー海綿か海綿てないかの論てはありませんぞ。事柄は誠に些細でどうてもよいのてす。私達はお前さんの短氣に慣れて居るから、どんな下らない事て疳癪玉が破裂し樣と構はない。どうて破裂しなけれやならないので、破裂する種子がなけれや出鱈目に難癖を附けるのがお前さんの十八番だもの」
斯う云ひながら姑は勝誇つた目付を娘に呉れて、婿に向ては手を劇しく振つて口を開かせない。そして猶語を進めて
「ハイ婿殿モー海綿なんどの些細な事柄てはありません」
此烈しく口を衝いて出る切尖に流石の辯護士タジ〳〵となつて細君を見遣ると、細君はもう觀念しましたと云ふ風に痛々しく
「本當に貴方あゝ云ふ事をなすつては困ります。そりや貴方の爲めには隨分辛いことも我慢しなければならず。氣紛れも立てゝ上げなくてはならぬと覺悟致して居ります。實際今迄御無理御尤で通した事はどの位だとお覺召す？」
「そりや數限りなくあるさ」と姑は加勢する
「けれどもあの樣な事は如何に何ても餘まりてす」
「一體それは何の事だ」と辯護士は煙に卷かれて尋ねながらも腹の中て何か惡い事を爲たことがあるか

と段々時間を繰つて考へて見たが妻の言葉に當て嵌まる樣な所行に思ひ當らない。姑は「此人はまだ空惚けてるよと」口の中。妻君は「こんな風では本當に生き甲斐がありません」と情ないやら悔しいやらと云ふ風で實なさ相に首を低れて手て支へる辯護士は兩手を擴げ、口を少し開けて眼を睜り、首を振つて天下の驚きを一身に集めたと云ふ有樣だ。少し立つて姑は

「婿殿！家内の事は家内限りでお互にどんな氣に障る事があつても世間には内々にして置くべきものです。一家の主たるものが子分とは云ふ條他人を自分と家族の中に据えて自分の落度を曝け出し「サー見ろ我は家の奴等と始終喧嘩して居るぞ」と云はないばかりに家内の恥を大びらに吹聽するとは如何云ふ了見てす。お前さんは隨分ひどい人とは思て居たが眞逆是程とは知らなかつた」

仕舞になる程段々口早に聲を高くして言はゞ婿に意見を擲き附けたかと思ふとクルリと振り向いて隣の部屋へ這入つて仕舞た。斯く名譽の退却をして跡の始末を娘に譲たのだ。娘は直ぐに話の緒を手繰つて良人が口を開く前に啜り泣をしながら

「貴方はなぜあんなことをして下すつた？母にしろ私にしろ、あんな目に逢はされる覺はありません。私はモー人樣に顔向けが出來ません。世間では定めし私に後指を指す事でせう貴方は女房子供を酷くするのが近所や召使に知れる許りぢやまだ足りないんてすね。足りないからこそ腹立まぎれの跡先見ずに、世間中に觸れ散らす樣な事を爲さるのてす。嗚呼々々私は何たるみじめな不仕合な身の上だらう」

細君はトウ〳〵泣き出して寢間へ驅け込むと待合はした樣に子供等はワット諸聲にわめき出す。姑は咳拂と態とらしい咳をして此合奏に相の手を入れる

辯護士がこんな目に逢ふのは今日始まつた譯でもないが自分と云ふものは實際此世間に向かない人間に生れ附いたのか知ら？さう云ふ譯なら此世を遁れ出る工夫を附けなければなるまい。それとも目の廻る程グル〳〵廻りをして行當りバッタリに戸へ首をメリ込ましたものか知らと途方に暮れる。暫らく思案して居たがこんな暴つぽい療治は見合せる事にして齒を喰縮り背中で手を組んで二三遍部屋の中をぶらつく。此方法は大分心を鎮める効能があつたが今一層氣を和げ樣と何度となく額を叩いて見たら餘程落着いて來た。ソコデ帽子を被つて外へ出掛け樣として玄關で下女のバベッテに出會ひ、姑の部屋の戸が細目に開いてるのも見たが、唱歌を口吟みながら出て行かれる程氣が和らいだ。

それで往來の人に別段物騷な顏も見せず、事務所へ行き着いた頃は、どこから見ても一家和合して家庭圓滿の樂に浴する仕合者と外見受けられなかつた。けれども斯う云ふ時に出喰はす訴訟の對手があつたらそれこそ飛んだ災難で、辯護士先生姑や細君に痛められ毒附かれた不平をすつかり其方に向け、古びた書類から毒氣邪氣あらん限りを吸ひ出して思ふ樣吹き掛けることであらう。〔ハックレンデル「新頓機翁」に晃る〕

あきらめ

大塚楠緒子

電燈を忌んで態と趣ある銀燭を選んだ夜の川端の二階座敷の障子に、その時影法師が三つ映つて動いた。

たはいなく五體を搖る大入道と、合點々々を爲るのが癖の丸髷を載せた布袋と、今一つは人間が理想通りの美を土で固めた人形とも有らうやうな横顏を映してゐる潰し島田、潰し島田が格子戸を潜つて翻る袂から二枚襲の絳絹裏がこぼれた時は、其背に長く繋がつて居る龜甲繋ぎの厚板の帶の上には延喜の好い切火が散つたてあらう、散つた切火は情の花で島田の一を結へた白元結には生れて今年十八の憂世の義理を強くからんでキチンと切つて留めてある。

障子充滿に映つてゐる三つの影法師は入り亂れて切りに荒くれるが、當の三人は行儀よく鼎の足を三つ離して遠く置いたやうに相對して座つて居るので、雪輪大盡の禿頭とお内儀の廣い額とが強くはち合せをしたやうに見えたのも、其實些細な二人の身動きに過ぎない。

中には茶器が出てゐる火鉢が侍べつてゐる紋緞子の座布團に舞鶴が羽根を擴げて、盃洗の水に模樣の鯉が尾を振つて吸物の柚の香がかをつて燒物の小鯛がピンと鰭をはねて居る、未だ此他に物の音があつた、歌はさる貴顯がものせられて手は杵屋の某が付けたといふ今年の新曲で、彈いた小艶の冴へた撥音

は此處に響いて欄間の蘆の葉の彫刻から拔けて、廊下を傳ふて泉水の傍から常夜燈の蔭を出て、夜深い小路を迷ふて通る忍ぶ男の腸を抉つたに違ひないのである。轉軫を捩つて絲を緩めて三味線を側へ押し遣ると、

『さ、お一つ、』

と銚子を取つて品よく小艶は膝り出た、華奢な膝には金絲の霞がたなびいて江戶褄には蝶が舞ふてゐる。

雪輪大盡は快く猪口を受けて、なみ〳〵とつがせてぐつと一息に飲み干すと、

『一つ往かう、』

と短い頸から衣紋が切りに冠さつて來るのを、氣にしては手て搖り上げ搖りあげ莞爾と合點々々許りして、肥えた身を太儀さうに持ちあつかつて居るお內儀に向いて猪口をさす、

『へえ、へえ、私に……　……ありがたう御座います、』

と片手をついて片手を差し出すと恰も月の家のお內儀が雪輪大盡の胸倉を取つた樣に影法師は障子に映る、胸倉をはなして當身を喰つて仰け反つたやうに見えたは、美しい小艶の酌で是もなみ〳〵と一雫も殘さずまゐつたので、赤ら顏をまた赤くして猪口を口元から離すと、五十といふ歲を白髮染粉に染めて隱して、四十と見せて悅んで居る其丸髷を丁寧にひとつ搖つて、

『ありがたう御座いました、さ、御返盃……今年も何うぞ相變りませず御贔負を……』

一年中に二度とはせぬ改たまつた樣子をして、肥えた身を苦しさうに平たく辭儀をして、

『旦那の御富貴も相變りませず小艶さんの美しいのが變りませんのも結構ですが、私のこの布袋のやうな肥つちよの體の相變りませんには困つちまひますよ、年中瘦せたい〳〵と氣を揉んで、それが氣病になつて瘦せてもすれば好いんですが猶の事斯う肥るんで御座いますもの、私や二日の初夢に何うか彼のソマトーゼの看板ね、あの、そら、瘦せた方の人間の見本ね、あの通りに瘦せた夢を見ませうと思つて一心籠めて寢たんですがね、』

『ほゝゝゝお内儀さん、それで瘦せた夢を御覽なすつて……』

と縫刺入の手巾でそつと口を蓋ひながら堪へ得ぬやうに十八の小艶は笑ふ。

大盡は微笑を含みながら椀の魚針を箸で挾みあげてゐる。

『ところがねお聽きよ、私が往來を步いてゐると向ふから農夫が車に充滿何だか積んで來るんだね、うつかり私は步いて往く、向ふはせつせと車を引いて來る、それてとう〳〵衝き當つちまふのさ、夢だよ話なんだよいやだよ小艶ちやんは、眞面目な顏をしてさ、』

小艶は淸しい二側目を見張つて、優しい眉と眉とを寄せて夢ならば夢て氣の毒な夢と聽いて、

『だつても危なかつたはね、それて何う爲すつて、』

『するとね、それが薩摩芋を充滿積み上げて來た初荷の車なんてね、其農夫が濟みませんてあやまつて、此お芋を悉皆貴君にあげちまひませうつて言ふのさ…… そうら、薩摩芋は肥る性分の者

には大毒だつてお醫者樣に言はれてるんだらう、その薩摩芋を皆悉貰つて悉皆一人で食べちまつた夢を見たんだよ、」

「ほゝゝゝ、まあ、それじやあ今年は猶のことお肥んなさるかも知れないはね、」

「それだから事だあね、ねえ旦那、旦那の御贔負が變つちやあ事てすけれども、この上私が肥り出すのも事じやあ御座いませんか、どうにか新年になつたら體の造り替は出來ないもんで御座んせうかね、これて世間には變つて好い事と變らないで好い事とが御座いますはね、私の體なんざあ第一ばんに造り替へが爲て欲しいんて御座んすけれど、ねえ小艶ちやん左樣ちやないかへ、」

「ほんとうに左樣てすわねえ、」

お内儀の合點々々に合せて、白襟に濃い勝色を三枚襲ねた細い頸を傾げて小艶は莞爾する、うつ俯いて居た雪輪大盡は不意と吸物椀を膳へ置くと、猪口を取つて酌を爲せながら

「變るといへばなあ、新年になつてから變つた事があるぞ、」

と胡座を組んだ大島紬の膝を搖つて禿頭を擧げる、

「へえ、」

とお内儀は、ちよいと衣紋を拔く、

「なによ、朝路よ、朝路が家内を貰つた時分は評判だつたらう、」

「えゝえゝ、その子爵のお孃樣をお貰ひなすつたてえ時て御座んせう、大騷ぎて御座いましたとも

ね貴君、あの氣の通つた男振の好い朝路さんが奥樣をお持ちなすつたてんて、彼方でも此方でも落膽する女が澤山御座いましてね‥‥

と小艶の顔を、ちよいと横目遣ひて見る、小艶は澄ましたもの行儀よく膝に手を重ねて他所を向いてゐる、

「さうか、所が、其家内を離縁したよ、」

「へえ、」

とお内儀は言つたぎり眼を丸くする、

「然も暮の大晦日にじや、元日から獨身者に成る積だつたんだらう、」

「まあ、朝路さんが彼の奥樣を‥‥旦那眞實で御座いますか、」

と小艶はそつと片手を胸にあげて知られぬ樣に動悸を靜める、指輪の眞珠が燈に青く光る。

「眞實にも僞にも、お前が御願てもかけて其願が通つたんだらうつて會社ぢや専ら噂しとるさうだぞ、」

嬉しさうに立腹て見せる其美しい顔を笑つて遣らうと、大盡は福々しい頤を無雑作に差出しながら、此女の容貌に他に申分は無いが惜しいこと少し生際が亂れてゐると、いつも思ふことを思ひながら、熟と小艶の面を見詰めると、

「あら、何の御願て御座いませう、」

と小艶も瞬がぬ。

「どうぞ朝路さんが奥様とお切れなさいますやうに、さうすると私が奥様に成る、」

お願をかけるやうな口振て一口に言ひ切つて雪輪大盡は笑つて居る。

「あら、私が……ま、旦那、私、そんな無慈悲なお願なんぞ……ねえ、お内儀さん、」

「何うだか知りませんよ、」

とお内儀は態と莞爾して知らん顔をする

『ま、お内儀さんまでが……私、何う爲やう、」

眼には憎い程の愛嬌を湛えてゐるが、自烈度さうに唇を震はして默つてしまふ、大盡は切り込んで戯ふ、

「ハヽヽ、朝路の奥樣に成つて見ろ小艶、今に山子樣が死んで幽靈になつて化て出る、ハヽヽ、」

大盡が笑ふお内儀が笑ふ、それにつらされて小艶も冴えぬ顔をして微笑むには微笑んだが、悄愴としたのである、それて優しく悄然とした其姿は障子の影法師に風情の多い墨繪を畫いた。

「おや、朝路さんのお話ですつかりお燗が醒めちまつたよ、」

とお内儀は思ひ出したやうに德利に掌を觸れて見て、後の柱のボタンを押したが下座敷には醉漢の罵る聲のみがして女中は一向に來ぬ呟きながらお内儀が立たうとすると、

「私が往つて來ますは、」

と小艶は靜に銚子を持つて座敷を出た、霞に蝶の舞ふてゐる裳裾は美しい人の後に從ふてする〳〵と

かれて梯子段を一つ一つ、まこと霞に乘つた蝶の羽がへのやうに飜る。

「朝路さんが奧樣と切れた、朝路さんが獨身者にお成りなすつた、」

と自分で自分に咡いて小艶は小さい胸に繰り返しくりかへし、十三の梯子段を十までは嬉しいと思つて下りた、けれども、殘る三段は悲しいと思つて下りて、十三段目の梯子段から蝶が舞ひ狂ふたやうに、薄桃色の長襦袢を花吹雪のやうに蹴出してとんと下りてしまつた時は、撫で付けた鬢の端からおくれ髮がはらりと頰に、小艶はぞつと望の無い穴の中へ落ちたやうな氣がした。

戀は目に付く鼻に付く、誰さんが誰に慕はれて誰さんが誰に嫌はれて、誰が誰に艶書をしたとか爲ぬとか、逢つたとか逢はぬとかの其中で、小艶は更に熱する相手なしに今日までを過した、逢ふての嬉しさ別れの憂苦さ、其の樣な味を知らぬは愚か、彼男ならばと打ち込まう相手の更に見付からねば、目のまはる樣に其方此方へ招がれても歌ふて彈くは身の勤め、その他に何があらうと、朋輩の小品と或夜火鉢の側に雜談の末、

「私の惚れる樣な男は無いんですもの、」

とつい大きな口をきいたのを姉さんに聽かれて、

「小艶ちやん、そんな生意氣な口をおきだと今に罰が當らうよ、」

と嗜められたがその通り全く間もなく罰が當つた。

某會社創立十年の紀念會といふものが有つた、その時にまことに姉さんの言つたのが眞實て私が生意

氣てあつたのだつく〳〵思つた、右左が松竹梅で中に壽老人が鹿を連れて立つた三幅對の掛地がかゝつてゐる床の間を後にして、淡泊と何時も奇麗にお遊びなさるんて私等の仲間には大變評判の好い、あの雪輪大盡が座つていらつしつた其次の次の又次てあつた、

『お歳は若くつても、もう直に重役にお成りなさるんだとさ、そら、御覽よあの方を、』

つて半玉が十人揃つて、踊る用意をして前に立膝を爲てゐる後で、三味線の調子を合せてゐる私の背中を履突いて、小品さんが敎へて呉れた其方の方を見ると、色の白い眉毛の濃い、見えたは其れぎり、私羞明しくつて……すつかり私は其時から生意氣てはない。

十時頃には、何十疊敷といふ大廣間にきちんと並べて有つた何十枚もの座布團に、きちんと乘つて居た大一座はもう全然お酒浸しに崩れてしまつて、醜ない程亂雜に成つた時戯ける男なんぞが出來て煩さいから私は玄關の方へ退いて居ると、後から不意と彼方が往らしつて外套をと仰しやる、吃驚するやら嬉しいやらに、そは〳〵して外套を渡してあげながら、そつと私の名刺を隱の中へ入れて置いた、さうして外套をふうはりと後から着せてあげる時、

『もし、所天、』

つて自分の胸の底の底の方へ刻み込むやうに口の内て言つて見た。

名刺には、よし町篠屋小艶つて書いてあるもの、誰だつて固氣なお嬢さんの名とは思はないから、御覽になつたら何とお思ひになるだらう、其儘破つておしまひになるかしら、又他人にお見せになるかしら、

お机の上なんぞへお置きなさつて親御樣のお目になんぞ入らうものならびり〳〵と邪險に裂かれて仕舞つて……必定その時は私の名の書いてある紙が破かれるんだもの私の骸も痛いと思ふかも知れない、えてお年寄の方なんぞといふ者は藝者とさへいへばもう狐や狸の樣に人を魅すもんだと思つていらつしやるけれど、私はつひ昨日までも生意氣てあつた位なんだから……そんなに惡者ては御座んせぬ。然れども生意氣てあつた昨日の方は好い、生意氣てなくなると此樣にも苦しいものかと私は苦しんだ。するとまた歌舞伎座の鴻見物といふ事があッた、あの時往かなければよかつたのに、車引の場の幕で東の鶉へ新らしいお客を茶屋の男が送り込んで來たのを、つひちよつと舞臺から眼を離して其方を見ると、まあ彼の方ぢやないか、そして奇麗な奥樣を連れていらつしやる、遠方からでも私には能く見えた、丸髷に結つて細面へそれは〳〵濃いお化粧をして、金鎖がぶら〳〵とお胸の所へかゝつて、それて御夫婦並んて醜いやうに接近て御一同に番附を見ていらつしやる。

朝路さんが子爵のお孃さんと御婚禮なすつたつてい事は評判だつたけれども、なにも彼樣に見せつけて下さらなくつてもと芝居に來てゐることも何も斯も忘れて仕舞つて腹が立つ動悸が打つ、戀しいと忌々しいと妬ましいとて私の眼は血走つてゐたかも知れない、

『小艶ちやん御覧よ、梅王の着付が好いじやないか、そら松王が出て來た、彼の俳優の臺詞は胸がすくやうて好い、』

なんて小品さんの聲が直耳元てするけれども其樣な返事は爲て居られぬ、其内幕切になつて、つうと幕

が閉つて往くと見物はざわ〳〵と立上る、向ふを見ると、まあ奥樣は彼の方の肩へ手を置いて立ち上らうとなさる、痺でもきれていらつしやるのか知らないけれど、此大勢の中で何て甘つたるい。えゝ彼樣に仲の好いあの御夫婦の中が惡くなつて、いつそ御離緣になつて仕舞へばいゝ、左樣なつたら面白からうと、ちよつと私は思つた、否ちよつと思つた事が明暮の思の種と成つてそれ柄と云ふもの、歌舞伎座の時の御夫婦の樣子が目に見えて私は其事ばかり氣にした。

妬といふものは恐ろしい御離緣は何も私が左樣思つてゐた夫故では無いにしても戯談にも旦那が彼樣仰しやるところを見ると、私がそれ程に思ひ詰めてゐたといふ事は全然他人に知られてゐる、あゝ恥かしい、それで今から假令朝路さんが私のものに成つたにしろ、夫れじやあ藝者のくせに私は卑怯だと思ふ。

私は厭でも、もう朝路さんは斷念て仕舞ふ。

梯子段を下りた其時其儘の姿で小艶は立つて斯う考へ込んだ、さらりと結ふた潰島田に、あくどい何の縺が有らう、細そりとした身に重く、帶も長う裾も長う、引かねばならぬ生立を只果敢なんだばかり、儘ならぬ憂世の性を、じつと白足袋の爪先に踏み堪えた。

「小艶さん何を茫然してゐるの、おやお燗てしたか、何うも濟みません、」

と辛と醉漢を玄關へ送り出した女中の一人が見付けると急いで來て燗徳利を取つて往きかけたが小走りに又立ち戻つて來て、

「小艶さん辻占をあげませう、」

と小艶の帶の間へちよいと紙片を挾むと、電燈の明るい廊下を急いで勝手の方へ彼れは消えた。
小艶は眠の醒めたやうに我に返つて辻占を見る、一寸四方の紙片に書かれた辻占は無言に彼女の運命を語る。

『おあきらめよ、』

私、ほんとに朝路さんを斷念める。

胸を据ゑると美しい眼に力が籠もつて口を結んで、きつと、ほの暗い廊下の突當りの壁の方を見込んだ、恰も我魂から離れてゆくいとし男の幻の其姿を追ふやうに。

二階座敷には雪輪大盡とお内儀との高聲が堪えず聴えてゐたが、此時二人の笑聲が合さつて、まるで福の神が舞ひ込んだやうな大笑の聲が陽氣に聞えた。

大入道と布袋の障子の影法師は何樣に成つて映つてゐやう。

觀音像

細越夏村

節竹の疎ら袖垣
枯耄けし柘榴と隣り
褐杉葉を透きて落ちたる
春淺き日は淡う
なんてんの葉を照らしたり。

霜溶の土粗れて
赭黑なるさざ波の
寒風に騷立つを
番ごま毛の鷄は
怖ぢげに片脚ちぢめたり。

青み兆しの枯芝生
四間滑れる小堤を
うねりて登る朽木段
いただき頭を消えて入る
叢株躑躅五つ六つ。

中より覗く白石の
觀音像の立ち姿
日蔭になりて眼を閉ぢし
想冥々のおん顏の
寂然たるよ坪の甍。

和歌　紫舟選

○　小池相良

木枯や裸形の森のたそがれに二月の花の香を思ふ時

知らぬ間に吾死にてゆく暮かとも寂しきこゝち冬の雲見る

たゞひとつ明星見えぬ霜月のうら風わめく高萓の原

日は入りぬ裾野十里は燒石と灰くずうちて氷雨するかな

相見けるその一瞬にとらはれし四人なれば此の苦しみよ

何草の芽かや寸ほど青かるをひた〱洗ひゆく春の水

天上のいと光ある星ふたつ持ちたまふかとみ眼にうたれぬ

○　渡邊甚之助

若やぎの聲はれやかに百舌鳥啼きぬ稚けなき日に歸れとやうに

刻々にものゝかげ見え火は燃えぬ今わが魂を燒き盡くすらむ

まひる野やむらさき空に一むらの鳥かもとぶと南する雲

あらぬ事おもふともなく思ふ日を人に問はれしはづかしさかな

面影をほしいまゝにも囚へけり前の日おもふ胸の牢舍に

木匠がみ佛刻む鑿の音かこだまするなり落葉の森

○　青山清華

夏の森眞白き百合の一輪に涼しき朝の君をしおもふ

君が戸はをかしく並ぶ松の間に遠暗の海みるに

よき

むらさきに霞は色づき鐘のおとは森にひろごり夕となりぬ

別れ行く君かのけしき桔梗は雨にそぼちぬ小草のなかに

二三輪雨にくづれてこの家のものがたりめく哀しき菊よ

松島や山の國めく亂松のうしろ茜に春の雪ふる

白鳥は光の神の御使のやうにあしたの海こえてきぬ

○ 鷲尾美雲

女名の柳の家や雛燕母待ちて鳴く春雨の朝

戸叩くに紙燭し行けば句の友は笠着て來たり雪になるらん

岸の木の水に沈みし一枝も小さき芽ふいて春の雨降る

春の星君知らざりしさきの世は小さき羊の瞳とぞ見し

誰やらの拗ねしさまとも春の水西に流れぬ南に折れぬ

秋草の白きは寂し唇の紅もて染めよ花のことごと（女畫師某し君に）

○ 大澤峽村

あかつきや母に添寢の首あげて苫に佐渡見し海おもふかな

曇日は病院出づる肩掛の伏目の人にうすあかりして

鈴ふれば羊よりきぬうなゐ子のやさしき目して母仰ぐごと

如月や山のまだらの殘雪のさまに羊のむれゐる野かな

○ 金城白霓郎

ひた〳〵と寒星ひたす山の上の大沼めぐりて凩の吹く

百千々の冥府（よみ）の魔者（まもの）の高笑ひさながら風は林に

哮ゆる

白鳥は花ふくみ來ぬ海のはて常世の春の島あるらしも

○　山下里子

朝明やたゞよふ雲の遠方にわれと云ふなる文字書きて見ぬ

磯の家茜色する夕ぐれを海苔しまうとて子らよびにけり

今更に遠き船路ぞなつかしき沖の島根のもやにくるゝ日

○　堀岡芳雲

鯨つく船かへりこず夜はあけて萬馬をどれる磯の朝潮

極月や天地（あめつち）枯るる淋しさに君が死を知り涙ながるゝ（親友某兄の死を悼みて）

○　村田犀川

内浦や君が白帆の西すれば上總の山は藍に落ちぬる

○　足立園守人

あゝ君よ小いさく弱きおのが身のとはの慰安の地を知りますや

○　井野暢光

やめるわがさちなき夢をたらちねのしのびます夜と木枯きくも

春の丘默思のわれに百千花語らふ風の暖かにして

○　大塚東籬

冬の月獄門ありし丘の上とおほばがかたる松にのぼりぬ

君と我胸の緒をたつひゞきかと夕の鐘をきゝて佗びぬる

○　小林狂霞

ゆゑしらず人なつかしき溫泉の宿の秋ぎりの中に君を送りぬ

さびしさや山駕籠つらせ君ゆきぬ萩に雨して暮るゝ溫泉の宿

三千里きみが御うたをたか誦うて目に泣く身のありとも思ほせ（撰者の君へ）

凩や寒寺の鐘のそら鳴りにおそれし冬の夜となりにけり

○　伊藤榮

妹逝きて淋しきゆふべ新星のちさきをみればたゞなかれぬる

殘星のさむきにひゞく鎚のおとや火花とびちる霜の鍛冶町

小春日やくるひ咲きする榅桲の枝につりたる丹ぬりとり籠

君が庭の草の莖とり笛つくりふけば音もよし夕月のまど

○　川俣冬青

野の草は花みな咲きぬふるさとの絹のやうなる霧の晴れまを

白雲は皐月みどりの山越えて海におつなり白帆おひつゝ

陽炎や海につゞけるみどり野の花草芽ふく日和となりぬ

ほとゝぎす生れし國の名も知らぬ稚兒のうれひをなくしきりかな

ふるさとや春蠶かうなる野の家に桑が摘むらむ指白き人

○　柳醉子

蝶のゆめさまさぬ程にすみれ野を輕うもひゞく春のかねかな

馬ひく子通るつゝみの夜は明けぬ歌のやうなる鈴もきこゑて

はるの雲丘とさくらとむつがたる君とわれとを包みけるかな

春かぜは桃散る庭のさむしろに飼蠶（かいこ）網あむ少女（こ）をふきにけり

君居ます野もせを君にひそやかにしのひてゆくによき霞かな

○　小川眞清

君もまたあるひはおなじおもひもて吾やおもふ
と懐かしきかな
野に立てば君がおもひもこもりつゝ我を吹くか
と風なつかしむ
たのしかることなど思ひ春の夜の灯影にひとり
照されてゐぬ
こゝろみに君失ひしあるまじき日などを思ふ一
人の夜かな
誰ぞやわが折戸たゝくは秋風の夜をたゞひとり
泣かむとおもふに
潮満てば灯ぞうかぶ廓町月に啼き寄る千鳥も見
えて
天の宮のみ柱きざむ大匠が鑿に散り來し屑か白
雪
灯ぞ見ゆるやさしき君はわがために座をば清め
て待ちつゝあらむ
うつくしき光は天に地にみちぬみかどの治らす
國のあけぼの（新年雑詠のうちに）
銀の車黄金の轂（こしき）おごそかに今ぞいてます天つ日
の御子

應募和歌は小石川區原町百三十三番地　尾上柴舟宛の事



摘草

摘草や馱馬のほとりに遠き丘　松濤樓
摘みまけて君が善き草妬みけり　同
摘草や這ふ子立つ子の一むしろ　同
摘草やいつ近よりし江の帆舟　同
摘草や梅の戸出てゝ柳の戸　同
摘草や雉子のほろゝに日はぬくし　同
積藁にぬくき堤の蓬摘む　同
摘草やいさゝか水を徒渉り　同
鹿になれて草摘む奈良の童かな　同
摘草や吸殻捨てゝ人通る　同
摘草や茶屋を出づれば徑三叉　同
摘草や行き〳〵て猶ほ桃の土手　同

遠山の花を餘所眼や草摘む子　松濤樓
麥を吹く風ほのぬくし蓬摘む　同
摘草や彼の高丘に君霞む　同
思ひ草忘れ草摘む二人かな　同
草摘む野供養の鐘の霞みけり　同
草摘や嫁菜と聞きて差しさ　同
摘草の屑を小川に流しけり　黄村
摘草や廣き構を一めぐり　曉川
摘草や黄楊の小櫛の落ちて居る　風村
摘草の袂をいてし手毬かな　松亭
摘草やリボンに風のそよと吹く　竹宇
摘草や籠置いてある岐れ路　芳雲
摘草や小川に流すげんげ花　風六
蝙蝠をさして草摘む女かな　總子
亡き母の好きな草摘む忌日哉　魔郷生
摘草や父の畑打つその畔に　瓢平
摘草や紅絹裏匂ふ草の風　園守人
草摘むや桃山を出て桑畑　水圃

摘草の嫁菜は籠に餘りけり　泰山
摘草や柳芽を吹く岸づたひ　蓼花
摘草や雲雀消え入る空を見る　輝星
摘草の遙かに汽車を眺めつゝ　蔚村
摘草や牛追ふ童餘所心　句法師
摘草や小笊抱へし隣りの子　福松
摘草のうしろ姿や赤だすき　溪山
舊道の土橋の草もつみにけり　東策
摘草や紫だすき緋のたすき　石楠花
油畫は野に摘草の姉妹　血紅星
摘草や小川を越えて里越えて　萍生
摘草や此處よ彼處と女づれ　柳醉
摘草や横に木立の畷道　虛舟
前垂にあまる蓬を袂かな　マカタ
草摘んで渡れぬ川に出てにけり　履友
摘草や語らぬ連を淋しがる　椿川
摘草や人好き顏の嫁姑　壺翁生
草を摘む田守の妻の噂かな　葦哉

摘草の人見て雁の歸りけり　菫哉
摘草の野に知りそめて人戀し　方外
君を待ち摘むとしも無く摘む草や　同
摘草や馬の鈴鳴る田甫道　沐雨
摘草や鳥居くゞれば石の橋　同
年よりの連れて草つむ日和かな　松籟
摘草や道はかどらぬ女連　同
草摘んで歸りは花の茶店かな　鬼仙
摘草や野末の寺の鳩の聲　同
摘草や人まだ知らず楊家の女　靑城
摘草や遠く行かざる病み上り　同
まゝ事の摘草を煮る土鍋かな　同
摘み摘みて草の重みや家遠し　馨花郞
摘草や我もして見む頰冠り　同
摘草やよく摘む女よく騷ぐ　同
摘草や姫にかしづく女ども　煙朗
摘草や長きに過ぎし妹が袖　同
摘草に湯治怠る日和かな　同

草つんで梅若塚をたづねけり　煙朗
摘草や遠のく京は霞かな　夕村
摘草や世を宇治山の片麓　同
摘草や一步一步に海見ゆる　同
摘草や伏見より出て淀近し　同
草摘みの道きく一文渡しかな　烏兵
摘草や人も來て居る向ふ山　同
摘草や大川尻に帆が見ゆる　同
摘草や踏切越えて五六丁　同
渡場やつみあらされし土手の草　同
摘草の句ある療養日記かな　鱗洲
摘草や野川の岸の忘れ籠　同
摘草の人の上飛ぶ鴉かな　同
摘草や遠山の雪見て寒し　同
草摘や近ければ寄る友が家　同
摘草や人戀しとて牛が鳴く　同
摘草の彼方妹山脊山かな　工刀
摘草の日記書く夜や雨至る　同

草を摘む春日の巫女や鹿を呼ぶ　鱸洲
摘草の小山に湯女と語りけり　同
草を摘む島の日和や黄昏れぬ　同
摘草や天の香臭山目に近く　同
摘草や女ばかりの夕渡し　磨劍
摘草の籠に田螺も交りけり　同
摘草や藪鶯のまだら囀く　同
子守女の子と飯事の草摘みぬ　同
摘草の包解きけり豆ランプ　同
摘草や丘の蕗の臺ほうけ立つ　同
摘草や霞の中の三河島　同
摘草やまだ畑打たぬ畑淋し　同
摘草にうかと廻れば人の脊戸　小魚
摘草や五人の中の道化もの　同
小いささに摘まで戻りし蓬哉　同
草摘んで歸ろとすれば小雨ふる　同
後寛も出てゝ草つむ島日和　同
摘草や炭燒く煙峯に立つ　同
摘草や五加木摘むべき約もあり　同
親の忌の翌日を摘むなる蓬かな　同
姉十二妹九つ草をつむ　同

摘草や姉の機織る杼の音　小魚
摘草や姉さんかぶり頬かぶり　同
摘草や都の鐘の野に霞む　へき生
摘みためて嬉しき艸や手に餘る　同
つみ草の幼き唱歌きこゑけり　同
摘草や人に覗かす兩たもと　同
摘草やよき籠置いて人遠し　同
鶯の餌艸も少しつみにけり　同
摘草や相離れてはふりかへる　同
茅花つみげん〳〵つみて暮れにけり　同
摘草の草いろ〳〵や湯治人　同
摘草のひとりは蓬尋ねけり　同
摘草やよい日のあたる丘の上　同
摘草の屑投げ入れぬ兎箱　同
乳母の子と仲よく草を摘みにけり　同
菫摘み蒲公英摘むや胡蝶飛ぶ　同
摘草やホ句詠む兄もつみに來て　同

募集課題
櫻　二月十五日限
蠶　三月十五日限

應募句は本郷區駒込曙町　大谷正信宛の事



墮落に理あり

正岡藝陽

女學生の墮落は當然なり

政治家墮落せり、實業家墮落せり、新聞記者墮落せり、文學者墮落せり、美術家墮落せり、墮落せり、皆墮落せり、女學生豈に墮落せざるを得んや、夫れ女は近松の所謂「松に絡む蔓かつら」なり、松既に捻くれたり、蔓かつら豈に共に捻くれざるを得んや、殊に女性は元來捻くれ性なり、直ぐなる松に絡むとも隨分捻くれたがるものなり、況んや松既に捻くれたるに於てをや、淺薄なる者よ、汝の名を女と云ふと名句を吐きたる者あり、淺薄とは何ぞや、簡單にして明瞭なる定義は、「墮落し易き者」に非ずや、女の性既に墮落し易き者なり、而して女以外の社會、盡く墮落し墮落せり、女墮落せざらんと欲するも能はざるなり、斯の如くにして斯の如き境遇に立てる女性が、假りに墮落せずとせんか、女は既に人性を失ひて神となりたるものなり、人の妻たり、人の母たるの資格を放棄したるものなり、

何人も一度はウオータールーに行かざるべからず、一生にウオータールーあり、一時代に一度ウオータールーあり、今は即ち國民のウオータールーなり、精神界の危機なり、紳士も學生も貴婦人も女學生も盡くウオータールーにあり、何者の子か、能く女學生の墮落を叱責するの權利を有するものぞ、今の時に於て墮落せずんば、女學生が墮落すべき時機は再び容易に來らざるべきなり、若し女學生の墮落にして果して罪すべくんば、女學生を墮落せしめたるもの丶罪は如何にして

て罰すべきか、

女學生の墮落は新聞に三面種を供給せり、ポンチの材料となれり、社會は此好個笑嘲の原料を得て狂喜喝采せり、然れども仔細に考ふれば、社會は女學生を墮落せしむべき一の學校なり、日本第一の政治家伊藤侯が日本第一の好色家たる事は今の男女學生を墮落せしむるに如何に勢力あるかを思へ、女學生の德操養成所たる女學校が、一種の野心家に依て經營せられ、其説く所の倫理道德の説が全然無勢力にして甚だしきに至ては寧ろ墮落を奬勵するの結果となる事を思へ、新聞雜誌は彼等に對して峻酷なる嚴父たらずして。往々胃に惡くして口を通るに易き菓子を與ふる慈母の愛に陷る事を思へ、而して近年の突飛なる女子敎育の發達は米國の精神なき米國流となり、突飛なる高襟女を製造するに過ぎざるものなる事を思へ、其他種々なる源因を探究せば、女學生の墮落なる者必ずしも女學生其者の罪と云ふ能はざるの理由に逢着せん、

女の性は微温なり、彼等は男子の如く極端まで冷かなる事能はず、又極端まで熱する事能はざるなり、而して微温湯は畢竟黴菌の生存に最も可なるものなる事を知らば、女學生が墮落し易き理由も自ら了解せらるべし、

社會は女學生を墮落せしめたり、而して其最も大なる責任者は女學校なり、其理想なき敎員、營利主義なる校主活氣なき德操なき全般の空氣は、可憐なる女學生をして淺薄なる功名心、際限なき情慾を助長發達せしむるの外何事をもなさゞりき、之れを譬ふれば女子敎育は猶後足にて歩む犬の如し辛うじて歩み得れども不恰好千萬なり、其敎育や既に畸形なり、吾人果して何の權利を以て女學生の墮落を罵るを得んや、今の如くんば女學生の墮落は寧ろ當然なり、吾人却て彼等の墮落に與(くみ)せん、

米國化(アメリカナイズ)は墮落の一源因

日本現在の女子敎育法は多くは米國流なり、此點よりして日本の女學生は主として米國化せられつゝあるが如し、而して此米國の女子の如く我國に誤解せら

たるものなし、日本人の多くは思へらく、米國の女子は一般に饒舌にして德操なく、輕卒にして我儘なりと單(ひと)り日本人のみならず、世界各國亦此米國の女子に對して眉を顰めつゝあり、如何にも此評語は米國の女子に對して恰好なる形容詞と思はるゝの點なきにあらざれども、彼等の中(うち)には大聖華盛頓(ワシントン)の母あり、倫古龍(リンコーン)の母あり、而して今亦ルーズヴェルトの母あり、米國の女子必ずしも爾く一概に罵倒し去るべきにあらず、

彼等の中には禁酒軍を組織して、隨處の酒屋を破壞して歩くお轉婆なきにあらず、子女の教育を等閑(なをざり)にして、旅行をのみ事とする高襟女なきにあらず、政治上の權力を得んとして運動する莫連なきにあらず、夫の葬式の歸途會葬者の一人と結婚を約束する不貞の女なきにあらず、然れども是れ其惡しき實例なり、之れと同時に善き實例も亦無きにあらず、米國の女子は世界の女子の中最も能く勞働する女子なり、而して又最も能く學問を好む女子なり、又比較的品行の方正なる女子なり、彼等は英國の女子に較ぶれば進取の氣象に富み、國の女子に較ぶれば操行正しく、獨逸の女子に較ぶれば美なり、彼等も亦各國の女子共に其特長を有せり然れども吾人の研究せんと欲するは彼等と日本婦人との優劣なり、日本婦人は常に偉大ある特長を有せり、博士ジョンソン曰く『余は貴婦人の伴侶たらん事を望む、余は其美、其柔、其活潑を愛し、且つ其沈默を愛す』と、而して日本婦人は此四の中實に三の多きを有せり美と柔と沈默と是れなり、斯の如く比較的完全に近き女子は日本を除きて世界の何れにありや、殊に其最後の條件たる沈默の如きは、日本婦人を外にして終に見るべからざる特長なり、彼等は男子より多く談ずるども少なくとも米國の女子よりも少く談ずるなり、或る一人あり、詩聖ミルトンに向つて『拙者の娘に外國語を學ばしめんと欲するが如何』と問ひしに、ミルトン答へて曰く『女は一枚の舌にて十分なり』と、彼れも亦女の饒舌に苦められし一人なり、日本婦人は此點に於て多く男子の煩累をなさざるなり、是れに反して米國の婦人はジョンソンの四個の條件の中僅に一の活潑

を有するに過ぎず、彼等の多くは家庭の主婦にあらずして社交の夫人なり、子を育つるの母にあらずして、夫と共に遊ぶの妻なり、夫と苦樂を共にするの妻にあらずして、一生を老孃（オールドミス）を以て終る處女なり、斯の如きは米國の女子なり、彼等に特長なしとは云はず、日本婦人が米國婦人に學ぶべき點なしとは云はず、然れども彼等が我等に教ふる部分は僅少にして、我等が彼等に誇るべき部分は多大なり、何を苦てか、日本婦人は漸次に米國化せんとはする、

東京は歴史ある地にして北海道は新開地なり、今吾人の忘るべからざる事は東京は日本にして、米國は北海道たる事なり、若し東京人が北海道の流行を追ひ、北海道の陶冶なき人民の品性を學ばゞ、世人は必ず其人の愚を笑ふべし、米國最短の歴史は未だ以て其國民の品性を養ふに足らず、流石に新開地だけの活氣は存在すと雖も、其活氣たる多くは物質的方面に用ひられ未だ品性の改善を計るに足らず、是れ「米國流」なる語が、一面粗野卑俗を意味する所以なり、米國の婦人も亦新開地の婦人たるを免れず、日本婦人の禮儀あり、修養あり、德操あるに比すべくもあらず、然るに日本の女子が一般に米國の粗野卑俗なる風習に倣はんとするは何が故ぞ、吾人は此傾向を以て極めて理由なき極めて不愉快なる現象となすに躊躇せざる者なり、

思ふに女學生の墮落と云へるものゝ如き、此米國化亦其一理由にあらざるか、德操を輕んじ獨立心を尊び柔順を後にして活潑を先とするの弊は今の鵺の如き女學生を生めり、米國流必ずしも可ならざるにあらず、唯日本の女子が之れを學ばんとするに至ては、吾人寸毫の可なる理由を發見する能はざるものなり、願くは今の女學生をして日本婦人の特長を自覺せしめよ、而して彼等をして善良なる誇榮心を發達せしめよ、或は以て墮落せる女學生を救濟する一法となすに足んか、

東京は墮落の根本

吾人曾て紐育にあり、倫敦にあり、巴里にありき、此等は皆一國の政治、商業の中心なれども、教育の中心は却て首府を離れたる田舍にあるを見たり、ハーバ

ート大學はボストンにあり、オックスフォードもケンブリッヂ大學も片田舍にあり、畢竟教育が政治商業の中心に依て何等の利益を享受せざるものなる事を示し、人格の敎育は寧ろ田園に於てするを可とするものなる事を示すに外ならざるべし、激甚なる生存競爭場裡に最後の勝利者たらざるからざる男子の敎育既に然り、德操を第一とし、溫雅貞淑を先きとすべき女子敎育を熱閙繁雜なる市街に於てする必要何れにかある、人間の歷史は都會に於て野卑に、田園に於て高雅なり、吾人は明治年間の一偉人たらんとしつゝある成瀨仁藏氏が、女子大學を東京に設立したるの賢明を賞讚すると共に又其設計が常人の常識以外に出る能はざりし思想の貧乏を歎ぜざらんとするも能はざるなり、されば一部の殘酷なる社會は、目白高臺を以て既に一種の伏魔殿となすに至りたるにあらずや、殆ど献身的に女子大學の設立に從事したる氏の功勞は後世の傳記家をして歎美崇拜せしむるに足るものあらんも、絕大なる思想家中或は女學生をして蝦茶式部たらしめたるものは成瀨仁藏氏なりと叫ぶものあるに至らん、

事務と敎育とは全然別物なり、東京は事務の地にして敎育の地にあらず、男子尙且つ東京の熱閙に避易せり、況や女子に於てをや、單に精神上に受くる害惡の大なるものあるのみならず、其身體の美を損する事幾何なるや殆ど測り知るべからざるものあらん、世人は今更の如く女學生の墮落に驚きたれども、何が故に更に多く男學生の墮落に驚かざる、女子を墮落せしめたるは男子なり、而して東京は最も多くの墮落學生を包含せる處なり、眞に其子女の爲めに計る者が最も墮落し易き年齡に於て、最も墮落し易き東京に其最愛の女を放つの勇氣に至ては吾人の殆ど驚嘆せざるを得ざる所なり、

女學生の墮落は日本全國を共通せり、然れども其根本は東京にあり、東京を以て女子敎育の中心となしたる明治の敎育家、歷代の文部大臣は當然人の子を毒したるの責に任ぜざるべからず、女學生は決して墮落したるにあらず、東京が更に墮落したるなり、其處には

墮落せる政治家あり、墮落せる學生あり、墮落せる事務家あり、墮落せる新聞記者あり、女學生と雖も亦共に墮落せざるを得ざるなり、善意なる保安條例を東京にある女學校に喰はしむべし、而して風光と人情とを以て誇る小地方に左まで大組織ならざる女學校を建設せよ、是れ實に女學生の墮落を救ふ唯一の方法なり、

教育家に罪あり

明治の教育は立身の爲にするの教育なり、帝國大學は多くの官人を供給したり、其他の學校亦一時は盡く役人供給所なりき、然るに役人熱の減縮と共に今は總ての學校は其態度を一變して會社員供給所たらんとするものゝ如し、斯の如き事務的教育は明治維新後の一大傾向にして、識者是非の論の存する所なりしが、今は此傾向は延ひて終に女子教育に及びたり、

事務的教育の弊は、當世の事務に通ずる實際的人物を作るに適切なるものあると共に、其大主眼たる人格の修養を無視する事なり、是れを以て明治の教育は、時務を知る才人を生み、官海浮游の熟練家を生み、巧妙なる幇間的事業家を生みたれども、終に一人の『人格の人』を生み得ざりき、是れ實に明治教育の最大の缺點と云ふべきものなり、然るに此非人格的の教育は延ひて女子教育の上に及び、其弊殆ど堪ゆべからざるものあるを見る、

古代の日本教育家は女子は人格の修養を主とし、之れに加ふるに僅少の讀書と手藝とを以てせば可なりとなしたるものなり、由來女子は日本の男子に依りて人格の點に於て頗る劣等なるものとせられ、保科正之の所謂「婦人女子之言、一切不可聞」と云へるが如き保守的思想は舊時の女子に對する一般の思想を代表するものなりしなり、極端なる斯る思想と雖も其中自ら一の眞理を含有せり、女子に對する教育は專ら人格を主として始めて女子教育の平均を保ち得るなり、然るに今日は其高等なるものは科學に重きを置き、普通なるものは手藝に重きを置けり、人格の修養は斯して漸次に等閑に附せられんとするもの丶如し、女子にして判任官たり得る今の世にありては恐らく女子判任官養成

を目的とする女子校をも生ずるに至るべし、是れ決して悪しき事にあらずと雖も、女學生墮落の一源因は確に現代の實際的教育にあり、而して玆に所謂實際的の語は日常生活に有用なる意味の實際的にあらずして、人格修養に對する實際的にして、人格の修養をも受けざりし女學校出の女學生は家庭に於て案外役に立たざる無能者なるが如し、

シュレーゲル夫人は其思想其文才に於て優に其夫と爭ひ得る人なりき、然れども夫人は常に其天稟の才を匿して裁縫を以て時間を費せり、人其故を問ふや、答へて曰く『妾は世に多く無用の書ある事を聞けり、然れども未だ曾て無用の襯衣ある事を聞かざるなり』と、而して夫人の價は其文才を恣にせざりし事を以て寸毫も減ずる事なきなり、否婦人としての價は却て之れに依て高められたりと云ふべし、何となれば、こは實に夫人が人格の人たる事を證明したるものなればなり、當今夫人の如き女子を女學生に求めて果して幾人かある否夫人の如き女子を作らんとするの教育家世に果して幾人かある、

女學生墮落に就て吾人は最後の斷案を下すべし、彼等が墮落せざるは不思議なり、彼等が先天的に墮落の傾向を帶びたるに加へて、時代は更に之れを其深みに陷れ、教育家更に之れを惡に導きたればなり、今の女學生が墮落するは眞に當然なり、

女子にして伊藤侯の如き醜聞を流して有名なるものあり、女子にして壯士の眞似をなすものあり、女子にして惡罵を以て鳴るものあり、而して人は以て一代の女豪となす、彼等或は眞に女豪ならん、然れども彼等の突飛なる行動と不自然なる名聲とは、他の女子をして其功名心を燃やさしめたる事幾何ぞ、女子教育は終に平凡主義ならざるべからず此意味よりして吾人は女子教育の復古を絶叫せんとするものなり。



文壇時言

醉美生
有頂天

▲正月の小說で僕の佳作と信ずるのは夏目漱石の「野分」(ホト、ギス)。田山花袋の「隣室」(新古文林)。鈴木三重吉の「山彥」(ホト、ギス)德田秋聲の「焚火」(趣味)。と「發奮」(中央公論)。生田葵山の「こんな人」(中央公論)と「覺醒」(趣味)。及び小栗風葉の「別れ際」(新小說)等である。此中「焚火」は三島霜川の作で「別れ際」は眞山青果の作であらうとの噂もあるが眞僞は保證は出來ぬ。又泉鏡花の「縣象」(文藝倶樂部)も見るべき作だといふ人もあるが、僕は未だ讀まぬから彼此れ批評する資格がない。

▲「野分」は力ある作物である。主人公白井道也を通してあらはれて居る一篇の大精神は讀者を感激せしめて、一種偉大なる崇高なる想念を起さしめる。此點に於て此作は近來の我文壇に類例のなきものであつて却て遙か以前の露伴の「五重の塔」又は「一口劍」などに籠て居る精神と氣脈を通じて居るもの丶やうに思はれる。「五重の塔」にはいろ〳〵の性格の人間が澤山にあつて其間の紛糾錯綜せる關係が、明かに實際の世態人情を反映して居るが如きに反し、「野分」は一人坊つちの二種と、此二種の一人坊つちと二人鴛鴦との對照位に止る單純な趣向であるが、單純なる趣向必ずしもあしきにあらず。道也の人格、道也の演說等は十兵衞と別方面に於て彼れに劣らぬ位に面白く明白に描寫されて居るのは流石に漱石の作であると感服せざるを得ぬ。

▲「隣室」は非常によい材料だ。且つ描寫も全體に於て頗る振つて居る。僕のこの作を讀んだのは夜更けであつたが何だかざわ〳〵する程深酷だと思つた。殊に朝、眼を覺ましてから旅館の主人が死人の鞄を探して居るのを見た所などは如何にもよく出來て居る。自然派の作家の主張と長所とを最もよく發揮したものとして僕は此篇を讀書界に推奬する。

▲「山彥」は去年の「千鳥」よりも劣るといふのが一般の批評だ。或はさうかも知れん。然しなか〳〵よく出來た。殊に局部〳〵には馬鹿にいゝ所がある。まアいはゞ俳句を珠數繫ぎにしたやうな文章だ。讀むには骨が折れるが嚙めば味が多い。此調子で書き馴れたらキツトエライ物が出來やう。

▲「焚火」はツルゲネフの「獵人日記」の中に入れても耻かしくない作だ。若し噂の如く三島霜川の作とすれば霜川の文才詩情なか〳〵驚く

べきものだ。何れ來月の本誌には氏の苦心の作が掲載せらるゝ筈であるから、若し「焚火」よりも一層勝れたものが出來れば、暫らく忘れられんとしたる氏の文名も亦大に揚ることであらうと思ふ。

▲「發奮」は面白い。青山巡査が活けるが如く寫されて居る。秋聲自らは調子が低くていかんといふて居る相だが僕は調子が低いとは思はん。尤も獨歩の「巡査」よりは少し劣るやうに思ふが、新年短篇中の一佳作たることは疑ない。

▲「こんな人」は讀んで居る中はだら〳〵して厭やな氣がするが、讀み了ればなか〳〵面白い作である。こんな人…坂河友行君が躍然として眼前にあらはれて來るのが此作の面白い處だ。

▲「覺醒」眼の附け處がいゝ。

▲「別れ際」筆も結構(コンストラクション)も奇拔な所がある。若し果して眞山青果といふ人の作とすれば、この位の腕があるのに、何故(なぜ)人の代筆などをやつて居るのか。何故(なぜ)花々しく打て出ないのか。甚だ譯の分らぬことである。今の文壇は最も多く作者の名に重きを置きつゝあるが、然し眞價のあるものを何時までも認めずに置く程沒眼識でもなくなつて來た。否な一面には大に新作家の出てゝ新方面の新趣味を開拓することを希望して居る。眞山君、君志あらば大に起ち給へ。

▲以上僕の佳作として擧げた所を一括して考へて見ると、新年の文壇に目覺しき活動をなした人は、最近二三年間に文壇に入つた人か、又は年齡(とし)餘り多からぬ人であつて、所謂老大家といふ人は一人も見當らぬ。僕は老大家を輕蔑するものではない。老大家も亦必らず其中には雄篇大作を出して世を驚かすの日もあらう。けれども讀書界の大勢は次第に推移し、十年前の第一流の人が漸く晴れの舞臺を去らんとしつゝあるのは爭ふべからざる事實のやうに思ふ。僕はこの勢は自然にして且つ頗る喜ぶべきことゝ信ずる。若しこんなことがなければ、文壇の進歩も發達も何處にか求むべき。進歩も發達も全くない筈である。我明治文壇の正さに一新時期に入りつゝあることは僅かに新年の小說を一讀して見ても明かに窺はるべき事實である。(以上酔榮生)

○君にそー褒められて仕舞つては僕の褒める分が無くなりそーて心細い、があるはあるは唯一つ、絕維瘂沈默居士と去年の今頃、いやそれよりは二三ケ月後である、氣まぐれにも名乘を揚げた登張竹風氏がある、持ち前の娑婆つ氣、何時まで落付く譯には行かぬ、遂此新春は出しやばり出た作物を、蹴張り世間が知らぬ顏とは如何したのか、鳴かば將に人を驚かし、飛ばゞ將に天に至らんとするには、三年の辛抱と相場の極つた處を僅に一年のそれにも足らず、之ばかりでも慥に褒める値はあろーゝ況んやその作物が、氏ならではと傾かしむる點を持つてるてはないか、先づ新小說に見えた「島の聖」を見るがよい、全體が心地の宜い突飛で以て一貫して居る、女子獨立論を唱へた內田秋子が釋迦の再生松尾の大覺者を、引かれる奴も引かれる奴、引く女も引く女だ、人目に掛りますからと態々大栗の樹の蔭まで連れ込んで、肩に手を掛けて接吻したとか、六錢貼用の戀人の文に胸躍らせ、勘當受けた親爺を尋ねて打つけに、「私

れ、お父さん、あの、結婚したいと思ひますわ」とか、その又親鸞も親鸞だ、自由結婚かと問ふたのに、秋子が「自由結婚といふ譯でも」と澁ろのを、鸚鵡返しに、「ありませんけれど、どうだ、汝、惚れやがつた」なども奇抜である、更に末段が大に振つて居る、得知ものや、篁村ものにはイヒゝとも言はぬ讀者も、漱石ものにはウフゝと言ふ、處が氏の此作に至つてはアツハツハツハツハアと底抜け笑をさせる、確に大笑一番口歪の如しだね、先あ斯うなのだ、理想の夫、大覺者の松尾先生は、竹の柱に茅の擔などいつたらおつに聞こえるが、その次が行かぬ、半襟と雑居寢の大白痴なのに愛想が盡き、欠びが仕たくなつて手詰の談判を試みた、其處だ、語の行掛り上覺者は「身心共に强健だ」と威張る、「お口は調法で」と秋子は消なす、「自分で自分のことを言ふのぢや、これほど確なことはない」と力む、「では角力を取らう」といふ、「面白い取つて見せう」と立つ、舞臺はこれからだ、夜は八時頃、二月の滿月彼方に懸つて、大空一碧紺背の布といふ時分だ、夫婦は庭に飛び下り様、一間の隔てを取つて突つ立つた、やつえつと聲が懸ると、男の手腕、肩に摑つて、背負投げ見事に投げ飛ばした、覺者の後頭は樹の根に相談申す、女は悠然と家に飛び入り荷物を大革鞄に仕舞つて、大島女郎衆さびに、それを頭に戴せて立ち去つた、惜い處で話切れ、チヤン／＼といふ寸法だ、何と何人も感ずらざるものはないであろー、筆の類は已に此邊りてあるが、更に深い／＼諷刺が籠つて居る、兩髮の理想を嘲り、自稱神佛の木偶たるを示す、本能滿足宗の御本尊が、靈光赫奕として示現して御座る、何と難有いことではないか、それを何ぞや、「物笑ひだ」などと他の人と一條繩で括つてかゝる評者はまだ若い、筆そのものが已にニーチエアニズムの本領に入つて行き合ひばつたりに動いて居るのである、文藝の海は廣いが宜しい、漱石により、藤村によつて範圍を擴げたそれは、更に新春に入つて氏の爲に擴けられたを喜ぶ、スウエフトの東來か緑雨の再生か、謹んで氏に向つて讚辭を呈する、趣味に見えた「めでたし」もこれも同巧異曲、誠にお目出度い作であるが、長くなるから、是で失敬する。

○いらいお喋舌で閑どれたから、氣を變へて眞面目になつて、今一人君の評に洩れた大作家をちよいと評して止す、今より十年以前の閨秀作家は、桃紅李白榮を一時に爭つた様に賑かであつたが、一葉死し、稻舟沈み、薄氷消えて、風々雨々次第に淋しみを覺えた今日此頃、獨り吾人をして意を强うせしむるのは大塚楠緒子女史である、女史の筆を取られたのは。一葉時代からであつたが、精緻の想、艶麗の筆、次第々々に進歩の跡が著しい、去年の早稲田文學に見えた「客間」も仲々好評の有つたものだが、此新年の趣味に出た「合性」も、母親二人の子煩惱に七ツ目の迷信の摑んだ情緒、左こそと誘ひ込まるゝ程に巧みに寫されてある、小山内八千代子の「錦像」を見たが、からつまらぬ、「葡萄酒」の方は筆だけはよい、が今分到底楠緒子女史の敵ではない。



犠牲

（島田孝之君を弔ふ）

横山源之助

一月十四日の萬朝報は、その電報欄に、富山農工銀行頭取島田孝之君の死を報じた。

島田孝之――政論中心時代より産業中心時代に變遷した今日、島田孝之の名は、餘り世人の耳に響くまい、特に中央より遠かつて地方の事業に鋒鋩を收めてゐた君の事であるから、其の死を傳へられて世間の耳目を聳動しないのも無理が無い。なれ共、我政黨發達史には、島田孝之君の名も、若干の價値を持つてゐる。

有體に言へば、我國の政黨なる者は、甚だ無意義で有る、無價値である。憲法行はれ、議會が開かれ居るといふに拘らず、我々平民の上より言へば、憲法も議會も、意味尠く、憲法や議會と併せ行はるゝ政黨なる者も、我々衆民の利害の交涉あると極めて尠い。故に政黨發達と言つても、怪しいものであるが、兎にかく政黨の現存は數十年の歳月に依つて成長したのが事實であつて有れば、その間に幾多の消長あるのを非認する譯にゆかない。のみならず、無意味にして愚劣なるが如き今日の政黨も、明治現代の文明と相交交して社會の進運に刺激を與へたとを思ふと、愚劣なるが如き政黨の實在も、嚴として、一種の意味を備へてる。特に世界の進運と交涉の薄い地方に至ると、教育事業にも金融社會にも勢力を分つて、政黨の實在は地方文明の有らゆる根底と爲つてゐるやうにも見受くる。であるから、假に政黨の實在は中央に何等の意味なしとしても、場所を變いて地方から見ると、侮るべからざる社會の一大現象と爲る。故に余輩は政黨發達史に於て一方に

は其の卒先者たり鼓吹者たる板垣退助大隈重信等の諸豪傑に敬意を拂ふと同時に、他方には地方に在りて其の根底を作りたる島田孝之君等の如き特志の士に對して、無限の趣味を以て迎へて居る。

否、大隈氏の如き板垣氏の如きは、其の功業は世に明らかにして、一代の崇拜を博してゐるから、餘り大した感興を惹かないが、僅に一銀行の頭取として、寂然として、世を終りたる島田氏其の人の如き人に對しては、余輩は言ふ可らざる感慨を以て其の死を悼むのである。

今より八年前だ余は農商務省の囑託を以て故郷富山縣に歸つた。一日、金澤市に趣かんとして、富山發の汽車に乘ると、車中、余の肩を撃つ者が居る、誰だらう、と顧ると、莞爾として君は余の傍らに座つてゐた。其れ迄は余は宴會其の他の席て君と言葉を換はしたとが有つたが、親しく膝を交へて閑談したのは、實に此時が初め其の後余の一身に特種の事情が出來して、君に身上を謀ると、交際日淺きにも拘らず、君は病軀を驅つて余の爲に盡力されたので、余は故郷には幾多の先輩あり知人はあるが、特に君の知に感じてゐた。唯、疎懶の性、屢々君を問ふをせず、否、故郷を去つて今日に至る、未だ一回だも問はなかつたのは自分ながら遺憾に堪へない。

けれども、斯んな事は一私情だ。余輩は、君が政黨勃興當時より、現代議士の田村惟昌君と共に改進黨の扶植に盡砕し、自由黨の稻垣示氏と相駢んで、地方の開發に當つたのを多とする者だ、て、幾多の風波に遭逢して節を變へず、進歩黨の勢力をして今日に至らしめたのは、君の力が與つて多いのだ。然かも改進黨の基礎略ぼ定まり、帝國議會の開會された頃は、君の資産は大方蕩盡され、君の身體は病弱に陷つてゐたのだ。

斯くて君は一二回代議士たるのみにして、その位置を後進に讓り、僅に農工銀行頭取の閑職に就いて、磅礴たる覇氣を抑へてゐたのは、心事憐れむべしてはないか。余輩は其の一身の經歷と其の心情とに無限の同情を寄する。

ア、郷里の先輩者たる孝之島田君は、僅に六號電報に其の名を遺こして、寂然として、世を終つた。——けれ共、例令其の心事は成らなかつたにせよ、農工銀行頭取として、前代議士として、地方萬人の聲に惜まれ乍ら、世を終つた島田氏は、なほ多福とすべきである。島田氏と同じく天下に先んじて政黨に奔走せるにして、未だ曾て代議士とも爲らず、農工銀行頭取とも爲らず、生ありて死せるが如き者、今日幾多幾千人あるか知れない。余輩は斯くの如き薄倖の人に對しては、島田氏よりも、更に、更に、更に一層の同情を寄する

思ふに、愚劣なる今日の政黨の如きにも、其の發達には幾多の犠牲者を出だして、悲慘を極めて居る。敢て之を以て島田孝之氏の靈を弔ふ。

漁師の生活

丘山生

(一)九十九里濱

一言に漁師の生活と云ふけれども、當然、處に依つて多少の差異あることは豫め御承知を願ひたい。玆に余の說かんとするのは關東で有名な上總九十九里濱に於ける漁師の生活を云ふのである。しかし餘所の濱に於けるのも大同小異、略〻推測が出來やうと思ふ。

序ながら一言するが、九十九里濱は近來避暑地として東京邊より海水浴客の入り込む者年々多きを加へて居る。余も去夏病を養はんが爲暑を此地に避け、凡一ヶ月餘も暮して見たが、避暑地としての此地の聲價は到底二流三流たるを免れぬと思ふ。何となれば旅舍の不完全、海水浴場の危險、漁場に伴ふ一種の臭氣等は、人工的設備を以て如何樣にも避け得られるとしても、又海水の鹽氣強いのと空氣の善い點は如何に他に優つてるとしても、第一の要素たる旅客の耳目を樂ましむるに足る天然の風致に至つては全然缺いて居る。この自然的風致の甚だ單調なるの一事は、如何に人工的設備を以てしても到底變ずることの出來ぬ欠點と云はざるを得ぬ。率直に現狀を云へば海水浴場としては凡ての設備が甚だ幼稚である、尤も費用の點からいへば比較的安く上ると云ふ一得はある。

(二)海上生活

一年三百六十五日、波が凪いてさへ居れば漁師は必ず沖へ乘り出す。海上は彼等の工場である、田畑である、役所である。彼等が生活の源泉は其處に湧くのである。彼等が終生の苦心と勞力とは殆んど其處に傾注されて終ふ。海上は彼等の精力を得るところで又精力を費すところ、海上生活は彼等の生命である、其れが無ければ漁師は無いのである。

一葉の扁舟を以て、荒れ狂ふ怒濤の山と谷との間を操りつゝ行く彼等は實に大膽である——尤も勇敢でなければ出來ぬ仕事ではあるが——而して又大なる熟練を要するのは勿論である。彼等とて人間である以上命の惜しくないことはない。如何に向見ずだとはいへ危險は知つて居る。世に冒險なことは幾らもあるが、凡そ生業として漁師ほど冒險なものは多くはあるまい。或は軍人は尤も冒險な生業と見られぬこともあるまいが、彼等にはそれ丈けの報酬がある、國家は大なる名譽 地位 金錢 を以て、それ〳〵功勞に酬ゆるの道が開いてある。しかし漁師にはそれがない。不幸にして難船すれば死である、死ねば死損である。賞讃る者は一人もない、悲しむ者は僅に彼等の親兄弟親戚位に止る、憐む者すら極めて少ない、意氣地ない奴だと云ふのが、彼が亡き跡の淋しき家庭を包む周圍の聲である。

當今科學發達の結果、天氣豫報が中央氣象臺から日々發せられるにしても、而かも猶天候の變異は依然として計られ難い者と相場が定つてる間は、朝のほど凪だからとて乘り出しても、何時何處で暴風の見舞を受けるかは、神ならぬ身の露知らう筈がない。朝々彼等が乘り出す時は、寒中雪の降る中と雖素裸になつて海中へ飛び込む、そして舟を押し艪をやる、實に勇壯に見える。しかし若しやこれが故郷の見納になりはしまいかと云ふ一點不安の念は、如何に馴れて居るとは云ふものゝ、又それが勿論一刹那の閃きではあるとはいへ、時として彼等の念頭に浮ばぬと云ふことはなからふ。彼等も彼等の妻子も毎日のことであるから平氣では居るものゝ、大袈裟に云へば朝々生別死別をして行くのである。一度乘り出した以上歸つて來ぬうちは安心が出來ぬ。「では行つて來る」との聲を殘して勇ましく立ち出た後姿を見たつ限り、一年待つても二年待つも杳として何等の消息のない者が、年々絶えることのないのは確かな事實である。或人が漁師に向つて、「廣々とした處を乘り廻すのは定めて愉快だらふ」と尋ねたら、「何で面白いものか、板子一枚下は地獄ぢやねえか」と答へて、頗る不平な顔付であつたと云ふ。無理も無いことである。

以上述べた通り危險は確かに危險である、しかし危險に對して彼等の神經は左程鋭敏ではない、之も習慣性と云ふものゝ御陰であらふ。殊に年少血氣にして冒險を好む壯夫に至つては、躊躇して無盡藏の寶庫に向ふの意氣組であるから、恐怖心の爲に元氣阻喪する如きことは全くない。六十七十の老者に至つては、一は衣食に餘儀なくせられ、一は利慾心からで、別段面白いと思つて行くわけばない。

かの詩人の想像と云ふものを擅にせしめたならば、四顧たゞ水と空との境にあつて、雲霧離合の變幻、日出日沒の偉觀、魚介海草の奇態等、嘗て陸地の人に知られざる奇々怪々の現象に逢着し、西に南に東に北に、一片の白帆を自在の翼として翔り廻る壯舉は、如何に詩人の限なき憧憬てあらふ、又人間界をかけ離れた大氣を通じて見ゆる星や月や、千里を貫き千尋の底を通じて流るゝ潮流は、如何に大自然の秘密を耳語く（ささやく）てあらふ。けれども彼等漁師にとつては斯んな事は何でもない、こんな事に彼等の神經は波動を受けるものではない、全く無感覺と云つてよい。彼等の目指すところは外にある、魚を獲るにある。であるから鯛なり鰹なり大きい光るぴん〳〵する奴が、釣れて釣れて目の廻るほどに忙はしく、殆んど食事を忘るゝと云ふ時が最も愉快だと云ふ、これは彼等の實地に語るところで衆口の一致するところだ。此時こそ眞に寶の山に入つて寶を拾ふの感があると云ふ、今に七十になつて沖へ乘り出す漁師の言に、此時の愉快は若い時も今も異らぬと云つたが、此愉快があつてこそ危險も忘れ苦勞も忘れて働くのである。

漁獲の種類

一年中の漁期は左の如く分れる、

一、當五月節より九月迄――鰹舟

二、當九月節より五月迄――揚繰舟（あぐり）、縄舟（なわ）

三、年中通じて――地引

四、四五月頃より六七月頃迄――コマセ舟
　　八月頃より三四月頃迄――蛤舟

「イ」鰹舟

鰹舟は十二人乃至二十人の壯夫を以て組織するのであるが、皆それぞれ部署が定つて居つて、彼等は其嚴格なる秩序的組織の下に、各が自（じ）任務に服するのである、彼等が各自の任務に忠實に全員一體として立ち働く樣は、實に感心するほど秩序的である。其組織は即ち次に示す部署より成る。

（親方）

船頭	一人
楫張	一人
中縮	一人
前艪	一人
船方	若干
餌撒（えこまし）	一人

親方は卽ち船主で例へば地主の如く、他の船員は小作人の樣な者だ。船頭は即ち船長で一切の指揮權を有し、其勢力甚だ盛んなものがある、他の船員の概れ無智無教育の所謂蝦夷坊（えんさうぼう）なるに反して、船頭は讀み書き算盤一通り差し支へなく、殊に人物を撰ぶのであるから、濱に於ても船頭たる可き人物は餘り多くはない。船方共が裸で水へ入つて、船や諸道具の揚卸をするのに、悠然船上に温袍を着て何かと指圖をして居る者

を處見るがこれが即ち船頭である。棒張は副船長の様な者て、船頭に故障のある場合代つて行くのてある。時としては親方自身船頭として乗り出すこともあるが、これは甚だしい不漁の時を除く外極く稀てある。爾其他の船員に至つては格別取り立てゝ云ふ程の等差はない。

さて彼等の舟出は大抵朝早く東の空のほの〴〵と白む頃てある、尤も天候の具合て船を出す出さぬは皆船頭の命令に依てするのてあるが、船出は早い方が善いのてある。何となれば鰹釣の第一着手はこませ（蝦の細かい様な異臭を放つ肥料として用ひるもの、別にこませ船て細かい網てとるのてある）と稱する餌撒いて、ほうけ網と云ふので餌をとるにある。この餌が鰹を釣る餌になるので、若し船出が遲くなつて此餌がとれなければ鰹を釣ることが出來ぬ、寶の山に入り乍ら空しく船首を回さなければならぬのてある。故に他の船よりも早く出て早く餌を取つて、早く鰹を釣つて、早く返つて高價賣をすると云ふことは、商略上より云ふも甚だ必要のことてある。餌として取つた鰯は籠の中に入れて大切に生かして置く、この生して置くことが面倒てはあるが甚だ必要なことだ。やがて滿帆風に孕せて二十里なり三十里なり沖へ沖へと乗り出し、鰹の群集するところを見て餌を撒く、餌を撒くのは即ち餌撒の任務て、是亦特種の技能に屬する、若し餌の撒き方が拙劣ければ水を埋めるほど鰹が群つて居ても、少しも針を食はぬのみか驚いて四方に逃げ散つてしまふ。これが巧妙な餌撒になると數丁の遠くに居るのも呼び寄せることが出來る。

鰹の釣り方には數種あつてそれに用ゐる釣針も各異つて居る、餌を針へ付けてやる場合は少い、金屬の光るのを隱す爲に河豚の皮て包んて針を用ゐる場合が多い、これは餌なしの空針てあるが魚は餌と間違へて無暗と食ひ付くのださうだ。尤も釣るにも特別の技術を要するので大に巧拙がある、下手な者は上手な者が十本も上げる間に僅かに二本か三本しか上げられぬ、それても利益分配の段になると等分てあるから、下手な者は上手な者の取つたのを貰う様なわけて、甚だ片身が狹い、小さくなつて船の掃卸等の場合には人一倍の勞役を取らればならぬ、それても同僚に愛されて居ればよいが、若し憎まれてゞも居様ものなら、沖へ行つて擲り倒される様な辛い目も見ればならぬ、人間界を離れた沖の彼方にも浮世の世智辛い風が吹くと思ふと、世に漁師となるものなか〳〵暢氣なものてないことが分るのてある。

鰹舟は通常朝出かけて其日の夕に歸る、これは夏季魚の保たぬ爲てあるが、時には五十里の遠きに出て、銚子房州邊迄も行くことかある。尤も鰹の釣れる時間は僅かに二十分か三十分の間で、附く時には無暗に附くが、附かぬ時は如何に群集して居ても少しも針を食はぬさうてある。てあるからたゞ往復に多くの時間を要するので、時に潮でも惡ければ伊豆大島邊迄流されて行くこともある。夕餌になつて沖へ泊ることもある。（夕餌とは朝とれかき餌がとれずに夕になつて取れるのをいふ）てあるから彼等は常に二日分の薪炭米水の用意をして行くのてあるが、一人一日一升の米を當てる。漁は最も多い時て一日百五十圓位。

又廻舟と稱するのは例へば房州なら房州へ出かけて、一旦其處

随する、そして其地の同業者を便つて行く、すると色々生話をして呉れた上に、旗亭などに招いて大に優待して呉れる。これは相互的に豫約がしてあるので、其代り向ふが廻舟て來た場合には同様に優待せねばならぬ。かくて彼等は其處て釣り得た鰹を賣り、薪水を求めて再び歸途に就くのてあるが、勿論天候の具合、漁の都合によつて數日間滯在することもある。

要するに鰹舟は遠航するものてあるから危險も從つて多い、殊に漁期が二百十日前後の風雨季にかゝつてるから、往々にして覆没の災厄に逢ふことを免れぬ。

「ロ」縄舟

秋もやう〳〵更け行いて草葉に朝霜の白いのを見る頃となると、鰹舟はやがて縄舟と入れ代るのてある。縄舟は鯛、鮫、鮪(まぐろ)等をとる舟て人員は五六人より七八人、最も遠航し時に三四日沖へ泊ることもある。殊に鰹舟の七八月に於ける如く當二月節の風雨季があるから、最も危險な者てある。船員は餌撒がないばかり他は皆鰹舟のと異らぬ。釣り方は鮪は鯛を餌とし、鯛はゆうと云ふものを餌とし、共に針へ餌を付けて降ろす、鮫は縄へ針を付けたのを引張る、これは餌なして鮫を引かけるのだ。漁は最も多くて一日に二十圓位のもの。

「ハ」揚繰船

揚繰船は二艘の舟を以て鰯類をとるのてあるが、鰯の有無を見、網を何處へ張るといふことは沖合が命合するのてある、沖合は鰹舟に於ける船頭と全然同一のもので、たゞ名稱が異つてるばかりてある。人員は片船二十人、總じて四十人を要する。一旦網を張ると二艘がそれを引き乍ら分れて、再び合したところて船中へ網を引き上げるのてある。尤も深山にとれる時には別に運搬船として、岸と彼方とを往返するのを一艘要するのてある。網は大鰯、脊黒、中鰯(ちうば)、いかい、じやみ等に依つて各異る。大漁の時には一日にして五百圓より八百圓の漁をすることがあるさうてあるが、久しく不漁續きの時には廻舟として房州銚子邊迄行くこともある。けれどもこれは鰹舟の如く沖へは行かず、常に船影の見えるところに居るのてあるから、別段の危險はない。

「ニ」地引

地引は誰も容易に見らるゝ如く、船二艘て網をを張つて磯に居て大勢て引張るのてあるが、大漁の時には二三百の人數て一日三千圓位の漁をすることとある、しかし近年絶えてかゝる大漁に逢つた事が無いさうてあるが、兎に角漁があればこれ程大勢の人が出て、これ程金高が上つて、これ程賑やかて、これ程景氣附ける者はない。これにも沖合(おきあひ)と云ふ指揮者があり、炊事及袋を干す等の後方勤務をやる「炊ぎ(かし)」と云ふのがある、又別に上納屋隠居と云ふのがあるが、これは平生網の出入繕ひ等を掌るものだ。地引ては鰡をとる時には鰡引と云ふのをやり、其他中鰯小鰯(じやみ)等により網は皆異るのてある。一言網に付て説明すれば地引は袋、網、荒手、網の四部より成る、袋は鰯の入るところ、網は麻糸、荒手は藁縄の網を云ふのてある。

其他のコマセ舟、給舟に就ては詳說することを略して置く。

新刊批評

▲結婚の秘訣　千葉秀浦・鹿島櫻巷著　左久良書房發行

收むところ男女の肉的及心的區別以下、曰く良人の撰擇、曰く結婚の修養、さては不幸なる結婚、生存競爭に立てる婦人等、通じて十一章、結婚に關して心得べき限りは細大洩らさず説いてある、(定價四十八錢)

▲小泡十種　三宅雄二郎著　丙午出版社藏版

三宅博士が、機に觸れ、事に感じて、その折々に記されたる一種の隨筆もので、文章體あり、口語體あり春蘭秋菊孰れ劣らぬ觀を呈して居る、博士の學識如何ばかり深く、趣味如何ばかり裕であるかを知らうと思ふものは、是非一讀すべきものである、(定價金四十五錢)

▲修養小話　赤松大勵著　森江書店發兌

印度は窮めて譬喩的小話に富んで居る國て、佛教の經典中にも巧に之を利用して長廣舌が試られて居る、此書は故赤松大勵氏が、一切經中より七十七種の面白き小説を拾ひ上げて和譯せられたので、言はゞ一種の東洋の伊蘇普フエーブルスである　(定價金三十錢)

▲天魔の怨　木村鷹太郎譯　眞善美協會發行

詩人シエレーをしてミルトン以後の大詩人と叫ばしめたのはバイロンの「カイン」である、此書はそれを譯したのである、譯文流暢でないとはいはぬが、之を口語體ならずとも、今少し和文脉に和げたならと思はれる　(正價金七十錢)

▲漫畫一年　小杉未醒筆　佐久良書房

小杉未醒氏は青年畫家の腕利きて、特にその着想の奇警と放膽とに於て知られた人だ、之に收めたところの漫畫は其數三百六十あるが、茶味、禪味、俳味のとりどり見る目に床しからぬはない　(定價金九十五錢)

▲不藏庵物語　幸田露伴著　橘南堂書店發行

唐銅の鏡、玻璃の鏡に一篇の趣向を案じて、それを人格化し、德川の昨日、明治の今日、移れば變る浮世樣々の風俗人情を、面白笑可しき寓言體の才筆に掛けたるもの、不相變の著者の文致面白からぬ筈はない　(定價金八十錢)

▲理想世界　デフオレスト著　警醒社發兌

僅々二十四頁の一小册子、基督教の教理により、國際、政治、實業、家庭、個人の五に分つて略述せるもの

▲唯神論　笹島天空著　文榮閣藏板

體裁は堂々たるもので、曰く緒論、曰く學問論、曰く宗教論といつた風に、また文明論、社會論、戰爭論それに結論とある、そして此次に更に

顧理論を著して大に宇宙の本源、生命の本源を論じて見ると前觸して居るが一として詔りて稍なるものなく、說いて詳なるものなく、淺薄晉劣讀むに堪えざるものである、おまけに文章と來たから物にならぬ、不消化の思想の發表は徒に印刷の容易なる弊である　（定價金五十錢）

▲筆子初枝の卷　　菊池幽芳著　隆文館發行

表邊は極めて謹直を粧ひながら、其實催眠術を弄し、腕力を用ひ、藥品を試みて、不義の慾望を遂げるらしい男がある、それは阿川瑞彦といつて、主任教員である、島初枝子といふ一美人はその部下の教員であるが、彼は之に懸想して色々思を寄つて居る、が美人には既に約婚の夫月田信一といふのがあるのだ、でも彼は意に介せぬ、小田濱美子といふ、これも多分彼が奸手段の下に自由にされて居る女であろー、それを使つて飽まて慾望を遂げんとして、遂に苦肉策を用ひて初枝に麻醉劑を呑ましたところで終つて居る、初枝の無二の學友に水野筆子といふのがある、之にも戀人昂月文雄なるものが出來て、或る夜その男の熱烈なる申出に甘き答を與へた折だ、岡燒の戀敵と見えて闇から棒に男の脛を打ち、脾骨を折つた廉がある、其曲者が、矢張り阿川らしいのだ、本篇題して筆子といふからには此方が主人となるのであろーが、それは次の卷を見なければ分らぬ、文は確かに老熟といはざるを得ないので、對話などは中々巧妙である、が事件が餘り作り物語の樣に、偶然と偶然が丁度旨く廻り合ふ場所が多い、例せば牛ヶ淵公園で筆子と花子と、文雄と逢ふあ

たり、續いて病院の庭なども如何であろー、先づ、細評は次の卷を見た上としやう（假金九十錢）

▲靈海新潮　　海老名彈正著　金尾文淵堂發行

現今の基督教會に於て最も勢力ある海老名氏の說演及び文章を輯めたるもの也。言葉並又は文章に於ては甚だ練らず思はるゝ節もなきにあらずと雖も思想は概して穩健なるを取るべく、殊に一種の氣骨、一種の意氣一種の活力を鼓吹せんとするの精神に充てるは喜ぶべし。青年諸氏の一讀に値す。（定價八十錢）

▲トヨハタクモ　　あやめ會編　佐久良書房發行

あやめ會詩集の第二編也。岩野泡鳴の作四、上田敏、高安月郊、小山内薫、山本露葉、河井醉茗、蒲原有明の作各々一、併せて十篇及び西洋の詩人及び野口米次郎の英詩數篇を収む。新體詩の中にて予は最も泡鳴のゝを好む。（定價四十二錢）

▲黒髪　　與謝野晶子選　金尾文淵堂發行

晶子女史の選したる佳詩五百首許りを收む。誦讀に値するもの少からず。（定價五十錢）

▲有美道　　青柳有美著　丸山舍發行

有美獨得の觀察を有美獨得の文章を以て記述したるもの、讀んで面白

からぬはなし。只だ餘りに少しの材料より餘りに大いなる問題を何の苦もなく論ぜんとするは餘りに太膽に失して却て滑稽に思はるゝ所なきにあらず。卷頭の「天地人」と題する短評は最も讀むべし。(定價四十五錢)

▲泡鳴詩集
岩野泡鳴著
金尾文淵堂發行

先きに泡鳴の著せる「夕潮」「悲戀悲歌」の二詩集を併せて一册としたるもの也。泡鳴の詩修辭の點に於て粗雜なる所あるは惜むべきも詩情は乃ちあり。讀んで一種の詩情の油然として胸中に湧くを覺ゆるは我現代の詩人中泡鳴を以て何人にも劣らざるものとなす。氏にして若し修辭の點に於て少しく心を勞せば恐らく現代の詩壇を獨歩するに足るべし。(定價五十錢)

▲母の面影
草村北星著
隆文館發行

文章稍々締りなきやうに見ゆれど、描寫は精細にして且つ同情に乏しからぬ書き振り、定めて婦人連に喜ばるべし。吾人は此篇に於て氏の力量の凡ならざるを確かめ得たると同時に今日の婦人連に喜ばれんとして書ける小說の到底吾人の趣味に合するものにあらざるを知り得たり。氏若し我中央文壇に雄飛せんと欲すれば今日の態度を一變せざるべからざらん(定價八十五錢)

▲自然界の矛盾と進化
加藤弘之著
金港堂發行

文學博士法學博士加藤弘之翁七十歲の高齡に達したる故、今後著述に從事することの難かるべきを思ひ、生前の置土產として發行したるもの也、此書委しくいはゞ「自然界(有機界)に於ける三大矛盾と進化就中道德法律の進化」とすべきもの也。即ち一般有機界の進化の大意を概論し夫れより委しく道德法律の進化の理を說明せり。平明にして分り易き說き方、流石に老實也。但し「せねければならぬ」的の誤りたる言葉使ひ所々にあるは慊らぬ心地す。(定價一圓七十錢)

▲日本小說年表
朝倉無聲著
金尾文淵堂發行

上は平安朝時代より下は德川時代の最後即ち慶應三年に至るまでのあらゆる小說を出版年代の順序に表にしたるもの極めて眞面目なる、極めて有益なる著作也。かゝるものに多少の趣味を有する人は是非座右に一本を備ふべし。(定價一圓)

▲宗教小說さゝにごり
村山烏逕著
佐久良書房發行

本誌の小說欄に屢々作物を掲載したることある村山烏逕氏の著也。精讀の上次號の誌上に批評すべし。(定價五十八錢)

▲天風魔風
兒玉花外著
平民書房發行

花外の詩は情熱の熾んなるを以て勝る。徒らに形式にのみ腐心して詩の眞の生命なき作物のみ蔓る今の詩壇に於てかゝる詩情の饒かなるものあるを喜ぶ(定價三十五錢)

▲懺悔　木下尚江著　金尾文淵堂發行

著者が今日に至るまでの周圍の境遇と思想の變化を精細に記述せるもの也。一種の追懷錄也。思出の記也。之を懺悔と名くるは題名いさゝか內容にふさわしからぬ心地す。文としては卷頭の「懺悔の苦痛」見るべし其他は氏としては寧ろ不出來と思はる。(定價三十五錢)

▲小鼓　正富汪洋著　佐久良書房發行

汪洋氏の長詩短詩數篇を集めたるもの也。伊藤銀月氏の序あり。(定價三十錢)

▲經世時言　建部遯吾著　同文館發行

建部文學博士の我が現代の時勢に關する論文數十篇を收めたり。博士は嘗に「政治的豫言者」を以て任ずるもの丶如く、言皆氣骨あり、文皆、血性あり。頗る一代の腐氣を警醒するの力あり。只時に文意晦澁の箇所あるは惜むべし。切に江湖憂世の人の一讀を勸む(定價一圓六十錢)

▲和歌入門　金子薰園著　新潮社發行

やれ初まなびの、やれ捷徑のと是迄類似の書物は隨分あるが、大抵型があつて、先づ初に一わたり和歌の作法があつたら、終に用語を集めてそれで濟ますのである、此篇は、さる常套を襲はないで、用語の類集などは膨張なく、唯如何にしたらば、初學者に歌の咏み口が付くであろーと苦心して、極めて懇實に、極めて平明に、宛から手を執つて教ふる樣に、歌の心ばえ、材の選び樣、語の調ひ方等を示したものである、(定價金四十錢)

▲中央公論春期大附錄號の計畫

本誌は來る四月を期して春期大附錄號を刊行し以て我丁未文壇の光彩を發揚せんとす。委細は卷頭に於ける豫告を見るべし